

# 周一郎舞台裏



segakiyui

# 1.シーン201

上品な調度類を配置した部屋、窓に向かって男が一人、肘掛け椅子に腰掛けている。歳の頃22、3か。俯き加減なのは、膝に載せた小さな冊子を読んでいるからだ。と、突然、その白い紙面にぼとりと光るものが落ちた。

「周一郎…」

低く押し殺した声が、しとしと降る雨の合間に滲むように消える。男の肩が僅かに震えている。白紙のページを繰る指が一瞬ためらうように止まり、再び目元から何か光って落ちた。

静かな雨の音、重く沈んだ薄青い空気感……………。

「カァーッ!!」 カチン!

銅鑼声が響いた。続いたカチンコ、夢から醒めたように人々が動き出す。

「いいぞお、垣君! 珍しく一発だ!」

「垣さん!」

いささか不似合いな三つ揃いを身に着けた少年が、何かを隠すように半分背中を向けている男のところへ駆け寄り、訝しそうに計算された絵になるポーズで相手を覗き込んだ。

「垣さん?」

「……」

「あ…ほんとに泣いてる!」

「っ!」

男はぎくりと体を起こし、慌ててごしごしと手の甲で目を擦りながら応じる。

「泣いてないよ」

「うそだ。じゃ、これ、何なの?」

ちょいと差し出された細い指先を男は不愉快そうに避けた。

「これ…は鼻水!」

「へええ、垣さんて、目から鼻水出るの!」

あははは、と朗らかに笑う少年の顔には、人懐っこい笑みが溢れている。年齢13、4歳。まだまだ幼い、けれども整った顔立ちの少年は、映画ファンなら一度や二度は知っている名子役、友樹修一。両親とも日本アカデミー主演男優・女優賞を受賞し、この世界での血筋を証明されたサラブレッドだ。

「で、出る時は出るんだ!」

「ふう、ん」

焦った男は垣かおる、修一の相手役として一般公募で選ばれた。駆け出しの役者で修一より10歳以上年上の25歳、だが今のところ完全に修一に呑まれた状態だ。

「修一さん!」

監督に向かって何かを話していた、ジーンズにセーターの20代半ばの男が声をかけて、修一と垣に近づいてきた。

「佐野さん、怒ってますよ。もう録画撮りの時間でしょ」

「え? もう?」

少年は手首の時計に目をやって体を起こした。

「ほんとだ! 垣さんほら、急がなきゃ」

「う、うん」

「高野さん、車」

「こっちです!」

踵を返す男に修一は急ぎ立てて走り出す。後ろから垣が慌てて従う。

「急いで!」「あ、ああ!」

撮っている映画の舞台となっている、レンガ塀に囲まれた豪勢な屋敷の玄関を出ると、黒塗りの車が3人を待っていた。運転席に座っていた上品な灰色のスーツを鮮やかに着こなした女性がちらりと3人に目をやる。

「だめよ、修一君」

「すみません、佐野さん」

ちらっと舌を出して、修一は後部座席に乗り込んだ。佐野は切れ者マネージャーだけに時間に厳しい。続いて高野が助手席に、最後に垣がかなり遠慮しながら乗り込もうとし、足をかけ損ねてこけた。

「でっ!」

「垣さん!」

はっと修一が腰を浮かせるのを視線で制して、佐野は淡々とからかう。

「そこまで演技しなくても結構よ、『滝さん』」

「は、はあ」

赤くなった垣が慌て気味に座席に滑り込むのに、修一はくすくす笑った。

「勉強熱心なんだよ、ね? 『滝さん』」

「ど、どうも」

ますます縮こまる垣に助手席の高野までにやにや笑いを顔に広げる。

「ねえねえ、佐野さん」

「はい」

走り出した車のシートから運転席に乗り出した修一は機嫌よく続けた。

「今日は何の録画撮り?」

「『猫たちの時間』と『京都舞扇』制作のエピソード、今度の『月下魔術師』の宣伝です」

「あ、周一郎シリーズ?」

「ええ」

さらりとセミロングの髪をゆらせて、佐野は肩越しに視線を投げた。

「じゃあエピソードに苦勞しないな、垣さんの事話してれば、すぐに終わるもの」

楽勝一っ、と歓声を上げると、佐野が視線を投げてくる。

「監督も一緒ですけど」

「監督？」

修一は脳裏を掠めた顔に思わず眉を潜めた。気づいた高野が問いかけてくる。

「あんまり嬉しくなさそうですね？ 修一さん」

「わかる？」

ひょいと肩を竦めてみせる。

「僕、あの人があまり好きじゃないんだよね……伊勢監督ときたら、すぐ僕（しゅういちろう）を苛めたがってさ」

確かにいろいろ癖のある他の監督達と比べれば、やりやすい相手とは言えるのだが。

「すぐ『周一郎』を怪我させたり倒れさせたりする方向にアレンジしたがるし？ 『周一郎』ってば『滝さん』にべたべたなのにさ、引き離そうとばかりするし？」

唇を尖らせると、佐野がひんやりと口を挟んだ。

「仕事ですから割り切って下さい。これまでの2作品もヒットしてますから」

「はあい、了解」

確かにそれは大事な要素だ。

修一は茶目っぽく佐野に頷いて見せた。

「着きました」

佐野の声に素早く周囲を見回し、ほっと溜め息をつく。

「良かった。今日の、あまり知られてないんだな」

「必死だったんですよ、録画撮り秘密にしておくの。垣さん、ほら早く降りて！」

高野がわたわたしている垣を急かせる。

「はいはいっ」「助かった。さすが高野さんだね」

それでも周囲を見回しつつ車から体を出した修一は、誰もいないのを確かめると急いで座席から滑り降りる。テレビ局の裏口は目の前だ。急ぎ足に入って行きながら呟いた。

「この前なんか困ったんだよ。変なのがいて、サインとか握手の代わりに触ってくるんだから」

気のせいかな、最近そんなファンが増えた。色紙を突き出す代わりに、手を差し出す代わりに、距離を詰めて肉薄してくる。男女問わず、このまま抱き締めにかかるんじゃないかというほど迫られる。それが一人二人じゃなくなると営業用の笑みでも強張る。

「友樹さん！」

中で待ち構えていた男が修一の姿を認めて声をかけてくる。

「3スタです！ 早く！」「うん！」

さすがに10年近く業界にしていると、修一が知らないスタジオやスタッフは少なくなってきていた。スタジオ番号を聞くだけで最短ルートを弾き出し、局内を走り抜けて行こうとした修一は、垣が入り口辺りでまだおろおろと戸惑っているのに気づいた。不安そうな顔で周囲を見回す男を見ていると、いつもほっとする。くすりと笑ってその側へ駆け寄る。

「垣さん！」

「あ？」

「こっちだよ」

くいと垣の手を握り、引っ張って走る。

「ちょ、ちょ、待っ」「待ってたら遅れちゃうよ！」

先に行く高野が3スタに飛び込み、肩越しに声を投げてくる。

「修一さん！ スタンバイ！」

「はいっ！ ほら、垣さん！」

「わっ…わ！」「げっ」

いきなり垣に引っ張られて目を見開いた。

（これは想定内だけど、今やる？）

呆れた視界がぐるりと回る。

「修一さん！」「っっ」「ひええっ」

カメラのコードに足を取られて垣が派手にこけるのに、修一も巻き添えをくらって一緒にひっくり返る。

（時間がないって言うのに。今更メイクさんも入れないってのに）

したたかに腰を打ち、かろうじて顔を庇って舌打ちする。

「わ、悪い！」「…」「修一さん、スタンバイ！」

再び飛んでくる声に、高野が慌てて修一に駆け寄ってきて埃を払った。一緒に走ってきたスタイリストも顔が硬直している。垣がようよう立ち上がるが、こっちはもともとたいした格好はしていない。

「早く速く！」「はいっ」「うへえっ」

駆け出す修一、必死に追いかけてくる垣、二人がセットの椅子に腰掛けて多少体を見回し落ち着くや否や、Qサインが出た。

「遅いぜ」「すみませんっ」

既に座っていた伊勢監督は渋い顔だ。もっとも、本当に渋い気持ちなのかどうかはわからない。何せこの監督はいろんな意味でしたたかで狸だ。それでも一応謝っておいた。

「こんばんは」

さっきまで泡を食っていたとは思えない司会者ののにこやかな笑顔がカメラを振り向く。びくんっ、と垣の背筋が伸びる。

深呼吸一つ。

修一はずっと前からそこに居て、和やかに談笑していたかのような顔で司会者を見やり、カメラの方を振り返った。

「土曜スペシャル、今日はあの『猫たちの時間』の周一郎役、友樹修一さん、滝役、垣かおるさん、監督脚本の伊勢潔さんに来て頂きました」

穏やかな微笑を振られ、修一は微笑み返す、20年来の知己のように。もっとも、この司会者の歳ならば、修一が生まれた時の情報番組も担当していたかも知れない。

「題して『猫たちは笑う』周一郎スペシャルです。私、納屋順一が司会をさせていただきます」「アシスタントの朝倉美華です」

一通りお定まりの挨拶が済むと、納屋は改めて修一を振り向いた。

「さて、まず、友樹さん、映画のヒット、おめでとうございます」  
監督よりも先に話を振ってくるのはセオリーから外れている。けれど、悪くはないんじゃないかな、印象作りには、と計算する。

「今、上映中の『京都舞扇』も連日満員ですよ」

美華も如才なく口を添える。

「はい、ありがとうございます。これもファンの皆様が応援して下さるからだと思っています」

にっこりと修一は嬉しそうに笑った。するすると横滑りして、始まった時から場所を変えていたカメラ、位置は知らされなくとも、どこにどんな笑顔を向ければ自分が一番よく映り印象がよくなるか、4、5歳からカメラの前に立っていれば否応なくわかる。

(訓練の賜物だね)

「あ、ちょっとシーンが出ました」

納屋が視線を移すのに、修一もモニターを見つめる。

『京都舞扇』で周一郎と滝が初めて京都の嵐山へ行った時の場面だ。滝のとぼけた表情が温かく周一郎を見守る。まるで年の離れた幼い弟を見守るような視線。

垣は決して素晴らしい役者とは言えないけれど、本当に『滝』は当たり役だ。浮世離れたこの男の、とんでもない包容力を難なく表現して見せる。

(垣さんの動きが少し固いけど……まあ、1作目よりはましか)

『滝』を見るとときにいつも感じるくすぐったさをごまかしつつ評価した。

「まあ、これが、今上映中の『京都舞扇』、周一郎シリーズの2作目ですね？」

「ええ」

「1作目が『猫たちの時間』、まあ、これで周一郎というキャラクターが初めて私達の前に姿を現したわけですが…」

納屋はついと手元の資料に目をやった。

(おいおい、そんな資料ぐらい覚え込んでおかなくちゃ)

浮かびそうになった冷笑を修一は巧みに消し去る。そんな司会者ならば、投げかけられる質問も予想がつく。案の定、納屋は如何にも視聴者の代弁をするかのように丁寧に進めてくる。

「友樹さんは、小さい頃から映画に…」

「ええ。父と出たのが4歳の時でした」

「確か『白い海上』……流水の上に置き去りにされる子どもの役でしたね」

「はい。あの時は怖かったです」

くすっと修一は笑みを漏らした。

繰り返される質問だが、甦る気持ちは変わらない。役者なんて意識もなくて、なぜあのとき父親が修一をロケに連れていこうと思いついたのか、今もまだ知らないままだが、わけもわからず流水の上に乗せられ泣きそうになった表情が、準備していたどの子役よりもカメラ写りがよかった。

それから、修一は次々と映画に引っ張り出されることになった。

「それからずっと、でしたわね」

「はい……と言っても、半分以上、父母と一緒にでしたから」

美華のことばに修一は軽く頷いた。

「お父様は友樹陽一さん、日本アカデミー賞主演男優賞を受賞された方ですね？」

「はい。『帰らぬ我が子』で頂きました」

「非行に走っていく子どもを必死に抱きとめようとする、穏やかだけど力強い父親の役でした、あ、出ましたね」

再び納屋の目がモニターに向かった。

修一は瞬時ためらった。

(穏やかだけど力強い父親)

確かに友樹陽一を語られる時に、必ずそのイメージがあげられる。

(けど)

そちらを見つめ、垣が激しい憧れを目に浮かべて父を見ているのに、妙に虚ろな気持ちになる。表情も一瞬翳ったかも知れないが、もちろん、カメラに映っていない時だ。

モニターの中で、聡明そうな父親が息子の腕を掴んでいる。親子で激しく言い争っていたが、息子役の少年がナイフを取り出すのにはっとした表情になり、突っ込んでくる息子にきつと歯を食いしばった。そのまま避けずに、ナイフを構えた息子を両手を広げて抱き締めるシーンに移る。ぐっとナイフが父親の腹に突き刺さり、息子が驚愕の表情で父親を見上げる場面でモニターが切り替わる。

「この父親像は、この年の教育界に大きな影響を与えましたね」

ほう、と垣が感嘆の吐息を漏らすのを、修一は冷ややかに眺める。

「お母様もまた日本アカデミー賞の主演女優賞を受賞された、友樹雅子さんです」

美華が笑いかけてくるのに、さも嬉しそうに頷いてみせる。納屋が再び資料を繰った。

「『夜の河』の主役、勝ち気で華やかなホステスの役でしたね？」

「はい」

(勝ち気で華やかな)

陽一とは反対に、そのことばは雅子を見事に表している。

モニターは『夜の河』の一場面を映した。

大柄の、けれど決して大味ではない女が正面に脚を組んで座っている。滑らかな脚にはパールの混じったストッキング、それでも吸い込まれるような奥の翳りに目を奪われない男の方が少ないだろう。言い寄りかけた男を平手打ちで跪かせると、体に張りつくような薄いサテンドレスにミンクのコートを肩から軽く引っ掛けてターン、細いピンヒールを高く鳴らして画面から消えて行く。

「そうすると、今度の作品は…」

我に返ったように納屋が修一を振り返った。

本当はもう少し続きを見たかったと納屋の目が伝えている。この後、雅子演じるホステスが、仲間に陥れられて男に無理矢理抱かれ続ける場面に繋がっているのを、視聴者はもちろん、修一もよく知っている。

雅子に奪われかけている意識を取り戻すのが腕のみせどころか。

「僕個人の映画としては初めてのシリーズということになります」

ちょっと頼りなげに笑ってみせた。ぱちぱちと指先を弾く。もちろん、修一にはそんな癖はない。だから納屋がおや、という顔で指先に目をやってくれる。有難いことだ。

「振り返っても演技を導いてくれる人がいないわけですから」

それは嘘だ。今まで父母が演技をつけてくれたことなど、一度もない。

「じゃあ、プレッシャーは大変なものですね」

納屋がどこか嬉しそうに笑みを広げた。他人の不幸は蜜の味か。

「そうですね」

修一は少し目を伏せた。視界の端にポカンとこちらを見ている垣の姿が映っているのに、思わず唇を綻ばせる。

「でも、役をやる以上、常に何かのプレッシャーはありますから」

胸を張り、頑張っている二世役者、の顔を作る。

「さすが、というところですね。ところで、垣さん」

「はっはいっはいっはいっ」

ふいに矛先を向けられてうろたえたのか、垣はどもって返答した。納屋が笑みを噛み殺しながら、

「垣さんは確か一般公募で選ばれたんですね？」

「はいっ、そうですっ！」

「役者志望で…」

「はいっ」

「選ばれた時のお気持ちは？」

「嬉しかったです！」

(あー、上がってる)

修一は小さく溜め息をついた。真正面を向いて答える垣は、納屋が求める会話になっていないことに気づいていない。もちろん、カメラの位置にも気づいていない。今のままでは画面の彼方を眺めながら選手宣誓をしているスポーツマンのような状態に映っているはずだ。ぴいぴいと伸ばした背筋、口以外は動かそうともしない。

「一般公募というのは、どなたが」

これでは話にならないと踏んだのだろう、納屋は早々に垣への質問を切り上げた。顔を紅潮させた垣は、番組の視点が自分から移動したことにも気づかないまま、不動の姿勢を続けている。

「僕です」

「友樹さんが？」

驚いた納屋の顔。もちろん、手元の資料には、その詳細は書かれているわけだが。

「はい。はじめ、脚本（ほん）をもらった時、周一郎シリーズの要が『滝志郎』だと思ったんです」

それは本当だ。今でも考えは変わっていない。

「やっていることや自分の可能性がわかっているようでわかっていないというキャラクターにぴったり合う人を見つけたくて、それで監督に一般公募をお願いしました」

事情通ならば、今修一が口にしたことがどれほどあり得ないことなのか、よくわかるだろう。映画は監督のものだ。役者が、それもどれほど有名であろうと一子役にしか過ぎないような子どもが、配役に采配を指示することはない。

だからすぐにわかるだろう、この映画は監督が撮りたかったものではなく、修一を売るためのものだった、と。そして、その背後に巨額のカネが動いたと。

どれほど隠しても明らかになる『構造』、だからこそ、修一は『ただの映画』としても楽しんでもらいたかったし、正当な評価が欲しかった。

「確か…1000人ほど、と聞きました」

やっぱり少ないよね、のニュアンスは、この場でしか響かない。修一は微笑みを保つ。

「それについては、私から」

さっきまで1人でニヤついていた伊勢は、のっそりと口を挟んだ。

「始めの公募で1000人に絞りました。これは、友樹君の相手役というので、様々な年齢、男女を問わずの応募がありました…いや、もちろん、滝、は大学生の男なんです、一目友樹君を見ようというのか、一瞬でもエキストラでも参加したいと言うのか、とにかく役柄の枠を越えた応募がありました。それを書類と写真審査で1000人に絞ったわけです。ところがまあ、そこからが大変ですね」

伊勢はニヤニヤ笑いを顔全体に広げた。脂ぎったチェシャ猫だ。

「その1000人の中で1人、これをどうやって決めようと思案していたら、友樹君が実に面白い方法を考えてくれたんです」

「面白い方法、ですか」

納屋が興味深そうに頷く。

「このシリーズ、脚本（ほん）を見てもらえばわかりますが、滝志郎という男は本当にもうひたすらドジな男でしてね、実によくこけるんです」

「は、あ」

納屋はわけがわからないと言った表情で頷く。

「それで、友樹君がね、役者としての演技はさておき」

垣が情けない顔をしてくれるとよかったのだが、相変わらず垣は不動の姿勢で固まっている。

「いっそ、すぐにこけられる人の方が良くはないか、と。要するに『こけ方』で300人かな、絞ったんですね」

「これはまた…」

納屋は微妙な表情で垣を見た。そこでようやく視線が集まったのに気づいたのだろう、少しきょとんとしていた垣は、助けを求めるように修一を見る。

「そうですよね、あの時、垣さんも『こけ方』審査受けましたよね」

番組進行どころか、今何を話していたのかさえ、ぴんと来ていなかったらしい垣が、友樹の振りに少し考え、ふいにはっとした顔になった。見る見る赤くなりうなだれてしまう。次に続く話を予想したらしい。

「しかし、それで300人でしょう？」

「次が名案でしてね」

伊勢は嬉しそうに揉み手をした。機嫌がいい時、特によからぬことを企んでいて、それがとんでもなくうまくいきそうな時によく見せる仕草、垣がさすがに警戒した顔になる。それを気にも止めず、伊勢はあっけらかんとした口調で続けた。

「スタジオの入り口にロープを張っておいたんです。で、何も説明せず、次々に候補者を呼び入れた。もちろん、大抵の者は何だこれ、と言う顔でひょいと跨ぎ越していく。少しわかっているのは、一瞬立ち止まり、スタジオの中を覗き込んで、えいやっと飛んでみせたり、大仰な振りで驚いて引っ掛かる真似をしてみたり、いろいろ工夫して入ってきましたね。真っ暗な中に張られたロープじゃない、どう見たってそこにあるのがあからさまにわかるロープだから、誰も本気では引っ掛からない。すると…」

「さあ聞いてみると言いたげに口を噤むから、仕方なしに納屋が尋ねた。

「すると？」

「なんと、それに引っ掛かる男がいたんですよ、300人の中で、たった1人」

「は？」

「垣さんだけが、ね」

つい思い出して笑ってしまったというふうで、くすくす笑って修一が付け加えた。見せ場を奪われた伊勢がじろりと見やったが、修一は軽く微笑んでスルーし、楽しそうに続ける。

「目の前にあるロープに引っ掛かってこけたんです。それで、僕、凄く気に入っちゃって」

「これはこれは…」

ADがカメラの外で大きく腕を回し、どっとセットの中で笑い声が満ちる。

「それも、垣にしてみれば、跨ぐつもりだったと言うんですな、けれどちょっと足の上げ方が足りなかったらしいと…」

ほんとですか、ほんとにそんな冗談みたいなやりとりを、と突っ込む声が響き渡る笑い声に紛れる。伊勢の解説に本気で笑い出したスタッフもいる。

「そ、それではここで一息入れて…」

美華が爆笑したいのを堪えた顔で促し、モニター画面がCMに切り替わった。

「ちえっ…」

安アパートの階段は、いつ塗り直したのかわからないほど錆が浮いた鉄製だ。へたな場所を踏むと、鉄なのにぎい、と妙な音をたててきしむあたりが恐ろしい。

「……まったく、散々だよな」

垣はぼやきながら、注意深く階段を上った。

「そりゃあ、あいつは名子役だよ？ けど、オレは違うっての」

ぶつぶつ呟きつつ部屋のドアの前に立ち、合板だかベニヤ板だかを薄い板で何度か補修した状態の扉を眺めて溜め息をつく。

(このアパートを出られるの、いつだろう)

何度目か考えたそれに、また小さく息を吐いた。

(まあ、今回も何とか、役はもらえたが)

エキストラぎりぎりの、通行人AとCとKの掛け持ちとか、数人転がっている死体の一人とかの役よりは数段、いやかなりうんとましなんだぞ、と自分を慰める。そりゃ確かに、ののしられたり嗤われたりするばかりの役だが、このドジでおっちょこちょいの、周一郎の引き立て役が全ての仕事のような、『滝』という役があるだけで、明日に多少の希望が持てる。

ネットやドラマによくあるような、映画がヒットして生活が一転するシンデレラボーイなんて、実際にはいやしない。ましてや、垣の暮らしは映画が二本ヒットしたところで、三度の飯が確実に食えるようになった、寝床に敷くシーツを新調することができた、そんな程度の潤いだ。もし、それ以上を望むなら、今作っている映画もヒットさせるしかない、ないのだが、その鍵を握っているのは。

(あいつ、なんだよなあ…)

友樹修一の笑顔を思い出し、どこまでいっても無力な自分がかっかりし、溜め息とともに肩を落として、ドアに鍵を差し込み、首を傾げた。

「？」

ドアが開いている。

(おかしいな。ちゃんと掛けてったはずだが)

それとも、朝慌ただしさに紛れて、閉めただけで掛けたと勘違いしたのだろうか？

(まあ、中に、盗むほど価値のあるものはないけどな)

それでも、誰かが潜んでいて脅されてというのは頂けない。今はこの体一つが食い扶持なのだ、失う訳にはいかない。

そうっとノブを回してドアを開ける。

部屋はいつも通り真っ暗だった。

(ビルの谷間のアパートなんか、借りるもんじゃない)

両側に人一人通り抜けられる程度の細い路地は繋がっているとはいえ、左右に見上げるようなビルが建っているのだから、基本、日光は差し込まない。薄明るくなるか、真っ暗になるか、その程度の差だ。昼間でも電気代がかかるわ、アパートの家主は環境改善には全く興味がないわで、借り手はほとんどいない。だからこそ、低家賃、だからこそ、垣でも何とか借り続けていられるわけだが。

灯をつけようと側の壁を手探りする。普段ならすぐに触れるスイッチが、今日は疲れ過ぎたのか、場所がうまく掴めない。

と、ふいにべとりと何かが手の上に重なった。同時に低いおどろおどろしい声。

「か〜〜お〜〜る〜〜う」

「ぎゃあっ!!」

思わず悲鳴を上げて、それでも咄嗟に見つけたスイッチを力の限り叩きつけた垣は、照らし出された室内にのっそりと立っている男を睨みつけた。

「宮田!!」

「はいな」

「てめえ、どっから入ったっ!!」

「ドアから」

相手は昔懐かしい牛乳瓶の底のような厚みの眼鏡の奥で、くりんと黒目を回して見せた。宮田周、聞いて驚け

、この悪友はこれでも。  
「そんなこたあわかってる！」  
「わかってるなら聞くな」  
「あ、の、なあ」  
じりっと垣は詰め寄った。  
「オレが言いたいのは、どうやってここに入った……か……」  
じゃらりと目の前に見せびらかされた鍵束を、思わずしげしげと眺めてしまった。銀色と薄金色の、形も大きさも様々の鍵が、およそ20、いやもっと繋がれているだろうか。  
「合鍵だ」  
「、どこの！」  
「友人のところ、全部」  
のうのうとした顔の宮田は、むしろどうしてそんなことを確かめるのかと言いたげな訝しげな声だ。  
「どうしてそんなもん、持ってるんだよ！」  
これは当然の質問だろう。が、それに対して、やはり当然のように宮田が言い放つ。  
「俺は刑事だぞ！」  
「は？」  
「国家権力に怖いものがあるか！」  
「あ…」  
垣はぐったりした。昼間からの疲れも重なり、一気に足下が崩れた。へたへたと座り込み、頭を抱える。  
そうなのだ、こいつはこれでも刑事で、しかも『かなり腕利きの立派な刑事』なのだ、世間的には。  
昔からそうだった、とんでもない発想ととんでもない趣味を実生活の中に巧みに入れ込み、しかも、他の誰からも糾弾されない立場を作るのに天才的な能力があり、ついでに、自分が迷惑をかけた友人連中を、「親切で思いやりがあって情け深い有難い友人だよな」と本気で言いきれぬ厚顔無恥さは人並以上。  
神はどうして、こんな男に警官になることを許したのだろう、だから神様なんて嫌いなんだ。  
戸口でべったりとスライムよろしく崩れていた垣に、しゃがみ込んで来た宮田がちょいちょいと頭を突いてきた。  
「なあ、お前んとこ、何も無いな」  
「……日本の未来はお前に蹂躪されるんだ」  
「何か買ってこいよ」  
「金はない」  
「嘘つけ、映画で売れたくせに」  
(国家公務員が三下役者にたかるんじゃねえよ)  
「おい」  
(いいか部屋に何も無いってことはお前にやるものなんか何も無いってことだ)  
「おいったら」  
(諦めろばやきながらでもいいからさっさと出て行け出て行ってついでに友達の縁も切ってくれていい)  
「ふう～～ん」  
宮田の口調が変わった。お、立ち去る気か、と少し顔を上げた垣の顎にするりと掌をあててくる。しっとり吸いついてくるような不気味な感触、思わずぎょっとして目を開けると、深々と覗き込んだ相手がねっとりした声で微笑んだ。  
「ねえ、かおる～、俺のこと、見捨てる気イ？」  
「すなっ！」  
垣は跳ね起きた。全身を粟立たせたまま、にんまりと嫌らしい笑い方をする宮田に吠える。  
「そう呼ぶなって言ってるだろがっ!!」  
「かおるん」  
「よせっつーのに！」  
「か・お・る～～」  
「宮田あっ！」  
口調に込められた独特の響きに、ぶつりと堪忍袋の緒が切れた。飛びかかろうとした垣を、さすがに警察官、軽くいなしてけろりと話題を変える。  
「窓に突っ込むな、危ないぞ。それよりさ、今いい役やってるじゃないか」  
「ぐっお…っ」  
「なかなか難しい役だよな、あれ」  
「え……あ……う……うん」  
勢いを逸らされて、思わず頷いてしまう。  
「周一郎役が確か、友樹修一だっけな」  
一転して、宮田は生真面目な顔で続ける。  
「ああ、まあ」  
劣等感を刺激されて不承不承頷き返した。  
「名子役だか何だか知らんが頑張ってる。まあ、でも、さすが親は違うよな！」  
「親？」  
宮田がちょっと眉を上げてみせる。  
「知らないのか？ あ、の、友樹陽一だぜ！」  
正直なもので、思わず声が弾んだ。友樹陽一のことなら、いくらでも語り続けられる自信がある。  
「『帰らぬ我が子』は本当に良かったよな！ それに『いそしぎ』だろ、『二十番目の娘』だろ、『古都の雪』だろ！」  
まだまだ作品数を上げられる。もちろん、中身についても、撮影秘話なんかも何度も読み込んで覚えている。  
「穏やかな、内に強いものを秘めた温かな人格者、か」  
宮田は何かをなぞるように呟いた。  
「そのままだっけよく聞かぬ。修一と組んでりゃ、いつかあの人とやれるチャンスがあるかもしれないと思っ  
てさ。大体、オレが役者になろうと思ったのも、あの子の影響が大きいんだ」  
長い話になると思ったのか、それとも何か話があるのか、腰を降ろす宮田に、今度は咎めることもなく垣も

座る。

「それに、あの奥さん。ほら、女優の友樹雅子」  
脳裏に浮かぶ雌豹のような激しい視線としなやかな肢体。情熱的な唇と潤んだ熱い瞳。  
「なんかこう……炎の女って感じでいいんだよなあ…」  
「知ってるよ、汚れ役が得意だっけ」  
宮田が食堂のメニューを読み上げるような素っ気なさで応じた。  
「そう！ 汚れているのをちらっと哀しむ色気があるってさ！」  
相手のクールさに煽られて、垣は熱く語り続ける。  
「ちらっと流した眼とかぞくぞくするよな！ 男と女の難しい場所をよおく知ってて、それでも渡らせてくれようって言うか、渡ってしまいたくなるって言うか！」  
それはある評論家の受け売りだったが、構うことない、垣も確かにそう思う。  
「両親とも素晴らしい役者でさ、人間的にも悪い噂聞かないしさ、あんな両親に育てられる子どもは幸せだよな、映画界のサラブレッドだよな！」  
生まれ落ちた時から成功を約束されている環境。芸能界の水に慣れ親しみ、今では、世間一般では少年と呼ばれる年齢でも、切れ者のマネージャーと付き人を従え、大人と対等にやりあい、明るく朗らか、苦勞など何一つ知らぬ顔で華やかな花道を意気揚々と歩いていけるのだろう。  
(あいつにはデビューの苦勞なんてわかりやしねえよな。はじめっから役をもらってるんだし)  
1シーン終わるごとにからかいに来るし、垣が必死にやっているのを眺めてはくすくす笑う。垣にとっては修羅場でしかない仕事場で、遊園地で遊び回っているように自由気ままに動き回る。  
(今日だってそうだ)  
垣を掌で弄び転がすことを楽しんでいるのだろう。  
「ほんとにいい役にいる」  
「あん？」  
ぼそりと宮田が呟いて、垣は我に返った。  
「お前が、だよ」  
宮田は妙な笑い方をする。  
「そこでだ、友人のよしみで」  
「誰が！」  
「じゃあ、他人のよしみで」  
「……」  
こいつは堪えるということを知らんのか？  
思い切り不愉快そうな顔を作ったはずだが、宮田は平然とことばを続ける。  
「これから、友樹に関すること、何でも教えてくれないか？」  
「どうして」  
「いや、実はあの修一、なかなかの美形だろ？」  
とっさに垣は壁際まで飛び退る。  
「お、おまっおまえっ」  
「ウチの婦警が知りたがっててさ」  
思わずほ、と溜め息が出た。苦笑する。  
「そうか……オレはてっきり」  
「てっきり？」  
「いや、お前のことだから」  
「うん、俺の好みでもある」  
「宮田っっっ!!」  
いやー、女子と好みが被るといろいろ困るよなあとか何とかぼやきつつ、飄々と出て行く宮田を見送り、垣は急いでドアを閉めた。  
「ったく、どこまで冗談なんだかどこからマジなんだか」  
全身にどっかりとした疲れを感じる。  
「マジじゃないと言い切れないのが、あいつの怖さなんだよなあ…」  
学生時代に、一晩付き合ってくれと言うから、飲みか麻雀かと思ってついていたら危うくホテルに担ぎ込まれそうになったという仲間の話もある。それが宮田一流の『お遊び』だったのか、それともがっちり『そっち』だったのか、今でも意見が分かれている。当の本人は『遊びに決まってるじゃないか、もちろん』と良い笑顔で答えたいので、以後、その話題は暗黙の了解でスルーされることになった。  
溜め息まじりにそのそのそ立ち上がり、とにもかくにも煎餅布団を引いて今夜は寝ようと押し入れを開ける、とたん。  
「ぎゃああっっ！」  
垣は声を上げて飛び退いた。目の前に宮田のニヤニヤ笑いが広がっている。  
「な、な、な」  
確かに今さっきドアから出て行っただろ、な、誰かそうだと言ってくれと周囲を見回しかけ、ようやくそれが、宮田の顔写真のドアアップ、どこで作ったのか、所謂超特大のピンナップであると気づいた。  
「あ…あいつの思考回路はどうなってるんだ……」  
いや真剣に考え出そうとするなら、なぜこれを作ったのかとか、なぜそれをこんなところに貼り付けようと思ったのかとか、そもそもなぜ垣のところにこれを貼り付けようと思ったのかとか、いろいろ怖い想像が広がってきそうなので、急いで頭を振って思考を切り替えようとし。  
「？」  
ドアのノブに眼が止まる。なんで今ここに、そう思った瞬間、もう一つの懸案事項が思い浮かんだ。  
「合鍵っっっ!!」  
もちろん、取り返そうにも、宮田の姿はもうとっくにどこにもなかった。

「おつかれさまでした」



カチリ、と高級マンション最上階の一室のドアノブが回る。高野は疲れた様子の修一に先だって部屋に入り、あちこちの灯をつけて歩く。

「ん…」

のたのたと修一はソファに座り込んだ。時計は23時を過ぎている。

「何にします？ 紅茶ですか、コーヒーですか」

「ホットミルク」

「…はい」

高野は慌てて冷蔵庫を覗き込み、振り返る。

「すみません、牛乳切らしてました」

「買ってきてよ、下に自販あるだろ」

「……はい」

肩を竦めて、高野は出て行く。

修一が言い出したらきかないことをよく知っていたし、それでなくとも、今日は映画撮影とTV録画撮り、雑誌インタビューにレコーディング発表とスケジュールがたてこんでいた。それらもスムーズにいったとは言い難く、そりゃあ修一の機嫌も悪くならうというものだ。下手に逆らえば拗ねて口もきかなくなるし、当然仕事の能率も落ちる。

そういうことでマネージャーの佐野から小言をくうのは、いつも高野だった。

(佐野さんももう少し修一さんの体を考えてやりやいいのに)

腕利きのマネージャーであることは認めるが、少々厳しすぎるというのが佐野に対する高野の見解だ。

「ま、あの坊っちゃんには、あんなぐらいでちょうどいいかも」

口に出したとたん、ごん、と音をたてて落ちた牛乳のパックを拾う。マンションから少し離れた自動販売機から、急ぎ足に戻っていく。掌の中で冷たい牛乳が跳ねるのを感じながら、代金をいつ佐野に請求しようかと考える。

(ひょっとすると、また領収書がないなら払えないって言うんだろうな)

自動販売機に領収書発行能力があるかよ、と突っ込みたいところだが、経費として請求するならコンビニなり店なり、領収書が手に入るところで買いなさい、そう言われて終わりだろう。

「難しいところだよ」

領収書が発行されるコンビニまで行って修一の不興を買うか、修一の我が儘に振り回されて自動販売機代を立て替えるか。

「やれやれ」

高野は溜め息まじりにエレベーターのボタンを押した。

「…で、明日の予定ですが」

ソファにぐったりしてしまっている修一の横に立った佐野は淡々と続ける。

「午前中、映画の方へ。午後から『ロード・オン・ロード』のレコーディングになっています。コメントを…」

「映画、午前中だけ？」

佐野のことばを、修一は気怠く遮った。

「はい」

「どうしてさ。公開に間に合うの？」

「伊勢監督が、もっと役を掴んで欲しいとおっしゃっていますが」

「僕が？」

むくくと修一は体を起こした。聞き捨てならない。というか、今までそんなことを修一に向かって言い放った監督はいない。

「役を掴んでいないって？」

「ええ。今のままでは、撮影を進めたくない、と」

「ちえっ、好きな事、言ってさ」

何様だと思ってるんだ。

修一は口を尖らせた。

「1、2作はあれで良かったんだろ」

「監督としては、七分の出来だそうです」

「どこが」

「確かにイメージとしては修一さんでいいんですが、微妙に性格の違いがあるので、そこをきっちり演じて欲しいと」

「僕が何年役者やってると思うんだよ！ あんな監督より、ずっと芸歴長いんだ。役ぐらい自分で見極められるよ」

佐野は修一の八つ当たりを平然と受け流した。忙しくなってきたから、いつものことだと思っているのだろう。だから、今更うろたえるようなことでもない、そう判断している。冷静な瞳は動かない。表情も顔色一つ変わらない。

その変わらない様子に、大きな壁に向かって虚しく物を投げつけているような気がしてくる。修一は思わず目を逸らす。

「大体、それを言うなら、垣さんだって」

「垣さんはだんだんいい味が出て来ていると見ておいでです」

打てば響くような対応、しかも垣を評価しているあたりにカチンと来た。

「こけるしか能がないくせに！」

「…すみません、遅くなって」

高野が間合いを計って入ってくる。ドアの外でも待っていたのか、佐野と修一の言い合いが悶着に発展することなどないように。周到過ぎてうんざりする。

「すぐにあつためますから」

「もういらないよ」

修一は吐き捨てた。

「…」

高野は首を竦め、バックを冷蔵庫にしまい込んで佐野と修一を等分に見比べる。大抵勝つのは受け身に徹する佐野の方で、さすが、両親から息子を託すに価すると評価されたマネージャーだけある、そう心の奥で頷いているのが透けて見える。

脚本通り、何もかも。

修一の叫びは本当はどこにも届いていない。

「……わかった」

しばらくの沈黙の後、修一は唸った。

「それで、今までのフィルム、脚本（ほん）で役を練っておくように、とのことです」

「うん」

何事もなかったように会話を続ける佐野に、修一はこくと首を縦に振る。

抵抗しても無駄だとわかっているのに、どうしてだろう、時々無性に暴れたくなる。

「午後のレコーディングの合間に、『レスト・タイム』がコメントを取りにくる予定です」

「何の？」

「周一郎という少年について、どう考えるか、です」

「嫌だなあ、僕、周一郎ってとっつきにくくて」

現実に居たら、絶対友達になりたくないタイプだよ、あいつ。

思わず、湧き上がった感情のままに訴えた。

「そういう事を言ってるから、役が掴めてないって言われるんですよ」

修一のことばに、佐野はあっさりと言り返す。

「掴めてる掴めてないのと、好き嫌いは別だよ。18歳、僕より4つ年上って設定だけど、どうしてあそこまで依怙地になるのかな。滝さんと一緒に居たけりゃ、引き止めればいいじゃないか」

そうだ、正直、周一郎という人間は、修一にはわかりきれないところが多々ある。けれど、それをあからさまに見せるのは癪だ。修一は不安を周一郎の人物造形にすり替える。

「…」

佐野は謎めいた笑みを浮かべた。

「そうできない時もあるのかも知れませんわ」

「そう？」

あるかなあ、そんなの。言いたいことを言わなくちゃ、誰もわかってくれない。言いたいことをはっきり言っても、届かないことが多いのに、黙ってちゃ、何も叶わないじゃないか。

修一は納得のいかないままに首を傾げたが、疲労は募ってきていた。つい、ふわああ、と眠そうにあくびをもらし、時計を見た。

「わ、もう十二時近いじゃないか」

「そうですね。では、おやすみなさい」

佐野は軽く一礼し、ふと思い出したように続けた。

「あ、明日はお父様が撮影現場にお見えの予定です」

「おとうさんが」

オウム返しに応えた自分の声は低く沈んでいる。

撮影現場にお見え。

少し黙った後、どさりとソファにもたれ、

「おとうさんはおとうさんだ、僕には関係ない」

「そうはいきません。カメラマンとライターの手配をしています。父子の対面、和やかなシーンをお願いします」

」

ああ、ここでもやっぱり、理想的な父と子か。

「わ、か、っ、た」

詰るような口調で応じたが、もちろん、佐野には堪えない。

（鈍いんじゃないの、ほんと）

それとも、こういう仕事は鈍くないとやってられないとか？

「では」

ドアを出て行く佐野に続いた高野がぺこりと頭を下げる。

「明日7時に迎えに来ます」

「ん」

腰巾着がへこへここと頭を下げていく。腰巾着。古いよね、このことばも。今なら何かな、コバンザメ？ 背後霊？ 影とか手下とか使いっ走りとか、も、古いか。

映画の現場には年長者が多い。ついつい、今修一達の世代が使っていることばと、感覚がずれてくるような気がする。

二人が出て行ってしまおうと、修一はしばらくぼうっと天井を見つめていた。

やがて、溜め息一つ、のろのろと立ち上がり、ドアの鍵を確認した。

父母はここに帰ってくるなど、ほとんどない。修一は大抵、ここで一人で暮らしている。

「『ると』。おい、『ると』？」

修一はふと我に返ったように部屋の中を見回した。ダイニング・ルームのあちらこちらを探し回り、寝室を覗き込んで目当ての相手を見つける。シーツにもこっと膨れた塊に、にこりと笑ってベッドに近寄る。

「なあんだ、こんなところにいたのか、『ると』」

膨らみをシーツの上から押さえ、覗き込み、続いてシーツを剥がす。ぱっちりしたガラスの金目が見上げてくる。

「ミルク、いらないか？」

抱き上げたのは、ちょうど子猫ぐらいの大きさの青灰色の猫のぬいぐるみだ。ふさっとしたなめらかな毛並みと、ちょっと取り澄ました顔がお気に入りだ。

「高野さんがミルク買ってきてくれたからさ」

修一はキッチンに戻ると、皿を一枚取り出して床に置き、ミルクを注いだ。残りはコンロに載せたミルク・パンに入れる。ミルクが温まるまで、と床にしゃがみ込んで、『ると』を皿に近寄せてやる。

「ほら、飲まないのか、『ると』。僕一人じゃ飲み切れないもの」

『ると』は相変わらず、つぶらなガラス玉の瞳で修一を見上げているだけだ。  
「飲むわけないよね。お前には口がない！」  
芝居がかった口調で言い放ち、修一はくすくす笑った。  
ミルク・パンを覗き込み、十分温まっているのを確かめ、コップに注ぐ。残ったのはミルク・パンに放っておいて——どうせ、高野でも片付けるだろう——『ると』を抱き上げ、片手にコップを持って居間に戻る。  
「ちょっと寒いな。エアコン強くして、ここで寝ようか」  
テーブルにコップを置き、ソファに『ると』を座らせて、修一はエアコンのリモコンを弄った。思い出してDVDデッキの前にしゃがむ。  
「そうだ、今日の録画、明日の二時からだっけ、予約しとかなきゃ」  
セットすると『ると』を振り返り、  
「知ってるだろ、僕、自分が出た奴はきちんと見ておいてるんだ。演技の勉強になるっておとうさんも言ってたし、垣さんにどこが悪かったか、言っただけでいいからね」  
ことばが途切れた後の沈黙がふいに重みを増した。  
修一はDVDデッキから離れて、ソファに埋まり込み、『ると』を片腕に抱きかかえたまま、ミルクのコップを引き寄せた。  
(独り言の癖がついちゃったな)  
「『ると』」  
こくり、とミルクを呑み込む。  
返事は無論、ない。  
低い声で訴える。  
「眠くないよ」  
瞬きをする。少し閉じてみる。けれども、眠気は起こってこない、むしろ。  
「明日も仕事があるって言うのに……変だね、『ると』」  
意味することの真実を意識しないために、修一は話し続ける。  
「この頃、よくこんな感じになるんだ」  
何となくさ。  
「何となく、世界中から置き去りにされたみたいなの、気分」  
口に出した瞬間、ことばは深みを失い、軽々と空気に混じって消えていってしまう。  
(本当は)  
修一はコップに唇をつけたまま、じっと前方を見据える。  
(本当は、知っている)  
声に出せないことば、形にならない想い。  
(世界が置き去ったんじゃない)  
きっと始めから、世界に僕の居場所なんて、なかったんだ。  
それは口に出さずに、修一はコップをテーブルに置いた。半分以上残っていたが、温もりを失っていくそれは、単にぬるりとした生臭い液体でしかない。  
『ると』を深く抱え込んで、ソファに縮こまる。  
時計が2時にかかろうとする頃、修一はようやく眠り込んだ。

## 2. シーン202ーシーン118

「カァーット、カァット！」  
銅鑼声が響き渡った。  
またか、という表情で見つめる人々の中心に、修一の腕をがっしり掴んだ垣がいる。危うく崖から落ちそうになった修一を思わず引き止めてしまった格好だ。  
「何してるんだ！」  
苛々と伊勢が喚いた。  
「そこで周一郎の腕を掴んじゃ、駄目じゃないか！」  
「垣さん！」  
監督同様、苛立たしい声を上げて、修一は垣をねめつける。  
「これでNG、5回目だよ！」  
「あ、す、すまん」  
おろおろとうろたえながら垣は弁解した。とにもかくにも、修一を安全な所まで引き戻してから、ようやく掴んだ手を離す。  
「つい勝手に手が動いて…」  
「いいか、垣君！」  
伊勢はむっつりとした顔で唸った。朝から碌なシーンが撮れていないせいもあるのだろう、殺気立った視線を垣に向ける。  
「わかってると思うが、そこは周一郎が『落ちる』シーンなんだ。周一郎は信賴している滝に、自分の命を委ねている。その滝が『マジシャン』の催眠術による暗示で、周一郎を崖の端に追い詰める。周一郎は滝を殺人犯にしたいくないから、自ら命を絶とうと崖から落ちる、もちろん、深い絶望に蝕まれて、だ！」  
伊勢は興奮した表情で続けた。  
「言わば、この『月下魔術師』の中での、一つのクライマックスと言ってもいい！ なのに、何だ、君の演技は！」  
垣は力なく項垂れた。  
「周一郎を追い詰めるのに、まだまだ緊迫感が欠けているのは我慢しよう。周一郎という友人を失う事への不安、それに逆らう暗示、それらの葛藤が表現できていない、そういう気配さえ見えない、挙げ句の果てに、『落ちなきゃならん』周一郎を『引き止める』とはどういうことだ?!」  
「すみません」  
ますます垣は項垂れた。  
「君はやる気がないのか？」  
「いえそんな！」  
「じゃあ、どうしてだ？ 友樹君なんか、君のNGに5回も付き合ってくれているんだぞ！」  
「はあ…」  
垣はちらりと近くの椅子に腰を降ろしている修一を見やる。  
僅か14歳とは言え、演技力は事実かなりのもので、ふっと気を抜くと、これが演技じゃなくて、本当に本物の周一郎がそこにいるように錯覚してしまう。  
(それが余計に困るんだよな)  
哀しげな優しい眼をした修一が、つい、と後ろへ一歩足を踏み出すと、どうしても手が動いてしまい、相手の腕を掴んで引き止めてしまう。崖のすぐ下にはちゃんとネットが張ってあり、そこから跳ねて下へ落ちる確率が100万分の一だとわかっていても、本能的に体が動いていってしまう。  
結果が連続NG5回という有様だ。  
「あ、僕、オレンジの方がいい」  
いつの間にか、垣以外は休憩に入ってしまったらしい。修一の不満そうな声が響き、違うジュースを買ってきてしまったらしい高野が、慌てて再度買いに走っていく。  
「……仕方がない」  
ふうふう、とわざとらしく大きな溜め息をついて、伊勢は改めて垣を睨み据えた。  
「このシーンはもう一度後でやってみよう。今は別のシーンをやる」  
くるりと背中を向けて、大声で指示する。  
「おい、移動だ！ 理香と周一郎の絡みを先にやる！」  
ざわざわと人が立ち上がって移動し始め、修一も肩を竦めて見せて立ち上がる。  
それらをぼんやりと見ながら、垣もとぼとぼと移動にかかった。  
(オレって、才能がないのかなあ)  
周囲を歩いていく役者達、端役や通行人役までが、自分を小馬鹿にして蔑んでいくように思える。  
(やっぱり、サラブレッドにはなれないのかなあ)  
育ちとか氏素性とか、才能以前にそういう『何か』が必要なのかも知れない、この世界でやっていくためには

考え考え歩いていく速度はどんどん遅くなり、移動していく連中の最後になって、垣は次のシーンの撮影現場になっている『お由宇の家』に辿り着いた。  
辿り着くや否や、わあっと歓声が上がる。ここは撮影するのが知らされていたようで、周囲にぎっちりと見物客が詰めかけていた。  
その歓声に応えた人物が、ひょいと振り返って垣を見つける。  
「垣さん！」  
声をかけて走り寄ってくるのは、革の上下を着込んだ修一だ。  
さっきまでの上品な坊っちゃん然とした朝倉周一郎ではなく、どこか野性的でふてぶてしい気配の里岡直樹、まさにどこから見ても『同じ顔の別人』に見える。  
「どうだい？」  
にやっと笑う、その笑顔も直樹そのもの、修一でも周一郎でもない表情で、少年は垣の前に立つ。

年齢から言えばやや細身の体にライダースーツ的な革の上下は恐ろしく似合っていた。ちょっと軽く二本指の敬礼をして見せる、したたかな表情、隙のない身のこなし、この相手がさっきまでの繊細な儂げな少年に戻るとはとても思えない。

(やっぱりサラブレッドだ)

血とか血とか血とか。つまりは血とか。

「何落ち込んでるの、垣さん」

お前がそれを聞くのか、おい。

「さっきの事ならもういいよ。そのうち撮り直せばいいんだし」

監督判断をさらりと口にする修一は、14とは言え、さすがにこの業界に垣より長いだけある、言い過ぎたかな、とちらっと舌を出してフォローも忘れない。

「…はああああ」

血とか？

(違うよな、きっと)

抵抗する気さえ失せる、この圧倒的な才能の差を、血だと言い訳しているだけなのだろう。

と、いきなり、うおーっ、と見物客の中から野太い唸りが上がった。

「？」「来たか」

顔を上げた垣は、少々うんざりした顔の修一の彼方に、大きな瞳がくりくりした可愛らしい娘がやってくるのを見つけた。

「相手役のお出ました」

「ひとり言のように呟いた修一にそれと気づく。」

「界部朋子…」

垣が名前を挙げると同時に、相手もこちらに気づいたようだ。修一と同じような革の上下、にこりと邪気のない微笑を零れさせると、再び見物客の中から地鳴りのような呻きが上がる。

「何だ？」

「界部朋子の親衛隊」

怖いんだから。

ちらっと目を細めて嗤った修一は、そんなことなどなかったように、にっこりと朋子に笑いかけた。

「やあ、界部君」

「こんにちは、界部朋子です」

いや、こっちはもう名字で呼びかけているんだからさ、何でここでもう1回フルネーム、と突っ込みたくなっただけ垣に、なおも笑顔を広げて朋子はことばを続ける。

「友樹さんに垣さん、よろしくお願いします」

「あ、ど、どう……」

と一もこちゃん、と時ならぬ声援に垣の挨拶はかき消される。

朋子は14とはとても思えぬ伸びやかな肢体を持っていた。伸びやかな肢体と柔らかそうな胸、というか。ルックスと今人気急上昇中のアイドルだということで、話題集めに直樹の恋人役の理香に選ばれたのだが、知ってか知らずか、いや当然もちろん意識しているだろう、修一と垣、親衛隊にそれぞれ等分に笑みを分ける。

「友樹君！ 界部君！ シーン202に入るぞ！」

「はい！」「はい！」

伊勢に呼ばれて二人が垣の側を離れていくと、周囲の視線も二人にくっついて離れていってしまうのが痛いほど感じられた。

(オレは孤独だ)

垣が心の中でごちていると、ふとあたりの空気が変わった。

シーン202が始まったのだ。

配置合わせをした後、垣も呼ばれる。カチンコが鳴り、カメラが動き出す……。

滝と理香、それにお由宇は『マジシャン』の死に衝撃を受けて、お由宇の家までやってきた。

「会わせたい人って…」

滝が尋ねかけて玄関に居る少年に目を止め、棒を呑んだような顔になる。

「直樹！」

逆に、傍らの理香がはしゃいだ声を上げて、革の上下を着た少年に飛びついていった。

煙草をくわえていた少年は、唇から煙草を摘み捨て、その流れのままに翼を広げるように両手を開く。印象は、ヤニを手放せない墮天使か。照れも何もなく、飛びついた理香を胸深く抱き締め、唇を重ねる。

「っっ」

その大胆さにぎょっとして、滝はその場に立ちすくんだ。

「そういうことは中に入ってからやりなさい」

お由宇が冷やかに言い捨てるのに、ようよう2人は互いの抱擁を解き、体を離す。俯きがちの理香と対照的に、不敵な笑みを浮かべて、直樹はまっすぐこちらを見返す。

「だってさ、3日もこいつに会えなかったんだぜ」

「直樹…？」

声に気づいて、直樹は滝を見つめる。やがてにやりと笑って。

「滝さん、でしたっけ。そんな所に立ってないで、中に入りませんか…といけねえな、あんたにはどうも敬語になっちゃう」

カット！ ガチン！

何だか力任せにやった感じがしないでもないカチンコの音、こいつも朋子のファンなのかと助監を勧ぐるまでもなく、親衛隊からうおおおと叫び声上がる。どうやらラブシーンへの抗議行動の一つらしい。

怒りと嫉妬をぶつけられているはずの修一は、親衛隊の反応を平然と無視し、伊勢に向き直る。

「どうでした？」

「ばっちりだ！ 界部君、君も良かったぞ！」

「え、そんな…私…」

ぼうっと耳のあたりまでピンク色に染めて、朋子はなおも俯いた。

「ただ、友樹さん達にご迷惑をおかけしてはいけないと思って、一所懸命やりました」

消え入るような細い声に、再び叫びが上がった。ラブ・シーンをけなげにもやり抜いたアイドルに対する賛辞らしい。

「聞いたか、垣君！」

伊勢が意地悪く垣をねめつけた。

「新人とはかくあるべきだよ」

「はあ」

「ましてや、NG5回目なら、もう少し堪えた顔をしろ」

そんな『顔』がひょいひょい作れるなら、俺はとっくに名優になってる。

この辺りの台詞は胸に呑み込んで、垣は何とか神妙な申し訳なきような雰囲気眉を寄せた。そろそろと上目遣いで伊勢をみやる。本来ならば、叱られて縮こまっている捨て犬みたいな気配になるところだが、今回は伊勢の別のツボを突いてしまったらしい。

「そうだ、大体だな、演技の真髄というものは、如何に全く別の人格を顕現するかという点にあって、つまり役者は巫女だとも言えるわけだ。たとえば今の場面を取り上げるなら、万が一、友樹君や界部君の動きがなかったとしたら、君はただただぼうっと突っ立っていただけの場面だ。まあ、多少は驚いた感じは出ていたが、そもそも死亡した友人が目の前に出現したのを、そんなにのっぺりした顔で迎える友人もないはずだ、そうは思わないか、第一…」

「監督」

立て板に水、断崖絶壁にプリンのような、つるつるとした口上を、友樹が遮った。

「僕の方はどうでしょう」

「え、ああ」

呼びかけられて伊勢はようやく、ここがどこで何をしているのか思い出したらしい。一瞬、何か見えない脚本でもあるかのように空中を睨みつけたが、すぐに視線を友樹に戻して頷く辺り、垣よりも伊勢の方が名優に近いのかも知れない。

「そうだな、もう少し、周一郎の戸惑いや迷い、依怙地さなどが出るといいが。まあ、この辺りはそんなものでもいいだろう」

「そんなもの？」

修一は伊勢の最後のことばに表情を消した。端正な顔が困惑と不審に染め上げられる。

「監督、僕は」

何を言うべきかまとまったのだろう、不愉快そうに眉を寄せたまま口を開いた修一を、別の声が遮る。

「伊勢さん、ちょっといいかね」

ふいに響いた声の深さに、監督がはっと振り返り、相好を崩す。まるで、駒送りしていった画像のように、一瞬ごとに伊勢の顔が変わり、やがて嬉しそうな声を絞り出した。

「これは……友樹さん」

「ちょっといかな。修一はどうだろう？」

「とっ…」

友樹陽一。

どきんと勝手に跳ね上がる胸を押さえつけて、垣は相手をほればれと眺めた。

「どうぞどうぞ」

伊勢はみっともないほどぺこぺこ何度もお辞儀をしながら、陽一の背後に控える。

「垣君、と言ったね？」

「はっ、はいはい」

まさか自分に声をかけてくるとは思ってもいなかった。慌てて応じたが、喉が一瞬にして干上がり、顔が一気に熱くなる。

「ははっ、そう固くならなくてもよろしい」

陽一はTVドラマ、『父の決断』と同じように穏やかな慈愛溢れる表情で垣に笑いかけた。

「君、実にいいものを持っているね」

「は、そうありますか」

そうでありまして何だそれ、軍隊か俺は。

胸の中で突っ込んだものの、さすがに口に出すことはできなかった。

「さっきの表情を少し見せてもらった。実に素朴な人間味溢れる表情だ。真実が含まれている」

そりゃそうだ、目の前であんなに派手なキスを見せられちゃな。

脳裏を走った突っ込みは今度も発せられることなく消え去る。ただ、演技じゃなくて本音の部分の褒められているなら、この作品や、『猫たちの時間』シリーズ、果てはその他の作品のどれに出るにしても、命が幾つあっても足りないということはどうもわかった。

「ど、どうもありがとうございます」

どもる垣を陽一は温かく見つめ返す。

「磨けばきっと光る。修一の相手役、大変だろうが、頑張りたまえ」

「ありがとうございます！」

磨けばきっと光るだって？ それは俺にも才能があるって意味だよな？

突然差し込んだ陽射しのように、垣は相手を眩く見返す。その垣に少し頷いて、雄一はゆったりと向きを変えた。

「ところで、修一」

「はい、おとうさん」

修一がひょいと眉を上げ、すぐに生真面目な表情になる。

「お前の方がまだ、周一郎という役を掴み切っていないんじゃないか？」

「えっ」

声を上げたのは垣の方、修一は無言で父親を見返す。

「脚本では、直樹は実は周一郎で、俺の友情を量りたい不安と、自分が存在していいのかという問いかけに揺れてなきゃならん。それを全て押し込めて直樹になっているんだから、そこをもう少し理解しておく必要がある…」

陽一は修一に懇々と説いている。著名な役者だが、一人息子の演技がどうにも気になってやってきて、挙げ句についつい口を出してしまう、ちょっぴり親馬鹿風の横顔は、誠実さと真摯さに溢れている。

(立派な人だなあ)

垣も多少は芸能界の裏というものを見聞きしている。

子どもが役者デビューしたのをライバルと考えると鬱陶しがらる親も居るし、子どもの方が売れてきたなら、それに便乗して自分を売り込もうとする親も居る。中には、すっかり子育て本など書き上げて、こんな風に育てましたとアピールしてみせ、子どもの名声を丸まる自分の方に引っ攫ってしまう親も居るのに、陽一にはそんな焦りや苛立ち、狡さは全く見えない。

(素晴らしい人だ)

演技だけでなく、人間的にも優れていて、なのにここまで気さくで。

修一がなぜ今一つ嬉しそうでなくて、黙り込みがちなのかはよくわからないが、弱肉強食のこの世界、陽一の後ろ盾はどれほど安心できるだろう。

(本当に幸福な奴だ、修一ってのは！)

垣は一人大きく頷いた。

『修一君、行くよ！』

声に顔を上げる。ガラスの向こうで、スタッフが親指を立てて合図する。頷いて修一は呼吸を整える。

今度の『月下魔術師』の主題歌『ロード・オン・ロード』のレコーディングは順調だった。口パク中心、そのことへの罪悪感さえ持たないアイドルにうんざりしていたスタッフは、修一がきちんと歌い込んでくることに喜び、感心してくれる。

『君ぐらい声が訓練されてると、ミキシングに胸が傷まないよ』

ミキサーの笑顔に、修一は人なつっこく笑い返す。

「そりゃ、しっかりしごかれたからね、父親に」

『なるほどな、さすがだ、修一君！』

ふっと修一は淡い笑みを浮かべて譜面に目を落とす。前奏が始まり、口を開く。

「出会いはいつでも

半分は運命の偶然、残りは神様のいたずらさ…」

歌いながら思い返す。

朝、いかにも子どもの成長を楽しみにしているといった様子でやってきた、友樹陽一の姿……。

「どうだ、調子は」

軽い演技指導の後、休憩に入って、陽一は修一に話しかけてきた。TV画面の中でよく見る、穏やかで温かい笑みを整った顔立ちに広げ、じっと修一を見つめている。それが商業用のものであるということ、修一のためと言うよりは、彼らの間で回り続けるカメラや乾いた音をたてて落ちるシャッターのためであることは、誰よりも修一が熟知している。

「うん、まあまあだよ」

にこりと笑い返して修一は応えた。椅子に腰掛けている彼を、椅子の背に手を置いて、陽一は静かに見下ろし、続ける。

「映画も単独で、シリーズ3作目だな」

「うん、おとうさんには負けないからね」

「こいつ…」

渋い笑みを浮かべて、コン、と陽一は修一の額を小突いた。親しみのある友人同士のような父親の仕草だ。

「でも、この周一郎っていうのは、ユニークな役でしょ」

「そうだな。年齢的に4歳年上だし、そのうえ、ひどく頭が切れる少年という役どころだが……大丈夫か？」

少し不安そうな表情を陽一は作る。

「大丈夫だよお」

修一が、どことなく甘えた口調を返すのも計算の上、それは陽一も知ったこと。

「自信だけで、役はこなせんぞ」

若さの持つ無謀さを受け止めるような穏やかな笑みに、修一は薄く嗤う。

(そんな顔したって、何を考えてるか、お見通しだよ、おとうさん)

「最近、何となく、わかるんだ」

含みを持たせて、ちらりと上目遣いをすれば、陽一はすぐに乗ってくる。

「何がわかる」

離れている息子の心情を心配する年上の男。

「周一郎の気持ち……っていうか、心の動きが」

ことばの先を読み込んだように、ぎらりと光った目の意味も、修一はよく知っている。脅すようなその視線、以前に十二分に思い知らされている。

『莫迦な事を言って、人々の期待を裏切るんじゃない』

冷やかな声。

もう2年ほど前になる。

修一が延々と続く仮面舞踏会にいい加減嫌気がさして、一度だけ、記者達の前で陽一に逆らったことがあった。その場は陽一の卓越した演技力とタイミングをはかる呼吸のうまさで、ちょうど体調を崩していた雅子の事で、修一が心配のあまり苛んでいた、そういう流れでおさまった。

夜、陽一は珍しく修一のマンションを訪れた。昼間の事を半分以上忘れて彼を迎えた修一を、陽一はまるで側に寄った小バエを叩き落とすように平手で頬を打った。

『次から、ああいう莫迦は許さん』

口の中が切れて、あっという間に唇から溢れた血に茫然とする修一に、くるりと背中を向けた陽一は淡々と命じた。

『明日の仕事にさしさわることがないように、手当てしておけ。お前の失敗は私の名誉に傷をつける』

『修一さん！』

部屋に入ったとたんに見つけた修羅場に、真っ青になって駆け寄ってきた高野、それでも振り向くこともなく、陽一は修一を置き去って出て行った。

自分は、父親の人形なのだ。

修一はそう理解した。

著名な役者の両親を持つ、才能豊かな役者の卵。父に認められることを望んで頑張り、まっすぐに明るく生きる息子。

そういう『役柄』を演じる限り、修一は『生きていい』のだ。

「……そうか」

静かな声が応じて、修一は我に返った。

「それはいいことだ」

陽一の目が光ったのは一瞬だった。すぐに父親の思いやりをたたえた目に戻り、満足そうに頷いてことばを

「役の気持ちがわかるようになったとは……そろそろ、お前も一人前だな」

口にした台詞が、この『対談』を読んだ人々に、子どもに厳しくしようとしながら、それでもどうしても甘くなりがちな、人情味溢れる親の像としてアピールするのを、陽一は計算している。

「へへっ」

くすぐったそうに笑ってみせる。褒めて欲しい相手に褒められて、少し自分を信じてやれそうな気持ちになって、そういう風に気持ちを通わせる親子関係を、修一は見事に演じてみせる。

その視界に、相も変わらず陽一を崇拜せんばかりの表情で見つめている垣が飛び込んでくる。

「は、ははっ」

今度は本気の笑い、しかも明らかな嘲笑、だが、その響きを聞き取ったのはきっと皮肉なことに、目の前の陽一だけだっただろう。

（垣さんも、おとうさんの外面にごまかされてる）

けど、それが当たり前なんだ。

（だって、役者、だもの）

父は温厚で穏やかな理想の大人、母は派手だが美しく魅惑的、食べ物にも寝床にも、金にも才能の発露にさえも困ることのない満ち足りた生活、わずか14歳で映画界のスター、友樹修一。しかも、ただの容姿のいいアイドルに終わることもなく、今や実力派の名子役としての評価があり、名声があり、地位があり……。

孤独を訴えるのは贅沢だろうか。

それとも多くを手に入れた当然の代償、修一の胸の傷みはただの甘え、でしかないのだろうか。

（じゃあ、どうしてこれほど…寂しい？）

まるで寄る辺のない海を漂う小舟のようだ。嵐が来て、一人必死に踏ん張って堪えても、誰に安堵されることも認められることもなく、浮かぼうと沈もうと、そんなものは誰の何にも関係がない。修一が居なくとも、『映画』は困らないし、ファンもすぐに新しい偶像を見つけ出すだろう。

（生きてても、死んでても、誰も気づかない）

今こうして明るく笑う修一は、既にゾンビー歩手前なのに、誰も気づかない、不愉快がることさえない。ひょっとすると、本当に修一が死んでしまっても、今まで撮り溜めた画像やデータを繰り返し流しておくだけで、数ヶ月、いや数年持ちこたえてしまうんじゃないか。

（なら、生きてる意味なんて、ないよね？）

DVD数枚に納められてしまう、人生。

『修一君！』

「っ」

さすがにびくっと体を強張らせた。うっかりしてた、完全に飛んでた。

『「レスト・タイム」がコメントを欲しがってるそうだ』

ガラスの向こうの顔がうんざりしている。

『休憩代わりにコメントをやっつけて、その後、3番をレコーディングしよう』

「はい」

ヘッドホンを外し、修一は部屋を出た。

（で、その『休憩代わりにやっつけたコメント』に『感動』したり『感心』したりする『読者』とか『ファン』もいるわけだよ）

胸の奥で寒い声が響く。

すぐ外の廊下に、どこにでもいそうな男が立っていて、修一を見ると、子どもに向けるには深すぎるお辞儀をして見せた。

「『レスト・タイム』の三条良紀です、どうぞよろしく」

「こちらこそ」

差し出された名刺の表面に視線を走らせ、修一はすぐに目を上げてにっこり笑った。眉を下げる、目を細める、思わず零れたという気配で広がる微笑に抵抗できた人間はいない。

「すみません、お忙しいところ」

一瞬戸惑った顔の相手がすぐに笑み返す。細くなった目が、何だこいつ、意外に無邪気でいい奴じゃんか、そう呟いている。

「あそこのソファで構いませんか？」

すぐにまた、戻らなくちゃならなくて。

修一はちょっと困り顔で背後の扉を振り返り、小首を傾げて、少し先に置かれてある小さなソファを指差す。レコーディング終了を出待ちして取材をする連中が陣取る場所、座り心地が良くないのも長居して欲しくないからだ。そんなことはおくびにも出さず、修一はいそいそとソファに歩み寄り、ちょっとだけ三条が追いつくの待つ。

「ええ、大丈夫です」

三条はボイスレコーダーの準備に忙しく、修一の唇に浮かんだ微笑みを見逃す。修一より先にソファに腰を降ろし、続いて修一が座るのに満足げにボイスレコーダーのスイッチを入れ、メモを取り出す。まさか、自分が修一に誘導されて入り口に背中を向けるように座らされたとは全く気づかないままに。

「『レスト・タイム』三条。友樹修一さんにインタビュー。……はい、早速ですが、今撮っておられる映画は『月下魔術師』でしたね。どういう映画でしょう？」

愚問だよ、これがまた。

胸の冷笑は秘めておく。



どんな映画かわからずにインタビューするなんて、時間の無駄だ。貴重な時間を映画解説に使わせるようなヘマ、帰ったらデスクに詰られるだろう。それとも、わざわざ雑誌名をレコーダーに入れたところを見ると、この男も実のところはフリーのライターなのかも知れない。

「そうですね…一口で言えば、今までの周一郎シリーズの転換点と言えます」

「転換点？」

「はい。今まで周一郎という人間は、他の誰をも、自分の心を開く相手とは見なかったんですね。ところが、『滝志郎』と言う、よく言えばこだわりのないおおらかなお人好しの接近によって、少しずつ変わっていく。人に向かって心を開いてゆくわけですが、今度の作品では、周一郎は初めて、滝の心の中で自分がどういう位置を占めているのか、どういう存在なのかを知りたがるわけです。自分が本当に、滝の友人として認められているのかどうかを、確かめにかかるというわけです」

「なるほど。では、友樹さんは、周一郎という少年…まあ、今の友樹さんより年上という設定ですが、そういう少年については、どのように思われますか？」

「そうですね……ひどく寂しい人間、という印象を受けました」

考え込む顔の後で、小さく笑って見せる。生意気ですか、と無意識に尋ねてくるように思われるだろうと計算済みだ。

「だって、あ、僕、原作を一通り読んだんですが、滝さんと言うのは、実に『いい人』なんですよね。その、ごく当たり前の人間なんだけど、お人好しの度が過ぎると言うか、閉じこもっている人間に手を差し伸べずにいらなくなる人です。それなのに、周一郎は意地を張っていて、なかなか滝さんを振り返らない。周一郎は18歳で、世知に長けた人間という設定ですが、人間同士の真摯な付き合いという事に関しては、妙に屈折した幼い感情を持っているみたいですよ」

「…なるほど…」

三条は感服したように大きく頷いた。

今すらすらと並んだ修一のことばが、真実彼の心から出たと思っているようだ。

もちろん、それは事実ではない。

修一は周一郎の心情を想像しただけで、理解しようとしたわけではない。半分以上は、こんな風に応えれば、『ファン』は修一が違和感を感じながら演じている周一郎に興味を抱くだろう、それは一体どういう少年なのか、どういう話なのかと興味を持つともくろみだ。そしてまた、ファンでない『読者』は、理解困難な人格を演じようとする『名子役』がどのように演じるのかと、作品とは違う興味をかき立ててくれることだろう、それも考えている。

どちらでもいいのだ、映画に群がってくれさえすれば。

(助けが欲しいなら、そう言えばいい。滝の気持ちを知るのに迷ってなんかいないで、まっすぐ聞けばいい)

修一は実のところ、周一郎に対してそう思っている。

修一の周囲に居るような人間達とは違って、滝ならきちんと応えてくれるだろう、それこそ、真実の誠意を満たして。なのに、それができない周一郎は、正直不愉快だし、どんなに悲劇を気取ろうとも、甘えているとしか思えない。

そういう気持ちの底辺にあって、どうしても最後の一线で周一郎になり切れないが、父を見習えば、なり切らなくても役は演じられる、それが才能というものだ。

「それでは、滝役を演じている、垣かおるさんについては、どう思われていますか」

「そうですね」

脳裏にのほほんとした垣の顔が思い浮かんだ。

「滝さんのドジさとか、お人好し加減は、うまく演じて下さってると思います」

それに、すぐこけるという特技もあるしね。

それを見抜いて抜擢した自分の才能に口許が綻ぶ。

(けど)

お人好しってというのは、ある意味の鈍感さなんだよな。

ふとそう思った。

陽一の穏やかで理解ありげな振舞いを、本当の姿だと信じて疑わないあたり、それこそ滝そっくりの鈍感さだと思って、思わずくすくす笑ってしまう。

「友樹さん？」

「あ…すみません」

不審気に問いかけられて、我に返った。思わず頬が熱くなる。

「楽しそうですね」

「垣さんは、本当にいい人なんですよ」

「お二人はいいコンビですね。……それでは、最後に、お父様、友樹陽一さんについて、どう思われますか」

「え」

「撮影現場に来られたようですね。スケジュールの合間を縫って来られたとか。現場で厳しいと評判の友樹陽一さんですが、お父様としては如何でしょう」

修一は急速に笑みが消えないように堪えた。ちょっとだけ顔を引き締める、そう、まるでライバルのことを話されたように。この表情なら、あの人は僕に全く興味なんか持ってませんよ、と言い放ちかけた気配を覆ってしまえる。

「父は立派な人間だと思います。役者としても尊敬しています。僕としては、いつか父にはライバル宣言ができればと思っています」

「ライバル宣言ですか」

三条は破顔した。

「いいですね！」

これはネタに使えろぞ、と素早く相手の頭が動いたのが見て取れる。弾んだ声で同意するのに、修一もにこやかな笑みを広げてみせる。

「修一君！」

頃合い良くドアが開き、修一は振り返った。

「そろそろ頼むよ」

「あ、それではどうもありがとうございました、友樹さん。お時間頂けて助かりました」

「いえ」

すっかり馴れ馴れしい口調になった三条に微笑を返す。立ち上がると、相手もいそいそとボイスレコーダーを片付け、写真は先日のもので使わせて頂きます、と断りを入れた。

「では、頑張ってください！」

「ありがとうございました」

(父は立派な人間だと思います、か)

頭を下げて、自分の白々しい台詞に苦笑する。

「修一君！」「はい！」

急ぎ立てるスタッフに、もう一度三条に一礼して、踵を返す。

いつの間にか、佐野が姿を現しているのに気がついた。またどこかで修一の新しい仕事について交渉してきたのだろう。

『じゃあ、3番から』

「はい」

修一はヘッドフォンを付け直し、しばらく喉の奥でメロディを追っていたが、スタッフの合図に頷いて歌いだした。

「帰れるものなら

帰りたい、無邪気に笑えたあの日、と

そう呟いては

唇を噛んで鏡の前に立ち尽くす

哀しみ 涙も流せない哀しみに

心の中では寂しさ叫んでる

けれども それは言えないことなんだ

いじっぱりな俺達の

背中合わせの友情

失う怖さに振り返るだけの…」

いつもなら、さらりと歌える歌詞が、今日は妙に胸に堪えて、修一は無意識に眉をしかめた。

(振り返る相手…って、僕にいいのか?)

「OK! まあまあの出来だ！」

まあまあの出来、に一瞬引っ掛かりかけた修一を見て取ったように、

「ご苦労様、桜井さん」

佐野が淡々とチーフに声をかけ、出てきた修一に視線を投げた。

「スケジュールに追加です」

「……」

ほらね、やっぱり。

微かな溜め息を漏らしてみせるが、もちろん、相手は堪えた様子もない。

「週刊雑誌2本グラビア撮り、今日中にということですけど」

「わかった……ありがとうございました！」

「お疲れ、友樹くん！」「おつかれ！」「またな！」

修一はうなずき、スタッフに一礼して部屋を出た。

熱っぽい温かな空間からもぎ離されて、ひんやりとした通路を歩きながら、体も心も冷えていくのを感じる。

導くように先を歩いていた佐野が、駐車場に止めていた車の運転席に滑り込み、修一と高野が乗り込むのを待ち構えている。急かさない、けれど見逃してもくれない。

また一つ、修一は溜め息をついて、後部座席に滑り込んだ。

「高野」「はい、佐野さん」

促しに応じて、高野は隣に積まれていた段ボール箱を修一側に移動させる。

「また…」

修一はうんざりしながら段ボール箱に詰め込まれた色紙を眺めた。修一の不快に気づかぬふりでサインペンを手渡してくる高野を睨みつけ、一番上の色紙を取り上げる。一枚取ったところで、箱の中身は全く減る気配はない。

「スタジオまで三十分。百枚用意していますから、できる限り仕上げてください」

「わかってる！」

高野のことばをぶっきらぼうに撥ねつける。

「高野に当たらないで、修一さん。『月下魔術師』のキャンペーンのために必要なんですから」

佐野が鮮やかにハンドルをさばきながら、修一を宥めた。

「…わかってる…」

修一は深く息を吐き出しながら呟いた。

「え？」

垣は汗が流れ続ける顔を大道具の隅から突き出した。

『瀧』役だけでは暮らしは成り立たない。映画撮りの合間には、こうやっている色々な部署のスタッフに頼まれる下働きや雑用をこなし、ちょっとした稼ぎを得ている。

「だからあ、あんたぐらい？ 暇なの？」

ことばを省略し、語尾を微妙に上げる口調で、垣より1、2歳しか変わらない相手は、顎をしゃくった。

「何だって？」

「だからさあ」

始めっから言わなきゃなんないわけ？ 何なの、その物忘れの酷さ、そういうあからさまな冷笑を無視して、相手を見上げ続けると、

「修一さんにい、監督が渡し忘れたものがあんだって。演技上の注意点？ メモ？ とかそういうの？」

垣に聞かれても困る。  
「どうしてもお、明日までに直してほしいもんなんだって？」  
メールとか他にもあるだろに、何メモ、って。  
嘲笑するような口調は強くなる。  
垣は知っている。このスタッフは若くて力があるのは取り柄だが、チームとして働けないと言われている。だからこうして使いつわりを任せられてしまう。  
「ケータイ、繋がらなかったのか」  
「出ないんだよ、修一さんは。高野か、佐野かが出るんだけどさ、そっちも何でか出ないって」  
それって避けられてるって言うことだよな？  
思わず突っ込みたくなかったのを我慢し、再びトンカチを握り直す。  
「まだ工作中かもしんないの？」  
「スケジュール確認したのか」  
「修一さんは『売れっ子』だからな」  
男はにやにやと嗤った。  
顔もいいから、『あっちこっちで売って』んじゃないの？  
「……」  
思わず垣は手を止める。  
確かに修一は俺様だし、年齢と中身のギャップはあるし、外面の良さはかなりのものだが、『あっちこっちで売る』ようなまねをするようには思えない。  
(というか、そんな必要ねえだろ)  
修一の才能や境遇を自分と引き比べるのが嫌さに、ありがちでスキャンダラスなネタに結びつけて溜飲を下げたおこうという魂胆が丸見えでうんざりした。  
「なあ暇なら、持ってけよ、これ」  
「…脚本(ほん)？」  
「渡せばわかるって」  
トンカチを降ろし、受け取った脚本をぱらぱらと捲ってみる。  
あちらこちらに書き込み訂正があるばかりか、明らかに中身を刷り直した分もあり、どうやら大幅な改稿があったことがうかがえた。しかも数カ所は明日撮ろうとしていた部分で、これをやるには修一のスケジュールそのものを弄る可能性があるだろう。  
「…ああ…なるほど…」  
「じゃ、頼んだぜ」  
「おい！」  
男は垣が呑み込んだ気配を見て取ると、さっさと姿を消した。  
「…ちえっ」  
高野も佐野も薄々これに気づいているのだろう。スケジュールの急な変更を修一は嫌がる。ただでさえお天気屋なところがあるのに、今日この変更を押しつけられたら、監督には勿論、話を届けたスタッフにも激怒して八つ当たりしかねない。  
それだけでなく、最近伊勢と修一の間には微妙な齟齬がある。  
『こんなの届けたら詰られんのがオチだよな？』『あいつでいいんじゃない？ ほら、しょっちゅう修一にやられてるし？』  
そういう会話が知らぬところで成り立っていたわけだ。  
「……そうだな、行ってみるか」  
垣は溜め息をついて、額に巻いていたタオルを取り、落ちる汗を拭いた。  
「ひょっとしたら、友樹夫妻に会えるかも知れないしな」  
そんなことは200%ない。  
そう思いつつ、自分を誤摩化しながら、垣はのっそりと立ち上がった。

「それじゃ、おやすみなさい」  
「おやすみ」  
いつものように佐野が声をかけ、高野とともに修一の部屋から出て行ったのは、もう23時近かった。  
「ふ…う」  
映画撮りでは26時、27時なんてスケジュールもある。時間が遅いのはそれほど苦痛じゃない、映画に没頭していれば、それほど続いた時間でさえ、もっと続けばと思うことがある。  
「……感覚ないし」  
ソファにぐったりと埋まり込みながら、右手をのろのろとマッサージする。痺れて固まって、自分のものではないようだ。  
今日一日で書いた色紙は、500枚は越えたかもしれない。続いたグラビア撮影では、異常に細部に拘るカメラマンと、指示を全く理解出来ない照明スタッフの組み合わせという史上最悪のカップリング、同じことを数時間ぶっ続けにやらされ、しかも挙げ句に『笑顔がないよ、修一くん、お客が見たくない顔だ』なんて、自分の仕事は何なのか、何をやってるのかわかってないんじゃないか。気持ちよく笑わせて気分を乗せてきっちり撮って仕上げてくれる人もいるのに。  
(あいつらサイアク)  
くたくただった。いや、体はもうここから動きたくないほどくたくただったが、神経の方は苛々とした不快感で詰まっていた、細かな一本一本まで逆立っているような気がして、全く落ち着けない。  
「……………」  
無言で部屋の隅のボックスにうずたかく積まれた『プレゼント』と『手紙』の束を見やる。ホームページの掲示板に書き込んだりや公的なアドレスに切々と心情を送りつけたりしてくるファンも多いが、今もこういう『直接的に』届く方法を好むファンも多い。  
『出来る限り目を通して、ファンサービスに努めて下さい』  
佐野のことが鼓膜に突き刺さっている。

「……疲れたって……」

はあ、と大きく息を吐いて天井を見上げ、目を閉じた。

「『ると』…」

修一はぼんやりと呼んだ。

「あれを何とかしなきゃね。明日になったらまた増えるからさ」

呟きながらも、ぐったりとした四肢は石化の呪文をかけられたようにびくりとも動かない。深々と息を吐き出しつつ、思い出す。

(学校もしばらく無理だな)

ひょっとすると卒業式まで行けないかも知れない？

「……ちえ…」

修一の進学を受け入れてくれる高校は既に決まっていた。だが、日々、年を追うごとに殺人的になってくるスケジュールのどこに、学校の時間をひねり出せというのだろう。

「『ると』……疲れたよ。もう、動きたくない」

溜め息とともにぼやいて、それがどれほど贅沢なことかと考える。動かなくては生活できない。この部屋の中までは高野の手は届かない。

しばらくぼんやりとソファに身を任せていた修一は、閉じていた目を開き、のろのろと体を起こした。居間を見回し、青灰色の猫のぬいぐるみが、いつの間にか、プレゼントと手紙の側に置かれているのに苦笑する。

「おまえをそこに連れてったの、佐野さんだろ、『ると』。あの人のやりそうなことだよな」

佐野は『ると』が修一の心にどんな位置を占めているのか熟知している。

「……乗るしか、ないんだよね…」

ゆらりと足下をふらつかせながら、修一は立ち上がってぬいぐるみの側に近寄った。こちらを見上げている金目の猫に笑いかけ、その近くにぺたりと腰を降ろして、つん、とぬいぐるみの額を突く。ころんと他愛なく後ろに転がるぬいぐるみに少し笑い声をたてて起こしてやり、溜め息を一つついて仕事にかかった。

「1つ、手編みのマフラー、編み目がたがた。1つ、手編みじゃないマフラー、凄い配色。1つ、ペア手袋…2つとも送ってくるのは訳わかんないな。1つ、焦げたクッキー、賞味期限不明。1つ、瓶詰めのカンディ、甘い的好きだって言ったけ？」

一休みして、溜め息を再び。色とりどりのリボンと包み紙が辺りに散らばっていく。

「1つ、ミニカーの置物、ガキじゃないし。1つ、マフラー、jeeさん用か？ 1つ、ミニカー、ああ車の模型嫌いじゃないって言ったけ。1つ、バスタオル、イニシャル入り、何考えてんだか。1つ、野球帽、人の趣味を決めつけてるね。1つ、金鎖、趣味悪。1つ、銀製キーホルダー、何だろこの鍵……自宅とか？ はあ」

プレゼントの中身に罵倒を繰り返しながらも、何を贈られたか、何が多かったか、情報データはきちんと頭に入っている。インタビューで尋ねられることもあるし、返答によってはとんでもないプレゼントを回避できるのだから、もちろん、無駄な作業ではない。

それでも似たようなものばかり出て来て、20個近く開けたところで飽きた。包み紙とリボンの海に溺れかけていた『ると』を抱き上げて救出し、場所を移動する。

「手紙も似たような内容なんだから、『ると』」

呟きながら手を伸ばす。

掲示板の書き込みやメールの返事は、基本はテンプレートとそのバージョン替えだ。専門のスタッフがそれ相応に対応してくれているし、書き込みや送られたメールで特徴のあるものは知らせてくれる。もちろん、怪しげなものは省いてくれるし、有害なもの一時に、修一をキャラクターにした、二度と読みたくないような凄まじい小説が贈られてくる一は削除してくれ、以後、その相手とのやりとりを封じてくれる。

ただ手紙はこだわりのある相手からのものが多く、書式やレターセットの意匠に凝る相手もいるので、全部は読めないけれど目は通してます的な対応をするために、修一に直接送られてくるのが常だった。だからこそ、注意はしていたのだが。

「っっ！」

手近の分厚い手紙の封を切ろうとして、顔をしかめた。

「、ドジった」

指先に走った鋭い痛み、取り落とした封書の上部にきらりと光るもの、よく見るとカミソリの刃のようだ。握った指先から見る見る赤い液体が膨れ上がり、手紙の束の上に落ちる。

「くそ…」

やっぱりちょっとボケ過ぎだ、と周囲を見回したとたん、がちやりと玄関に続く廊下とリビングの境の扉が開いてぎょっとした。

「あの」

指先をきつく握ったまま振り返り、居心地悪そうにもぞもぞと内懐から何かを出そうとしている垣を見つける。

。「…垣さん」

何でこんなところに居るの？

思わずそう尋ねようとした矢先、

「チャイムを鳴らしたんですけど、答えがなかったの、あの、けど、不法侵入するつもりはさらさらなくてです…」

言いかけた垣の目が修一に、続いてその指先に止まる。見る見る目を見開いた垣は、

「怪我をしたのか！」

呆気にとられる修一にお構いなし、散らばったりリボンや包み紙を容赦なく踏みつけて飛び込んでき、傷を覗き込んだ。

「垣、」

「何ぼうっとしてる！」

きつい調子で一声、近くのリボンを掴み、指の根本をきつめに縛る。

「えーと、それから何か押さえるもの…と、これでいいか」

プレゼントの中にあつたタオルに目をつけ、それで修一に指を押さえておくように命じた。

「救急箱は！」

「あ、あの、その棚、かな」

勢いに押されて思わず応えると、再びリボンや包み紙を蹴散らしてそちらへ駆け寄り、目当てのものをすぐに

見つけて戻ってくる。

「おい指出しな」「う、うん」

思ったほど深くはなかったし、すぐに止血できていたから、くるりくるりと二重三重に巻かれたカットバンは照れくさかったけれど。

(垣さん…)

なおもその上から包帯を巻き付けてくれる垣に、『滝志郎』の姿が重なった。

自分を必ず受け止めてくれる相手、他人の事を自分の事のように心配するお人好し、驚きとくすぐったさ、疑いと喜びが交錯する、こんな人が本当にいるのかという想い……。

(周一郎もこんな気持ちだった？ 滝に初めて構ってもらった時……?)

「よし、これで大丈夫だ」

「……ありがとう」

何だかかなり包帯を巻き過ぎという感じがしなくもないが。

「慣れてるんだね」

「そりゃ、よく怪我するからな」

ははっ、と垣はいささか自嘲じみた笑い声を上げた。芝居でも、カメラが回っていない時でも見ない顔、結構渋くていい味がある。

(大人なんだ)

どれほど修一に振り回されていようと、役者の世界で駆け出しも駆け出し、駆け出しの皮一枚みたいなところのようにと、修一の知らない時間、修一の産まれていなかった世界を生きてきた経験がどこかで滲む。

「…そっか…」

周一郎はひよっとすると、その鋭い感性でお人好しで頼りない滝の存在の中に、それでも自分より十数年生きてきた時間のようなものを感じ取ったのかも知れない。

「…びっくりして…どうしようかと思ってた」

自分のことばがひどく素直に響いた。

界部朋子と演っているのだ、これぐらいのことは想定内のはずだった。人気稼業なのだ、どこかで恨みを買うのも当然だ。そう言った『通常ならば理不尽な悪意』を、いつの間にか呑み込んで鈍くなってしまっていた。

それを一気に蹴散らされた、傷ついて当然だなんて思っちゃいけないと。

「こっちこそびっくりしたぞ、脚本(ほん)を届けに来たらお前が…」

垣のことばが途切れて顔を上げる。相手は引き攀った茫然とした顔でのろのろと周囲を見回している。

「垣さん？」

「す、すまん！」

飛び上がるように立ち上がった。

「掃除道具はあるか？ これ、プレゼントだったんだよな？」

慌てた口調で尋ねつつ、自分が蹴り飛ばしたと思いき箱やりボンや包み紙を急いでまとめにかかる。

「踏み潰したり壊したりしたかな、しまった、目に入ってなかった」

「……放っておいていいよ、高野さんが掃除してくれる」

「そうはいかんだろう！」

これら皆、お前を応援したり憧れたり励ましたりしてくれている人達からのものなんだぞ。

「うわ…、そのタオルもか……しまったなあ…」

しまったしまったと呟きながら、プレゼントの山を部屋の隅に片付けにかかる。

「応援したり憧れたり励ましたり、ね」

そうとばかりも限らないんだけどな、と修一は赤く染まった封筒を用心深く取り上げる。宛名はよく見れば男文字、差出人の名前はない。普通ならば、選り分けられているはずのものだ。

ずきずきし始めた指でもう一度、封筒の縁に煌めく刃の近くをそっと撫でた。

「サディステックな励まし方だよな」

そろそろとテーブルの上に置く。高野に見せて一言は言ってやろう。今からこれじゃ、この先の展開にどんな物騒なものが送られてくるかわかったもんじゃない。

「けど、一体どうして手を切ったんだ？」

あちらこちらに散らばっていた包装紙をまとめ、プレゼントを箱に分けて片付け、意外に手際良く部屋を整えた垣が戻ってくるのに、苦笑して応える。

「嫉妬」

「は？」

「手紙にカミソリが仕掛けてあった」

「かみそり？ 手紙？ ……何の冗談だ」

「と思うよねえ、実際」

どう考えても三文小説だ。けれど、それにあっさり引っ掛かって怪我をした修一は、三文小説以下なんだろう。

。「界部朋子とラブ・シーンを演ったからだろ」

「……ラブ・シーンって…」

濡れ場ってわけでもないのに？

訝しげで不審げな垣の声にくすくす嗤う。

「そんなことで？」

「そういうファンも居るってこと」

ゆっくりと『ると』を抱き上げ立ち上がり、ソファに戻った。溜め息一つ、気持ちを切り替える。

「それより、垣さん、一体何の用だったの？」

「あ、そうそう」

垣は戸口に放り出していたナップサックに近づいて口を開いた。

「これ、監督から」

「監督？」

自分の声がかからさまに不快そうだ。

「君の演技に対する注文だってさ」

「ちえっ」

修一は舌打ちした。

またかよ。この上にどんな不満がある。

脚本を受け取り捲りかけたが、カミソリの傷は結構深くて痛むものだ。日にちがたてば楽になるのだろうが、指先の敏感な神経をささくれ立った木で撫で上げられた気がして、思わず顔を歪める。

「あ、オレ、捲ろうか」

修一の表情に気づいたのか、部屋を汚しプレゼントを踏み散らかした代償と言わんばかりに、急いで垣が脚本を取り上げる。

(滝、そっくり)

今度はふわりと笑ってしまった。

「速かったり遅かったりしたら言ってくれよ」

「うん」

1ページずつ、覗き込む修一の視線を見ながら頁を捲ってくれる垣の仕草に、心のどこかが静かに吐息をつくのがわかる。ほっとしている。安堵している。これ以上傷つけられずに済む、そう呟く声が聴こえてくる。

(僕が…くつろいでる……?)

垣の行動は、ただ単に映画界のサラブレッドとしての修一に対するへつらいかも知れないのに。修一のコネにすり寄り、あまたの大人達と同じなのかも知れないのに。

(これじゃ、まるで周一郎の行動の繰り返しじゃないか)

自分の心の動きに戸惑う、それこそ『まるで』周一郎の想いをトレースするように。

(こんなこと、初めてだ)

どれほど当たり役だと言われても、常に『演技』からずれたことはない、なのに今、見えない何かに絡めとられていくような気分になる。

不安になり落ち着かなくなると、修一は脚本に必死に集中した。と、その途端、視界に飛び込んできた但し書きに、思わず声を上げた。

「えーっ」

眉をしかめて一気に読み下す。

「君は周一郎の変化を演じ切れていない。君の周一郎は一番始めの、滝に会ったばかりの周一郎と同じだ……だって？ 冗談じゃない、僕はちゃんとやってる」

むっとして立ち上がり、部屋のDVDプレイヤーに近寄った。

「へえ、DVDあるのか」

羨ましが垣の声が耳に入ってくる。

(垣さんの所にはDVDないのかな)

ふと、垣はどんな所に住んでいるのだろうと思った。マンションかアパートか。部屋の作りはどうなっているのか。どんなものが置かれているのか。好きな本やゲームや、いや、『誰か』と暮らしているのだろうか。

それも、今までの共演者には感じたことのない興味、けれど、それを深く考える前に、修一は流れ始めた映像に意識を戻した。

TV放映された『猫たちの時間』のDVD、スペシャルボックスには修一が周一郎の格好で微笑んだり、猫を抱いたり、豪華な屋敷の豪華な椅子に座ってこちらを凝視してきたり、つまりは、『そういうもの』に騒ぎそうな女性達向けのフォトブックがついている。

「あ…」

側に居た垣が何が映ったのかに気づき、居心地悪そうにもじもじした。1度や2度は見ているはずだ、引き撃ったような顔でそろそろ顔を背けたり、怖いもの見たさか、ちらりと横目で眺めたりしている。

やがて、物語は周一郎と滝の、初めての出会いの場面に進んでいった。

高価そうな装飾品や調度を配置した応接間。2人の青年がソファに腰をかけている。1人はまあまあハンサム、もう1人はお世辞にも整っているとは言い難い、けれどその薄ぼんやりとしたお人好しそうな微笑みが、何となく視線を魅きつける男。

2人に寄り添っていくカメラが後者の視線を追いかけてゆっくりとテーブルに落ちる。おそらくは一品ものと思える二客のティーセットを鮮やかに照らす明るい色の紅茶、しっかりと盛り上げられたクリームの間きらきらといちごの粒が光るショートケーキは、皿の中央に鎮座しているだけで甘い香りが想像出来る。

『にゃあお』

唐突に猫の声が画面の外から響いた。ハンサムな男、つまり山根役が端整な顔を強張らせた。体を竦め、けれど腰が浮いている。山根は、隣の滝が膝の上に猫を載せているのを見つけて、顔を引き撃らせて何やら文句を言い始めた。せつかくの端整さが台無しだ。

と、滝がニッと不吉な笑みを浮かべた。

『行け』『にゃあああああ』『うわあっ』

猫は何に驚いたのか山根に飛びつく。しがみつিকাけた猫を、山根役の男が巧みに首を引っ掴み、自分に引き寄せながら引きはがそうとする『演技』を続ける。見事なものだ、どう見ても猫に悪意があつて山根を追い詰めているようにしか見えない。

滝、いや、垣はその名演技の隣でいそいそとケーキにフォークを突き刺していた。空腹感を出すための演技とはわかるが、隣であれほどの騒ぎが起こっているのに、ただ淡々とケーキを食べているのは頂けない。紅茶も1杯、2杯と立て続けに流し込み、これは演技ではなく小さくげっぷして、一瞬吐きそうな顔になった。

これも覚えている。数テイク重ねていたから、ケーキは結構な数が入った。紅茶もだ。満腹寸前だったはず、けれど、それは『物語』とは違う。この滝は『空腹で今にもぶっ倒れそう』なはずなのだ。

それをほみ出してしまえば、『物語』は壊れてしまう。その境界を越えそうな演技に、見ていた客の誰もが、おいおい、と突っ込みたくなっただろう、その矢先、くすくすくす、と時ならぬ軽やかな笑い声が画面の外から響く。

『ルト』

声が猫を呼び、猫が山根の相手を止めて床に飛び降りた。そのまましなやかに画面の外の声の主に向かっていく。それを背後から追っていくカメラは、やがて猫が抱き上げられるのと同時に、声の主、つまり朝倉周一郎をゆっくりと下から舐めていった。

細身のスラックス、伸ばされた手首に纏われたシャツとスーツ、品のいいネクタイとベスト、皺一つないラベルとカラー、そして、周一郎の顔のアップ。まだ幼さを残した少年に不似合いな、冷たい黒のサングラス。

『き、君は…その猫が！』

今度は山根が画面の外からきいきい喚く。それを平然と聞き流して、周一郎は猫を抱いたまま画面を横切り、滝と山根の前に腰を降ろす。膝に抱えられた青灰色の猫が喉を鳴らすのを、指先で応える仕草、画面に強烈な印象を残す鮮やかな微笑。

『非礼は謝ります』

人に心を許さぬような冷たい声音が響く。

『ところで、あなた方がぼくの遊び相手になるうというんですか？』

山根がいきり立って、名を名乗れ、と迫った。

『ぼくは朝倉周一郎、朝倉家の当主です。自己紹介をどうぞ』

傲慢とも言える口調、年齢にそぐわぬ威圧感に押されて、山根が咳払いして自己紹介を始める。その山根と、同時に隣の滝を値踏みするかのような周一郎の表情…。

「、」

修一はどきりとした。

今まで気づきもしなかったことを一つ、思いついた。

(そうか…)

何が違うのかを考えていた。周一郎の何が変化したのかを。

(周一郎が滝を試す気持ちが違うんだ)

『猫たちの時間』も『月下魔術師』も、周一郎は滝を試す。

けれど、『猫たちの時間』の方は自分の計画に使えるのか使えないのか、もし使えなければ捨ててしまえという試し方だ。対して、『月下魔術師』の方は、滝が周一郎のことを切り捨ててほしくないと思いつつも試さずにはいられない試し方だ。

(滝への思い入れが全く違う…)

なるほど、そういう眼で見れば、確かに修一の周一郎は同じことしかやっていない。意地っ張りな周一郎が滝の心を信じられるか試している、そこまでしか考えなかった。

「そっか…」

修一はプレイヤーを止めた。夢から醒めたようにびくりとして、食い入るように眺めていた姿勢から体を建て直す垣の横顔に、滝の姿を重ねてみる。

(ただ、試したんじゃない)

『月下魔術師』の周一郎は、試したくなかったのだ。試したくないのに、試さざるを得ない自分や、そういう成り行きを密かに負担に感じていた。

(きっと、言ってほしかった、ここに居てもいい、って)

それは、無意識の甘え、だ。

『月下魔術師』の周一郎は、気づかずに滝に甘えていた。

「垣さん…」

「ん？」

「今日、止まっていったら」

「気づくとそう誘っていた。」

「もう最終、ないよ」

「え、ええっ、あっ、もう1時か…」

驚いた垣は茫然とし、時計を確認して無然とする。そんなに時間たってたか。いつの間にだ、そうぼやきながら、ふいにはっとしたように修一を振り向く。

「あ、けど、友樹さん達は」

へたに入り込んでたら迷惑だよな、けどやっぱ随分遅いんだな、とわたわたしつつ、その一方で会えることを期待しているような顔で玄関の方を振り返る垣に苦笑する。

「おとうさん達は、ほとんどここに住んでないんだ」

「へ？」

「僕、大抵1人だし」

「あの…？」

訝しげにきょろきょろと周囲を見回す。

ああ、ひょっとして数年前の『お宅訪問』記事を読んだりしてるのかな、と修一は苦笑を深める。あれは確かにこのマンションだったし、一家団欒の気配も演出されてたし、寝室やプライベートルームにも父親や母親の個人的なものが結構持ち込まれていたけれど。

(そんなわけ、ないじゃん)

双方とも売れっ子の役者ならば、日常生活の時間をひねり出すのは至難の技、ましてや母親が料理したり、父親が趣味の本を開きながら穏やかにコーヒータイム、なんて時間が存在するわけもない。

「1人…？」

垣の視線がソファに乗っている毛布、そこに座らされていた『と』を眺め、ようやく周囲に全く人の気配がないのに気づいた顔で呟いた。

「1人で、『ここ』で寝てる、のか」

「あ、あのさ」

ふいに不安になった。こんなソファで寝るとか、この後ずっと修一に付き合わされるとか考えてるだろうか。

「ちゃんと寝室で寝てもらっていいから。僕はここでいいし、寝室は使わないから」

「……………」

垣は不思議な表情で修一を見やった。少し考える。

「じゃ、そうしようか」

寝室はどっち、と聞かれたから、あっち、と指差す。立ち上がってすたすたと部屋を出て行く垣の後ろ姿、もう寝るつもりなのかと思いつつも、何だかふいと、自分とそれほど一緒に居たくないのかと思って。

(ちえ……ちえ…?)

唇を尖らせかけた自分に気づいてぎょっとした。

(何で?)

その疑問を突き詰める前に、垣が寝室から戻ってくる。なぜか布団を抱えている。

「垣さん？」

きょとんとして首を傾げると、相手はにちゃ、と笑った。

「オレもこっちで寝る。見て来たけど、ああいう立派な寝室ってのは、寝た気にならねえよ。構わねえよな？」

「あ、うん」

(一緒に寝てくれるんだ)

無造作になれた様子で布団にくるまり、ごろりと絨毯の上に横になる垣見て、何だかひどくほっとした。

「電気、消すね」

「ああ」

「明日目覚まし鳴るから」

「わかった」

「オヤスミナサイ」

口に出したことばが、妙に空々しくて浮ついていて、現実のことばなのに芝居の台詞のように空回りしていて、修一は戸惑う。

「おやすみ」

眠たげな垣の声に応じて灯を消す。部屋の隅の小さな灯だけが残る室内、いつもならぴりぴりきりきりとしてなかなか眠れないのに、ソファに戻るあたりで、もうふわふわと眠い感じがしてきた。

「……おやすみ、なさい」

今度はちょっと『人のことば』になった気がする。

既に垣は寢息をたてている。気持ち良さそうな、くったりと警戒心一つない呼吸が繰り返されるのが、波音のように遠くなり近くなり。

(おやすみなさい……垣さん)

胸の中で呟いたことばが、今まで聞いたことがないほど明るく澄んでいて、その響きに聞き惚れながら、修一は優しい眠りに落ちていった。



### 3.シーン306

「よーし、カット！」  
「垣さんっ」  
「あらら、もう飛んでった」  
スタッフの一人が苦笑まじりに、垣の側に駆け寄っていき修一を見る。  
「このごろ、あの二人しょっちゅう一緒ですね、山本さん」  
「お、高野」  
山本と呼ばれた男は、珍しく手持ち無沙汰に手近の空き箱に腰を降ろしている相手ににやりと笑いかける。  
「暇そうだな」  
「まあね」  
高野は軽く頷き、垣にじゃれついている修一を見やる。  
「最近、1シーン終わるごとにああでしょ」  
「前はいろいろうさかったのにな」  
「そうですよ！」  
高野は大仰に頷く。  
「1シーン終って、飲み物と椅子が準備できてないと、たちまち機嫌が悪くなったんですからね」  
「こっちで見てても大変だと思ってたよ」  
ポケットから出した煙草を銜えながら、山本は高野の隣に腰を降ろす。ちょいと譲った高野が、勧められた煙草に軽く手を振って断り、吸うと匂いがきっちり残るでしょ、と苦笑いする。  
「お前さんがオレンジジュースとミルクのどっちを用意するかで苦労してたのも知ってるしな」  
「暑い日だからと思ってジュースの方を用意しとくと、『ホットミルクちょうだい』でしょ。時々、急に葉っぱで入れた紅茶が欲しいなんて言い出されて、近所のスーパーに飛び込んだこともあったんですよ。ちゃんと『お好み』を満たさないと、佐野さんと修一さんの両方からお小言くらうし」  
「修一『さん』なんてよせよ、修一でいいじゃないか」  
「そうはいきませんよ」  
ひょいと高野は肩を竦めて、いたずらっぽく笑って見せる。  
「壁に耳あり、障子に眼あり。いつ足下を掏われるかわかんない業界ですからね」  
暗にあんたも油断ならないよ、と言ってるのを、山本はさらりと流す。  
「大変だな、お前さんも」  
しみじみと同情したような声音は偽りではないだろうが、本音でもあるまい。  
修一は撮り終わった垣に、まとわりつくように話しかけている。  
ほんの少し前までは親しげであっても、あんな風にあからさまに甘えるような仕草はしなかった。垣に話しかけるのは演技についてのことがほとんどだったし、大抵はむっつりと自分専用の椅子に腰掛けているのが常だった。それこそ、ごくたまにはしゃいで垣に話しかけることはあっても、かなり機嫌のいい時か取材陣が取り巻いている時に限られていた。  
なのに、今の修一の様子は、どう見ても年齢相応、或いは、それ以下の子どもが、大人に相手にしてもらおうと一所懸命にご機嫌とりをしているように見える。  
「おーお、無邪気な面して…」  
「垣さんが戸惑ってますね」  
「そりゃ、ああいう修一の態度には慣れとらんだらう」  
「でも…」  
「ん？」  
「どうしてなんででしょうね」  
「何が」  
「どうして急に、修一さん、垣さんにくっつきだしたんだらう」  
「さあな」  
山本は垣がコードに躓いて派手にこけるのに吹き出す。  
「ドジの見本みたいな奴だな」  
呟いて、笑い声をたてながら垣に駆け寄っていき修一に、興味深そうに目を光らせた。  
「また気まぐれなんじゃないのか。修一だって、ここで伊達に10年も役者やってるわけじゃないし、相手役とうまくいかなきゃ『映画(もの)』がうまくいかないことぐらいわかってるだろ」  
「それだけかな」  
高野は考え込んだ顔になった。  
「ねえ垣さん」  
甘えているようにしか思えない修一の声が響く。  
「お昼食へに行こうよ」  
誘われた垣は困惑顔で何やらぼそぼそと受け答えし、修一は小首を傾げて頷く。  
「うん、でも気分転換も必要だって。そういうこと、今までなかった？」  
今一つ乗り気ではないらしい垣を、何とかなだめすかそうとする気配、友樹修一がそこまで執着し下手に出るのも滅多に見られない光景だ。  
「ああしてるとまるっきりのガキなんだがな」  
山本がぼつりと呟いた。  
「……ま、親がああでなけりゃ、あいつもただのガキさ」  
修一の複雑な環境を一瞬思い、けれどそれ以上踏む込むことなく切り捨てる。  
「そうですよね、まだ14だから」  
高野はその暗い響きに気づかないまま、淡々と応じて立ち上がった。要望がなく機嫌がいいからと言って、修一を一人で放置していたら、また佐野にどやされる。  
「ま、あいつがいる限り、お前さんは暇になる」  
「く、と山本が顎をしゃくって垣を示す。  
「格好のおもちゃで遊んでるうちは機嫌がいいさ」

「じゃあ、垣さんはちょっとした福の神ですか」

「気をつけてねえとひらひらとどこかへ飛ばされそうな『紙』だがな」

「人が悪いですよ、山本さん」

くつつくつ嗤う相手を、本気で窘める様子もなく、高野はにやにや笑いを広げた。

(まったく、どうしたっていうんだ?)

垣は訳がわからないまま、自分にまわりつく修一に眼を落とす。

(からかってる、ってわけでもなさそうだし)

きゅん、と人なつこい子犬を思わせる仕草で修一が振り返り、垣がちゃんと付いて来ていると確認して、露骨に嬉しそうな顔になる。

とにかく最近、修一はやたらと垣の側にくっついていたがる。ひどい時には一場面終るごとにいそいそと駆け寄ってきて、それでいて、別に打ち合わせや演技の指摘があるわけじゃない。疲れちゃったとか、暑いねとか、本当に他愛のないぼやき半分、時に飲み物を飲むかと尋ねられたり、昼になれば御飯を一緒に食べに行こうと誘われたり、仲のいい友人二人がたまたま同じ現場ででくわして、大変だけど協力してやっていこうな、と言い交わすような顔で垣を見る。

何か魂胆があるにしては、邪気のなさすぎる表情だ。

(まあ、こいつは『名子役』だから、その気になれば、どんな『ふり』だって出来るんだろうが)

そういうもので懐柔されるのは面白くない、かと言って、もし修一が本気で、何か心境の変化があって垣を認めてくれているのだとすれば、千載一遇のチャンス、修一とのコネは今まで辿りつけなかった未来へ垣を引き上げてくれるだろうし、手放すわけにはいかない関係……そんなこんなを考えて、つい足下への注意がおろそかになり、のたうっていたコードに躓いてこける。

「ぶ！」

「垣さん！」

少し先を歩いていた修一が慌て気味に駆け戻ってくる、まるで小さな弟が転んでしまったのを心配するように。怪我はしていないかと不安がる顔で覗き込んできて、垣が衝撃に眼を白黒させているのに、明るく笑う。

「凄いや、こんなところでもこけられるんだから、やっぱり垣さんは凄いね」

「ちえっ」

それは褒めてんのかよ、どっちかと言うと嘲笑ってるんじゃないかねえのかよ。

舌打ちしてやさぐれた呟きを心の中で漏らしたものの、修一があまりにもあっけらかんと笑っているので、怒る気も失せてしまった。

もそもそと起き上がる垣を、修一は大人しくじっと待っている。その様子がひどく小さな子どもに見えて、ふいに、この少年が自分と10歳ほども違うのだと気づいた。

(小さく見えるはずだよな)

思い出したのは、先日訪れた、修一のマンションでの出来事だ。

ベルを鳴らし、ノックをし、声かけしても返答がなかった。終電間近の街は大声を出し続けるには静か過ぎた。このまま帰ろうかと思った頭に過ったのは、伊勢監督の無能呼ばわり、ええいままよ、とノブを回せば、意外にあっさり開いてぎょっとした。

こんな夜に施錠もしていないなんて、しかも友樹夫妻のマンションにおいてはあり得ないだろう。ひょっとすると、何か異変が起こって、それで鍵を開けたまま出て行ったか、或いは中でとんでもないことになっているか。

ごくりと唾を呑み込んだ垣の頭には、このマンションが売れっ子俳優夫婦の家にしてはこじんまり過ぎるとか、あからさまに私宅アピールがうさん過ぎるとか言う結論はない。

奥の方でがさがさと何かが動く、つまりは人の気配がしたのを良い事に、そうっと部屋の中へ忍び入る。

だが、飛び込んで来たのは、あまりにも予想外の光景だった。

部屋の中に広がる鮮やかな色の洪水。おもちゃ箱をひっくり返したような光景の中で、一際赤い滴りに指先を濡らしてへたり込んでいる修一の姿。

ぎょっとして踏み込んでいろいろ手当をしましてから我に返り、修一とことばを交わすうちに気がついた、あまりにも寒々とした生活感のない部屋の様子。

(ここには誰も住んでねえのか?)

ようやく頭に過ったのは、このマンションがたびたび『友樹夫妻の私宅』として取材され公開されることがあるという事実、ついでに、大物俳優の家にはお粗末すぎるセキュリティ。

けれど、その中に修一は居る、場所の確保に置き去られて忘れられた物のように。

なだれ込むようにDVDを見ることになって、そこで改めて自分の才能のなさとか、隣ではしゃぐガキの凄さとか、まあそういうなんだかんだの鬱屈を背負わされたものの、泊まっていけと言った修一の顔にためらった時、部屋の冷たさが重なった。

ソファに載せられっ放しらしい毛布、小さな猫のぬいぐるみ、その瞳に映る天井のシャンデリア、火の気のないダイニング・ルーム、冷えきって埃が溜まりつつある寝室。

(どこもかしこも物置みたいじゃねえか)

自分を泊ませようとあれやこれやとことばを重ねる修一が、いつものように自分のドジを嘲笑う名子役の友樹修一ではなく、どこにでもいるような、しかも孤独で人の熱に飢えている14歳の子どものように見えた。不安げで頼りなげな表情、だがそれも一瞬のこと、『泊まる』と応じてしまうと、幻のようにかき消された顔だったが。

(まんまと乗せられちゃった、んだらうな)

垣は心の中で溜め息をつく。

相手は友樹修一、希代の名子役、それをDVDでまざまざ示されていたと言うのに。

修一の外面の良さにあしらわれている周囲の大人やファン達を嗤えたもんじゃない。

(オレはよっぽどバカなんだな)

考えつつも、何度思い出しても、あの時の修一はとて1人で残せないような感じがした、そう思って、また苦笑う。

(才能以下だ)

本当に役者には向いてないんだろう。  
「何食べる、垣さん？」  
話しかけてくる修一の端整な横顔を見つめ返す。  
役者は相手の気持ちを動かし、引き出し、行動を促す。  
それが仕事だ。  
あの夜の修一の意図はわからない。夜中に何を仕掛けられることもなかったし、泊まったことをネタに何か要求されることもなかった。  
だが、この先もそういうことが一切ないとは言い切れない。  
(今度は一体何をやらせようって言うんだ)  
警戒心は募る。  
「ねえ垣さん」  
ふいと修一が垣を振り仰いだ。  
「あ、ああ」  
無邪気で可愛らしいじゃないか、そう感じたのを無理矢理押さえ込む。  
「そうだな、オレは何でもいい」  
「そう。じゃ、ここ入る」  
慣れた様子で近くに開いた扉に向かう修一。周囲を見ると、似たような店はいろいろあるようだが、最初からそこを目当てにやってきたと取れなくもない。あえて違いがあるとしたら、こじんまりとしたファミリーレストラン風に見えて、店の看板がごく小さく、メニューらしきものが一切掲げられていないというところか。開いた戸口の向こうでは、やや年配のギャルソン風の男性が、穏やかに微笑みつつ、こちらに視線を合わせてくる。  
たぶん、修一の好みの、つまりはいささか高級な店。  
(金…あったかな)  
「いらっしやいませ」  
「席は空いてる？」  
「こちらへ」  
修一の、聞きようによっては傲岸不遜な問いかけに相手は不満そうな気配さえない。静かに会釈して、垣もゆったりと迎え入れ、窓際の整えられた席に案内してくれる。  
濃い色のテーブルクロス、座席に入った二人にシックな色合いの革張りのメニューが届けられる。  
(おいしいっ)  
値段を見て垣は絶句する。  
(昼間だぞ昼間)  
誰がこんなディナー並のレベルの店で食うんだ？  
うろたえを隠して、それでも一番安いピラフ単品を選ぶ垣に、修一がくすくすと楽しげに笑う。  
(こういうところが！)  
むかつくんだよな、こいつ。  
垣は唇をねじ曲げ、窓の外へ視線を向けた。

「たーだいまっ、と」  
足取り軽くドアを開けて、修一はマンションの部屋に戻ってきた。  
「今日は早く終って良かったですね」  
高野が背中から声をかけながら、続いて入ってくる。  
「うん！ ほら、まだ夕方だよ！」  
ぼん、とソファに飛び乗りながら、修一は上機嫌で答えた。  
「何にします？ 紅茶ですか？ コーヒーですか……それともホットミルクですか？」  
いつものように几帳面に高野が尋ねる。  
「何でもいいよ」  
それほど喉も乾いていないし、これとって飲みたいものもない。だから何でもいいや、そんな程度に気軽に応じた。  
「『ると』っ、ただいまっ」  
ひょいとぬいぐるみの首ねっこを摘んで持ち上げ、その鼻面に自分の鼻を押しつけた修一は、動きのない、いやそれどころか、答えのない高野の方を訝しく見やった。  
うろたえるかと思った高野は、世にも奇妙な表情でこちらを見返してくる。  
「……どうしたの？」  
「あ…あの…」  
複雑な表情、引き攣っているのが驚いているのか、まるで鼻先で風船が割れた子犬のように、ぴん、と体を張って止まっている。こういうのを何て言うんだっけ、と修一は一瞬視線を泳がせて考える。  
うん、『鳩が豆鉄砲を食らったような』、か。  
(豆鉄砲って何だったっけ？)  
違う方向へ思考を外しかけた修一の注意を引きつけるように、高野が口を開く。  
「あの、何でもいって」  
「うん、何でもいいけど」  
おかしいこと言ったかな？ ちゃんとした日本語だよな？  
「変な高野さん」  
思わずくすりと笑うと、相手はなおさら奇妙な顔になった。  
「あの…」  
何度か唾を呑み込み、ようよう高野はことばを絞り出した。  
「何か、言って下さい」  
「は？」  
「その…」  
もじもじと不安そうに体を動かす。

「何でもいって言われると、逆に困って…」  
「ああ、そうか、うん、そうだよね」  
ようやく腑に落ちた。命令に慣れているから、命令されないと動けなくなるってわけ。  
準備しやすい好きなものを選べばいいのに、と思いながら、修一は思わずくくくっ、と喉の奥で笑ってしまった。  
「じゃ、紅茶」  
「はい！ 紅茶ですね！」  
ほっとした顔で、いそいそと高野がダイニング・ルームに駆け込んでいく。  
やれやれ。  
「佐野さん」  
修一は『ると』を抱きかかえながら、背後を振り向いた。  
「はい」  
二人のやりとりをじっと見守っていたらしい、佐野のひんやりとした黒い瞳にぶつかった。  
「明日のスケジュールは？」  
「映画撮りがメインです。休憩の間はCDとDVDと色紙にサインを」  
「いいよ、何枚？」  
再び『ると』を覗き込む。  
「各500枚ほど。販売促進用ですので、それほど数は不要です」  
全国のショップにばらまく予定ですが、小さな店には置きませんし。  
「各500枚、ね…」  
さすがにちょっと溜め息が出た。  
(それって休憩なしってことだよな)  
脳裏を横切ったのは、撮影の合間に細かな仕事を言いつけられている垣の姿。役者だけじゃ食っていけないから、とスタッフに苦笑いしていた横顔を思い出して、微笑んだ。  
「でもいいや、出来なくはない。ね、『ると』」  
(だって、垣さんだって役者の合間にスタッフの仕事をしてるんだし)  
修一がサインをするCDやDVDや色紙が、映画の人気の後押しをしてくれたりファン層を広げてくれるなら、それは垣にとっても嬉しいことだろうし。  
(少しは頑張ったなって言ってくれるかな)  
『ると』のガラス玉の瞳は肯定するように修一を見上げてくる。  
「紅茶、入りました」  
高野が盆にティーカップを載せて戻ってきた。  
「ありがとう」  
修一がかけたことばに、高野はがちん、と置きかけたカップをテーブルにぶつけた。  
「あ、す、すみませんっ」  
(何慌ててんだろ)  
不思議に思いつつも、  
「高野さんや佐野さんも飲んだら？」  
また一瞬高野の動きが止まり、けれど今度はすぐに動き出して、何か佐野と意味ありげな目配せを交わした。  
「残念ですが」  
佐野が淡々といつもの口調で応答する。  
「私はまだ仕事が残っていますので」  
「仕事？」  
修一はきょとんとした。佐野が修一が上がってから仕事を残すのは珍しい。ふと気づいて尋ねてみる。  
「……おとうさんの？」  
「ええ、まあ」  
佐野はことばを濁した。これもまた珍しい。けれど、そう思ったのは一瞬、修一はすぐに高野を振り向く。  
「高野さんは？」  
「あ、と…今日は駄目なんです、すみません、修一さん」  
「ふうん…」  
「では、これで失礼します」「次、お付き合いしますから」  
「うん」  
佐野に引き続き、そそくさと高野も部屋を出て行ったのを見送り、修一は小さく吐息をついた。  
「せっかく時間が空いたのにさ」  
紅茶を一気に飲み干し、ソファにもたれる。  
「2人とも用事があるんだってさ、『ると』」  
1人になって無意識に気が緩んだのか、思わずふわわあ、と欠伸を漏らした。  
昨日は結局3時間しか眠っていない。滅多にかかることのないはずら電話に時間を取られたのだ。さっさと切ってしまうよかったのに、何となくずるずると相手をしてしまい、半分寝落ちるような感じで終らせた気がする。  
「あ…それを佐野さんに言うの、忘れた」  
2人が出て行って数分経っている。ドアを振り返ったが、とっくに1階エントランスは出ているだろう。もう1回セキュリティを解除してまで呼び戻すほどのことでもないかと思い直し、修一は伸びをした。  
「……なんか、眠るの、もったいないな」  
眠い気もするけど、これだけの自由時間は最近ほとんどない。いつも次の仕事のためにばかり備えて、こんなにぽっかり空いた時間などなかった。  
「そう思うだろ、『ると』。皆、まだ起きてるんだし」  
窓に近寄って夜景に変わりつつある街を眺め、見下ろして街路樹の下の道路を歩き続ける人々を眺めた。  
心なしか、皆はしゃいでいるように見える。仕事からようやく解放された、そんな浮き立つ気持ちが透けるような、数人でふざけ合いながら歩くものもある。これからどこへ行くのだろう。カラオケか居酒屋か、誰かの部屋か。  
「楽しそう…だな」

修一だって、この業界に入らなければ、今頃は学校の友人達とじゃれ合いながら、近くのコンビニやファミレスに入り、新しく出たゲームや今夜のTVやネットの話で賑やかに過ごしていただろう。明日の学校は鬱陶しいが、今日の学校はもう終わった。今は何にも縛られない。自由な時間を楽しんでいたはずだ。

「『ると』」

振り返らぬまま、修一はソファのぬいぐるみに呼びかけた。

「垣さんって、どこに住んでるんだろ」

お前、知ってる？

振り返り、戻ってきて、ソファにひっくり返る。天井のシャンデリアは眩くきらきら光りながら、瞳に光を飛び込ませてくる。

「監督に聞けばわかるかな」

窓の外は次第に暗くなっていく。明るい室内が窓ガラスに映って浮かび上がる、まるで世界にはこの部屋しか存在しないみたいに。

よく見知ったその光景を見ないように、修一はシャンデリアを見上げ続けた。

「DVDデッキ、ないんだって。演技がうまくなんないはずだよ、自分の演技確認できないんだしさ……そうだと、『ると』」

閃いた考えにむくりと体を起こした。

「垣さん呼んでさ、ここでDVD見ようか。遅くなるなら、この前みたいに泊まってもらえばいいんだし」

どうせ明日も撮影だ。同じ所へ出勤するのだ。ついでに一緒に佐野か高野に送ってもらえばいい。

『ると』はぱっちりとした眼で修一を見上げているだけだ。

「うん、そうしょ」

修一は部屋の電話の受話器を取り上げた。

「あ……もしもし……はい、友樹修一です。はい……はい……あ、伊勢監督に……あ、監督、修一です。はい……ありがとうございます。またよろしくご指導お願いします……いえ、実は垣さんに連絡を取りたくて……は？まさか……あ……じゃあ、住所でいいです……はい……はい」

聞き取った内容を素早くメモする。やがて通話を終えてくると振り返り向いた修一は、芝居がかった呆れ顔で、指先に挟んだメモを『ると』に向かってひらひらさせた。

「信じられないよ、『ると』。垣さんのところ、電話がないんだって。ケータイも今電池切れらしいってさ。直接行くしかないよ」

脱ぎ捨てたジャケットを羽織ろうとした矢先、激しい勢いでドアが開いてぎょっとした。

「お、かあさん……？」

飛び込んできたのは、目鼻立ちのはっきりした女性だった。そう、かなり情熱的な美しい女性、女優、友樹雅子。そういう認識しか修一には湧かない、実の母親だと言うのに。

相手もそうだったのだろう、部屋のインテリアにちらりと一瞥をくれた、その程度の視線を投げ、すぐに何か気がかりなことを思い出したのか、ドアをきちんと閉めた後、無言でソファの毛布を払い落として座る。

毎晩自分を温めてくれているそれが、ぐしゃりとゴミのように彼女の足下に落とされるのを眺め、修一は羽織りかけたジャケットを脱いだ。一瞬の戸惑いは胸の奥に押し込める。これもまた一つの演技と考えれば、動作は途切れることなく滑らかに続く。

母親の正面に腰を降ろし、小首を傾げて問いかけた。

「どうしたの、おかあさん」

「……」

相手は答えず、苛ついた仕草でセカンドバッグから煙草を取り出した。金と黒の細身のライターを取り出す時に、何かが絨毯の上に落ちたような気がしたが、雅子は気づかない。

「……紅茶、飲む？」

「いらないわ」

断るとは思ったが、つっけんどんな口調で雅子は修一の問いを撥ねつけた。そのまま苛々と煙草に火を点け、慌ただしく吸い始める。膝を上下に揺する仕草は何か集中しようとしてしかねている癖だ。

(今は『炎の女』の録画撮りじゃなかったっけ)

雅子は時計を気にする様子はない。赤い唇に銜えた煙草を命綱のように忙しく吸い続ける。目の辺りに薄黒い隈があり、乱れた髪に片手を差し入れた表情は、いつもの華やかさを幾分欠けさせている。

(珍しいな)

たとえ修一の前であっても、雅子は勝ち気で激しい『女』の姿を崩すことはない。いつも圧倒的な勝者であること、それが彼女の信条だ。華やかで派手で鮮やかで。大輪の薔薇の花束に例えられるそのキャラクターは、実生活でも健在だ。なのに、今日は気怠げで、仕事の疲れではない、どこか老けた印象がある。

「……仕事、どうしたの」

「どうでもいいでしょう」

今度も雅子は修一のことばを叩き落とした。

「子どもがちょっとばかり仕事をしてるからって、親にそういう尋ね方をするもんじゃないわ」

「あ……うん」

(親、ね)

便利なことばだと思う。『親』と口にするだけで、産んだ以外の何かをしてくれたような気がする。もちろん、世の見識者は『産んでもらったことがありがたいんだ』と言うのだろうが、それが『自分のため』ではないという保証などない。

それにしても。

(何があったんだろう)

修一はそっと雅子を透かし見る。

この雰囲気は何だろう。修一に腹を立てているわけではない。修一のことなど意にも介していない。けれど、苛んでいる。今にもヒステリックに叫びながら、物を投げてきそう。ああそうだ、殺気立っている。

(お母さんをこんなに苛ませせる人なんて居たかな)

修一が今の収録に関わっているスタッフの顔を思い浮かべ始めた矢先、部屋の電話が鳴った。瞬間、まるで怪鳥のような素早さで、雅子はソファから飛び上がり突っ走り、電話の受話器を掴み取った。耳に当てるのもどかしく、一気にことばを吐き出す。

「もしもしっ、あたしですっ、えっ、ええ、そうよ、現金よ、すぐに……えっ」

壁を凝視した目が見開かれる。  
「そんなの、今までの10倍じゃないっ…いいえっ！ 欲しい、欲しいわ！ わかった、いつもの所ね、8時に、ええ、きつと、とにかくもう、限界なの！」  
悲鳴じみた声だった。懇願と哀訴がないまぜになった声、友樹雅子の、演技の中ではない現実の、これほど悲痛な声を今まで誰が聞いただろうか。

だが、受話器の向こうの人間はそれを重く受け止めなかったようだ。うろたえた様子で頭を振る雅子を見ていたように、微かな高笑いも響いた気がした。

がしゃん、と放り投げるように受話器を置いた雅子は、すぐにソファに取って返し、灰皿に放置した煙草を見向きもせず、セカンドバッグを掴んで身を翻す。

「おかあ」

「急いでるの！ お金なら佐野に言いなさい！」

修一を振り返ることはなかった。部屋の中を駆け抜け、外へ飛び出していく。すぐにばんっ、と激しくドアが閉まる音が響き渡った。

「……何だろ…」

茫然と雅子を見送った後、のろのろとソファに戻り、燻っている煙草を押しつぶして消した修一は、真下に落ちているものに気づいた。

「…何か、落としていったね、『ると』」

『ると』は毛布と一緒に容赦なく転がされていたが、ちょうど寝そべった状態で落下物を眺めているような格好だ。

その視線に促されるように、修一は手を伸ばして丸く固いものを拾い上げた。

透明な小瓶だ。指先より少し太い。中に粉っぽいものが入っていたのか、内側はうっすらと白く曇っていて、底の方に薄青い細かな欠片のようなものがこびりついている。

「これ…？ …っ！」

再び電話が鳴った。

「おかあさん？」

何か忘れたのだろうか。それとも修一にあまりにも邪険に当たり過ぎたと、冷静になって連絡をしてくれたのだろうか。

いそいそと受話器を取り上げる修一の耳に、粘りつくほど甘ったるい響きの声が囁いた。

『もしもし…わかるう？ あたし、わ・か・こ。若子、よ』

「…番号をお間違えのようですが」

(またいたずら電話かよ)

佐野にきっちりしてもらわなくちゃ、と受話器を耳から離しかけたとたん、

『間違ってるなんか、ないわあ』

嘲笑うように声が応じて眉を寄せた。

『あなた、誰え？』

「…どちら様でしょうか」

『あ、はあん……修一くんか？ あの人の息子。そうでしょ』

(あの人？)

『ねえ、もう帰ってるう？』

脳裏を掠めた顔に修一は目を細めた。

「誰のことですか」

『決まってるじゃない、陽一よ、よ・う・い・ち。いないのお？』

隠してるんでしょう、と言いたげな含み笑いに吐息する。

「いません」

『嘘はだめよ。若子だって言ってくれば、すぐにわかるわ、坊や』

「いないのに、伝えようがないでしょう」

周一郎ばりの冷ややかさだな、と思った。

『そう…残念。また掛けるけど……あなたでもいいわよお、修一くん、あたし、年下の子との相性もいいんだあ、わりと体だって…』

がちゃんっ！

修一は受話器を叩きつけた。そのまま数秒、押さえつけている手から血の気が引くまで押さえ続ける。その分上った頭の熱を、唇を噛み締めて堪え、徐々に息を吐いて力を抜く。

「……わかこ、だってさ、『ると』」

ずきずきするのは頭か胸か、それともこの間切った指先か。

脳裏を過った別の顔に、思わずほう、と息をついた。

(垣さん)

くるりと向きを変え、修一はジャケットを羽織った。

外出時には高野か佐野に連絡するのがルールだったが、この分じゃ母親か父親かに佐野がついているだろう。ましてや、今のぎらぎらした顔を高野に見られるのは嫌だった。1人で歩いて、気を逸らしたい。

「垣さんと呼んでくるね」

転がっていた『ると』をそっと抱き上げ、ぽんぽんと埃を叩き、ソファに座らせる。雅子が踏みつけた毛布は洗濯籠に放り込み、新しい毛布を出してきて『ると』を包んでやった。

「大人しく留守番してるよ」

軽く片目をつぶって笑いかけ、部屋を出て行く。

「…」

垣は自室のドアを開け、電気をつけようとして、しばし思いとどまった。

部屋の中に人の気配がする。

(宮田だ)

こんなことを考えるのはあいつしかいない。また垣を脅かそうとしているのだ。

何があってもびっくりしないように、深呼吸を一つしてからスイッチに手を伸ばす。だが、今度はぴっとりとく嫌らしい感触はない。

パチっ。

「よっ」

点いた灯の下で、こちらに向かって敬礼をした宮田を、垣はわなわな震えながら睨みつけた。宮田の手にはカップ・ラーメン、温かく湯気を上げているそれは、確か買い置きしてあった最後の一品……。

「もらったからな」

「お、の、れ、は、な…」

「ん？」

「食うなら電気つけて食え！」

垣の罵声に宮田はにっこりと笑う。

「いや、それがさ」

「何だ！」

「小さい頃、母親がラーメン嫌いだね」

何の関係がある、となおも睨みつける垣に、まあまあと手を振ってみせ、

「いつもこっそり食べるのに必死だったんだ」

「それで！」

「それで、押し入れの中でよく隠れて食べたんだよな」

「あー？」

「だから、暗い中で食わんとラーメンの気がしない」

「……」

ぐったりと思わず座り込む垣の肩を、宮田がポンポンと優しく叩きながら慰める。

「まあ、いつかいい日も来る…」

「おのれが消えりゃ、すぐに来るわい！」

がばっと起き上がる垣の目の前に、宮田は手帳に書いた人名を突き出した。

「あ？」

「読めるか？」

「…あ、ああ。友樹、雅子」

修一の母親、誰だって知っている大女優だ。

「何か知らんか？」

「何かって」

宮田は垣に質問を投げたまま、元の場所に座り直し、放置したラーメンを啜り出す。ずるずるずるっと、お世辞に品がいいとは言えない音が狭い部屋に響いた。

「この前、修一と一緒に暮らしてないって言ったよな、宮田」

ずるずるっ。

「それから、今、『炎の女』の録画撮り中で…」

ずるるっ。

「後はそう…」

ずるるるるっ。

「ええい、やめんか、このっ！」

尋ねたんなら人の話をちゃんと聞けっ、そう怒鳴った垣を、宮田はそよ風が吹いた程度にも感じない顔で見上げた。

「それじゃ、一緒に暮らしてないって事しか、わかんないのか、お前は」

「ま…まあ…」

ごくごくごくごく、ぷはっ。

「それで、父親の方もそこにはいない、と」

ちっちゃ、と面倒くさそうに舌を鳴らす。

「うん、修一は大抵一人だと言ってた」

事実、あの部屋にはほとんど人が暮らしている気配がなかった。ダイニングキッチンにも、調味料とか洗剤とか、そういうものは一切なかったし。

「ったく……あんまり手がかりにならんなあ」

ほんとに使える男だな、お前は。

宮田は深々と溜め息をつきながら首を振る。

「お前、修一と一緒に暮らせ」

「は？」

「お前のケーアイする友樹陽一にも会えるかも知れんぞ」

「やめてくれ、修一のご機嫌取りをずっとやらせる気か？」

そのうち絶対胃に穴が開くに決まってる。

「俺は困らない」

「当たり前だろうが！」

平然とした顔の宮田を罵って、垣は腰を降ろす。

「でも、どうしてそんなに友樹に拘る？」

「新聞、ないのか」

「話を逸らすな！」

「逸らしとらん」

空になったラーメンの容器を放り出し、宮田は部屋の中を見回した。

「ほんっとに何にもない部屋だな」

「…時計を勝手に質にいらしたのは誰だ？」

「あれは驚いたな、あんなものでも質草になるとは」

「誰だって聞いている！」

「俺だぞ。何か言いたいのか？」

心底に不思議そうに真顔で見返す宮田に、垣はひらひらと手を振った。

「わかった、話を続けてくれ」

「新聞があれば話しやすいんだが……おっと、署に戻らんと」

「食い逃げさせるか！」

ひょいと立ち上がる宮田に、垣は慌てて立ち上がった。構わず部屋を出て行こうとする宮田を追う。

「だからだなー……お前、ほんとに知らんわけ？」

「オレは警察じゃない」

「俺だって『警察』じゃないぜ、俺は『刑事』」

「！！！！！！」

「わかったわかった。最近、芸能人の間にかんりのヤクが出回っているのは知ってるか？」

「まあ…何となく」

「ふん」

宮田は牛乳ビン底眼鏡を押し上げ、開いたドアから通りを見渡し、少し声を低めた。

「それで、うちの方でも薬の販売ルートを洗ってるんだが、ある売人がヤクをかなりな高値で売りさばっている組織があるってゲロした。大きな声じゃ言えないが、綾野コンツェルンってあるよな？」

「ああ、あの『皆様のアヤノ、アヤノ産業でございます』ってやつ」

「そう、『お子様に夢を与えるアヤノ玩具、豊かな食生活を築くアヤノ食品グループ、よりよい生活をエンジョイするお手伝いをさせて頂くアヤノレジャー・センター、アヤノ総合株式会社、明日をお約束するアヤノ…』」

「いいかげんにしろ」

「ほいほい、と。ま、その綾野コンツェルンが裏で覚醒剤を流通させているという情報を手に入れた。他にも、芸能界の薬使用者、つまり上得意様、を漏らしたんだが、その中に友樹雅子の名前があった」

「まさか！」

「声が大きいぞ」

「だって、あの人がそんなことするわけが…」

茫然とする垣に、宮田は悪魔的な笑みを浮かべてみせる。

「君は人間を信じ過ぎてるよ、『滝君』」

「ぐっ」

身を翻してドアを擦り抜けていく宮田を、それとなく垣は追いかけた。まだ何か話してくれそうな気もしたからだが、それきり宮田は黙ったまま、垣も話の接ぎ穂を見つけれないまま、二人で通りを歩いていく。

「お」

ふいに宮田が立ち止まり、垣を振り返って映画館前のTV画面の予告編を示す。現在上映中の映画、というやつだ。

「ほら、やってるぜ」

「…ああ」

映し出されていたのは『京都舞扇』の一場面だった。

ちょうど、清に、良紀と京子の死が周一郎のせいではないかと疑われ、落ち込んだ周一郎が雨の中を一人歩いていく場面だ。画面が白く見えるほど叩きつける雨の激しさも一切感じていないかのように、周一郎は淡々と歩いている。通りすがりの子どもが、傘の下から訝しげな顔で周一郎を見上げていく。

と、画面が切り替わって、垣が傘を片手に雨の中を走っている場面になった。

「でたでた」「よせよ」

嬉しげにぱちぱちと手を叩きかける宮田を制し、気恥ずかしさに落ち着かない思いをしながらも、垣は画面に見入った。

『周一郎！』

画面の中の垣——滝志郎が、周囲を見回しながら走っている。子どもに尋ね、不安げな顔で振り返り振り向き、それでも何かに引きずられるようにまっすぐに。

いよいよ京都口ケの松尾橋のシーンだ。カメラは滝の視点になっている。遠くに霞む小さな人影、はっとして駆け寄ったような急なズーム・アップ、前方の人影が振り返る。小柄な少年の姿、雨に穿たれ砕かれそうな脆い気配、た・き・さ・ん、と唇が動いたが、白く凝った表情は生気がない。

ふいに、周一郎は唇を綻ばせた。

髪が張りつく濡れた顔、微かに細められた瞳が描く気弱な笑み。その笑みを見た誰もが思うだろう、こいつは誰だ、と。何かの異変を感じる、極めて鋭い危うい均衡。

『周一郎っ！』

はっとしたような画面の外から響く滝の声は、観客の心の代弁だ。その声とほとんど同時に、立ち止まった周一郎の背後から、とん、と男がぶつかる。当たられた周一郎が少しよろける、と、大波に持ち去られるように体を泳がせた少年は、不思議そうな表情で川面を覗き込み、やがて微かな安堵の顔になる。そして、欄干へと身を任せてそのまま…。

『周一郎っっ！！』

続く意味を為さない喚き声をBGMに、周一郎の体がスロモーションで欄干を越える。カメラが第三者の視点に戻って喚き散らす滝の顔をアップにする。こちらもずぶ濡れになっている滝の顔に、新たな光が溢れて流れる。

。「げ」

垣は思わず画面から目を背けた。

その前の修一の、欄干の向こうへ崩れる場面が詩的なほど整っているだけに、自分の顔のアップがどうにもこうにも仕方ないほどみっともない。涙だけじゃなくて鼻水まで出てるようにしか見えないなんて最悪だ。こんなものをアップにされて、観客も思わず目を伏せただろう。

思わず向きを変えて通りへ目を向けたとたん、ちょうど通りの向こうの歩道を、今画面の中で見たばかりの顔が過っていくのに気づく。

「へ？」

(周一郎？ いや……修一、か)

一瞬の戸惑いはすぐに消えた。あれほど目立つキャラクターが、群衆の中でよくも誰にも気づかれずに擦り抜けていけると感心する。

修一は手にした紙切れらしいものを見ながら、ちょうど青に変わった信号に横断歩道を渡り始める。とほぼ同時に、信号無視か、1台の乗用車がブレーキ音を響かせながら横断歩道に突っ込んできた。驚きに立ち止まる歩



行者、同様に修一も立ち止まり、突っ込んでくる車をただただ見つめている。その修一へ車はまっすぐに滑り込んでいく。

「っ！」「ああ！」「わぁっ！」

何人かの声が交錯した。立ち止まったはずの修一の体が、寸前、どん、と誰かに押されたように前へのめる。ぎょっとした顔で口を開いて振り向きながら、たたらを踏んで数歩前へ、修一が道路へ崩れる上に、近づいた乗用車が容赦なく飛びかかっていく。

## 4.シーン119

車が突っ込んでいった一瞬、頭の中が痺れたようになって、垣はその場から一步も動けなかった、いや動こうとも考えなかった。が、その瞬間、立ち竦んだ垣の背中を嫌というほど突き飛ばした者があった。

「ふえ！」

声を上げ、つんのめるまいと脚を踏み出したのに走り出す。強張った脚がゼンマイ仕掛けのおもちゃよろしく、カタカタと勝手に体を前へ運んでいってしまう。

「ちょ、ちょ…」

ちょっと待て、人も急には止まれない。考えた垣の目に、見る見るクローズ・アップされてくる車とその前に倒れ込んでいく修一の姿が映った。

(おい待て何をやってるんだお前)

恐怖で顔を引き攣らせた修一とほんの一瞬目が合った時には全力疾走中、両手を前へ突き出したのはドラマの見よう見まねだったか、フットボール選手さながらのタックルが決まる。

「うっ…」

小さな声と同時に相手の体重が肩にかかった。次には2人の体は車の進路を僅かに離れた路上に叩きつけられる。

「ぎゃ！」「っ！」

アスファルトに体を打ちつけて悲鳴を上げる、急ブレーキの音猛々しく、タイヤをしきらせ進路をねじ曲げ、転がった垣の爪先から数cmも離れていない所を車が駆け抜ける、や否や、逆立ちしそうな勢いで止まった車から、うろたえた顔で運転手が飛び出してきた。

「大丈夫か?!!」

「は…」

垣は詰めていた息を吐き出した。わあっと人が騒ぎながら駆け寄ってくる。

(俺ってすげえ大人気)

ちがうちがう。まあそうだったら言うことなかったのだが。

ぼんやりしつつ、垣に吹っ飛ばされて転がっている修一に目をやる。

(生きてら…)

修一は真っ青になっていた。見開いた目は焦点が微妙だ。垣を見つめながら微かに体を震わせている。

「あー……怪我は？」

修一は唇を開いた。ことばにはならず、そのままのろのろと首を横に振る。体は起こしているが座り込んだまま、立つこともできない様子だ。

(そりゃショックだろうさ)

「オレもショックだ…」

のたのたと四つん這いになり、けれどもこちらも立つことができず、べたりと腰を落として背後へ喚いた。

「みやたああっ!!」

「ああ、ちょっと待て、今事情聴取中…」

「事情聴取もくそもあるかあっ！」

垣はあわやあの世行きだった反動に、声を限りに喚き続けた。

「てめえの目の前で起こった事だろがぁ！」

「いや、それでも職務上、な。俺は刑事だから」

「どこの世界に友人を『突き飛ばす』刑事がいるっ!!」

「あ、知ってたの」

のうのうと言り返されて頭が煮えた。振り返りたかったがまだ頭がくらくらする。

「お前しかおらんわいっ！」

「いやあ」

のんびりとした口調で笑いながら、宮田は座り込んでいる垣の元へやってくる。

「お前が助けに行かないかなあ、と思って」

「てめえがいきやいだろうが！」

「俺？ そういうタイプじゃないもん」

しゃらっと流されて相手を見上げる。

「は？」

「そういうハードボイルドってしんどいでしょうが。怪我すりゃ痛いし。俺は頭で勝負するから」

「あ…」

残っていた気力が尽きた。

そうだそうだよなあこいつはずっとそういうやつだったよなああ。

めまいを堪えつつ泣きたいのか怒りたいのかわからなくなる。

「おいおい、そういうところで果てると、こっちがまいるぞー」

能天気な声にもう一度気力を奮い起こして目を上げる。と、宮田はいつの間にか側を離れ、へたり込んでいる修一に屈み込んでいた。深々と修一の顔を覗き込む、その距離が異常に近い。眺めていた垣の脳裏に、宮田の超大ピンナップと一緒に浮かんだ台詞がある。

『うん、俺の好みでもある』

宮田は修一の腰近くを探っている、と、何かを拾い上げた。街の灯にきらりと光ったそれは、小さな瓶のようだ。ちらりとそれを見やった後、そのまま未練げに修一の体に手を伸ばす。

「み、みやっみやっ宮田あっ!!」

やばい。こいつに節操という日本語はなかった。

「うん？」

今もくい、と指先で修一の顎を押し上げて、宮田は垣を振り向いた。修一は為すがままだ。

「どうした？」

「おまっおまっおまえっ」

「噛むなよ」

「噛みたくもなるっ！ 衆人環視の中で何やってるんだ！」

跳ね起き慌てて修一の側に駆け寄った。2人の間に割って入る。  
「何って…友樹君の顔色を見てるんじゃないか。……お前、何考えたんだ？」  
「まぎらわしいことすなっ！」  
「へえ、何と紛らわしいんだ」  
「あのなっ」  
「か…垣さん…」  
へらへらした宮田の言い草に吠えかけた垣の耳に、か細く弱々しい声が聞こえた。  
「友樹君？」  
振り返ると、まだ青い顔で修一が唇を震わせている。  
「大丈夫か？」  
「僕…誰かに…」  
必死にことばを紡ごうとする。  
「へ？」  
「誰かに…押された…」  
垣は思わず宮田の顔を見た。

「少しは落ち着いたか？」  
「うん…」  
修一はホットミルクのカップを両手で包み、声が震えるのを何とか押さえようとしていた。胸の底が、まだショックで震えている。  
ここは修一の部屋だ。いつものソファに埋まり込み、前には垣が座っていて、コーヒーを飲みながら、時々心配そうに修一を見ている。宮田と呼ばれた男は部屋の隅で、修一の父母に連絡を取っている。ただの事故と見るわけにはいかない、と判断したらしい。  
ともすれば、カチカチと噛み締めた歯が音をたてそうになるのをやっとなげける。  
目を閉じても、さっきの出来事が容赦なく甦る。

(え……?)  
押された瞬間、振り返った修一は、人混みに紛れ込むベージュのコートの後ろ姿を捉えていた。自分がどうなっているのかに気づいた時には既に体は前へのめっており、近づきつつある車が自分を引き潰していくことは間違いない。  
(死ぬ?!)  
閃光のような悲鳴が胸に溢れた。身体中の神経が麻痺し、周囲が真っ白になる。体が強張って、見開いた目には車の凶暴な姿が、耳には地面を揺らせる唸りが近づきつつあった。  
(おとうさん……おかあさん！)  
心のどこかで素直に助けを求め、もう少し違うところで嘲笑じみた声が囁いた。  
(父親は仕事か愛人のところさ、母親も仕事か……あの電話の主のところだ)  
そうだ、誰もお前の側にはいやしない。  
(でも……でも！)  
修一の心は相反する二つの想いに引き裂かれ、絶叫して碎けていった。蝶が蜘蛛の巣にかかったように、1秒毎、数cm刻みで近づく死の影に絡みつかれるのを、痛いほど感じる。幼い頃の、まだ父母ともに仲が良く、修一を2人して育ててくれた思い出が、走馬灯のようにきらきりと脳裏に巡る。  
(死んで？ おとうさんは嘆く？ おかあさんは……嘆く…?)  
いや、どちらも、本当には嘆いてくれないのではないか。  
記者会見ではもちろん2人とも泣くだろう。母はわあわあと、父はひっそりと。  
けれど、どこまでが本当の涙なのだろう。どこまでが本当の哀しみなのだろう。  
(全部嘘かも知れない)  
焼けつくような痛みを感じた。  
(全て『仕事用』の姿かも知れない)  
そんなはずはない、と否定出来なかった。突然吹き出したどす黒い想いを拒めない。無防備な心が削られる。  
(ああああ…)  
心の中で泣き声とも悲鳴ともつかぬものを振り絞った修一は、次の瞬間、ぐっと体が押しとどめられるのを感じた。不審に思いう間もなく、鳩尾に何かが突き当たり、自分を車の進路から跳ね飛ばしていく。  
「あっ…」  
小さく呻いて、修一は突っ込んで来たものともども後ろへひっくり返り、投げ出された。路面に叩きつけられる。痛みがぼやけた意識に鮮烈な波紋となって広がっていく。陽炎のように揺らめいていた視界の一点に、ようやく焦点が定まってきて、目を凝らして見つめた。  
路面上に寝そべった長々とした姿。その物体は、やがて身動きしてむくりと体を起こし、きょろきょろと辺りを見回して修一を見つけ、見つめ返す。  
それが『垣』だとわかるまでには少し時間がかかった。  
「怪我は？」  
遠い所から問いかけてくるような声だった。  
(垣さんが)  
助けてくれたの、と尋ねようとしたが、ことばにならなかった。先に投げられた質問の意味が、ようやく心の中に形を成し、震えを止められないまま首を振った。  
垣が何かを叫んでいる。ただ、それが自分に向けられているものではないとわかった修一は、放心した。  
(誰が、僕を?)  
明らかに殺そうとしたようだった。煙る意識の中で思考が跳ねる。  
(どうして、僕を?)  
周囲の騒ぎが遠かった。エアポケットに落ち込んだように、白々とした世界に修一は浮いている。ショックが心の柔軟性をオーバーしてしまった。感覚の針が振り切れた、そんな気がする。

ふいに顎を持ち上げられる感じがあって、次の瞬間、修一は少々アニメチックな牛乳ビン底眼鏡と向き合っていた。近々と自分を覗き込む相手に対する意識はなかった。心が麻痺してしまっている。

「!!」「!!!」

わめき声が重なり修一は立たされた。生身の操り人形になったようで、1人で何かをしようという気にならない。支えを抜かれると、そのままへろりと紙細工のように座りたくなる。

揺れた体を側に居た垣が支えてくれた。そのままマンションの最上階まで連れて上がってくれ、部屋に導き入れてくれ、修一にホットミルクを与えてくれた。

それを思い出すと、ようやく歯が鳴るのが納まった。

(だい、じょうぶ)

ここには垣が居る。

「『ると』」

思いついて、修一はぬいぐるみを探し、毛布の上にちょこんと座っているのに、なおほっとした。『ると』が居る場所は、修一が演技しなくていい場所だ。どう振舞うかを考えなくていい場所だ。『ると』は、行き場のない、どこに向けようもない気持ちを唯一受け止めてくれる出口の印だ。

「……駄目だな」

宮田の声に、修一はそちらを見た。難しい表情で受話器を置き、振り返り、首を振った。

「おとうさんの方は仕事がどうしても抜けられないそうだ。よろしく頼むとのことだよ」

「そんな」

垣が不満そうに顔をしかめる。

「子どもが事故に、いや、誰かに殺されそうになったんだぞ！」

「そうは言ったんだが」

宮田は少し肩を竦めて見せた。

「それから、おかあさんの方は今ちょっと居所が掴めないそうだ。わかり次第、連絡をされると言われたよ」

「そう、ですか」

修一は頷いた。

何となく、そうじゃないかと思ってたんだ、と続けそうになって無難に微笑む。

「信じられないな、あの友樹夫妻が一人息子の事故に帰ってこないなんて」

不審気に呟く垣に、宮田がにやりとシニカルな笑みを浮かべたが、時計を見やって唐突に宣言した。

「あ、俺、署に帰る」

「え、おい」

垣は思わず修一と宮田を見比べる。

「帰るって……何か用事か？」

「ちょっと調べたい事が出て来た」

垣の思惑お構いなし、宮田はすたすたとドアへ歩み寄る。

「しかし、なあ…」

垣は宮田と修一を交互に見やる。

「友樹君を1人置いておくのは…」

心配そうな瞳を向けられて、修一の胸でかつり、と何かが弾ける。気がついた時には呼びかけていた。

「泊まって行ってよ、垣さん」

「いや、その」

「僕、今日1人で居たくないんだ」

本当かどうか、それこそ『ほんとのところ』は自分にもわからない。けれど。

(側に居てよ)

甦ったのは鮮烈な不安、投げ出され転がった路上の冷たさが、間近を通り過ぎた死の気配と重なって、体が強張り震えた。

「垣さん…」

ホットミルクのカップを置いたのは演技ではない。冷えた指先から力が抜けて、本当に落としそうになったのだ。懇願を込めて垣を見上げる。

誰に、どうしてか、はわからないが、命を狙われたのは確かだ。今夜にでも、もう一度、無事に切り抜けた修一が1人になったのをいいことに、とどめをさしに来るかもしれない。

見慣れた部屋の影、ベランダの外の闇、濃く澱む空気のそこそこに何かの気配が潜んでいる気がする。とぐるを巻いて薄笑いを浮かべた『何か』が、修一が背中を向けた瞬間に大口を開いて飛びかかってきそうな気がする。

けれど、垣はその恐怖に気づいてくれない。戸惑った顔、僅かに背けた体はここに居る必要がない、そう伝えてくる。

「垣…さん…」

引き止め切れない。修一には、今何もない。

(だって、親だって見捨てる子ども、だもん)

泣き出しそうになって、修一は慌てて瞬きして唾を呑み込んだ。

垣の目が探るように修一を値踏みしている。垣がここに居ることで新たな危険に巻き込まれるかも知れない。自分の命を賭けるに価するか？ そういう顔でじっと自分を見つめる垣に、修一はどんな顔をすればいいのかわからなくなる。

この、友樹修一が。

やがて、垣が宮田を振り返った。

「宮田」

「ん？」

「オレ、今夜はここに居るよ。ちょっと友樹君を1人で置いておくわけにはいかないみたいだ」

「そっか」

宮田は軽く頷き、

「ま、気をつけろよ。……い、ろ、い、ろ、とな。啼かすなよ」

にやりと妙に嫌らしい笑みを広げて、宮田は飄々と出て行った。

「…あんのクソ野郎」

何考えてやがんだ、とぼやいた垣が、再び目の前に腰を降ろす。静まり返った部屋、部屋の隅の影の位置も大きさも変わっていないのに、垣1人の存在で急に温もりが増え、広がろうとしていた冷たい気配が体を縮めたような気がして、修一はほう、と安堵の吐息をついた。

(大丈夫)

身体中の力が一気に抜けてくる。疲労感が手足の先から包み込んでくる。ソファに深々と身を沈めながら、修一はもう一度思う。

(垣さんが居るんだから、もう大丈夫)

柔らかな眠りが忍び寄りつつあった。落ちる瞼に抵抗できない。

眠りに陥る寸前、垣と宮田のやりとりが脳裏を掠めて、修一もまた、垣とそんな風に憎まれ口を叩きあいながらも信頼の見え関係を作れば、どんなにいいだろう、とぼんやり考える。

(僕は垣さんのドジに笑ったり、垣さんは僕の『と』のことなんかをからかったりする……けれど2人とも知ってる、それが本音じゃないって……)

どんなにいいだろう、そういう、ちょっとすましたひねくれた付き合いって。

(きっと楽しくて……毎日が……楽しくて……)

修一はことばをこころと心の中で転がした。

思わず知らず微笑んだ唇を軽く開いて、修一は夢の中に入り込んでいった。

「…ん、…ふ」

(何だ…?)

妙に温かいな。

垣は小さく息を吐いて身動きし、目を開けた。ぼんやりと霞んだ視界は、時間とともに次第にくっきりと明瞭になる。

(えっと……ここは…)

垣はゆっくりとあちらこちらを見回した。

視界左側に美しい曲線で彫り上げられた家具、机の脚か。右側はもわもわふかふかした臃げな影、瞬きをして絨毯だと気づくと、体の下からそれが続いていることを感じた。視線を斜めに上げれば、天井にきらびやかなシャンデリア、広々とした空間は、明らかに自分の部屋ではない。

どこかで微かな寝息が聞こえる。もう一度瞬きして、自分の右側にある熱源に目を凝らす。

「友樹君…」

思い出した。

結局夕べはソファで眠り込んでしまった友樹を起こすに忍びなくて、垣もそのまま居間の絨毯に寝転んで眠ってしまったのだ。掛け物はなかったが、室温は快適、毛足の長い絨毯はひよっとすると自宅の布団よりも柔らかくて、結構気持ち良く眠ってしまった。

修一はその垣の隣に、小さな子どもが肉親の温もりを求めて潜り込むように、引きずってきた毛布にくるりと丸まって眠っている。垣が身動きしたのも気づかぬままだ。熟睡している修一の頬に陽射しがちらつき、長い睫毛の淡い影が躍っている。

「いつのまに來たんだ？」

夜中に目を覚ましたのか。

(…で、何で俺の側に?)

不安と恐怖、先行きの見えない展開に、誰か『大人』が欲しくなったのか。

「……ガキ…だもんなあ…」

確かに仕事ではしたたかにタフに生き延びてきても、その外にある現実が狂い出せば、仮想世界の實力はあまりにも役に立たない。

うん、と手を上げて伸びをした。と、指先に何か当たり、指を引く前に落ちて來たものが顔を直撃した。

「ぶわ!」「ん……垣さん？」

声に目覚めたのだろう、むくりと体を起こし、目を擦りながら垣の方を見た修一が、落ちて來ているものに『襲われている』垣に吹き出す。昨日のことなど忘れてしまったような明るい笑い声だ。

「何だあ…」

とっさに身構えてしまった自分が恥ずかしくて、熱くなった顔をごまかしながら落ちて來た物を摘み上げると、修一のぬいぐるみだ。舌打ちしながら唸る。

「ぬいぐるみのくせに人を襲いやがって」

「『ぬいぐるみ』じゃないよ、『と』って言うんだ」

修一はまだ笑いながら手を差し伸べた。その手にほい、と青灰色の毛に金目を光らせた猫のぬいぐるみを放り投げながら、顔をしかめる。

「……昨日もそれと呼んだろ」

「え？」

「寝言でさ、『と』って」

「……うん」

修一はふいと表情をなくした。腕の中に抱えたぬいぐるみを見下ろす。瞬時に、修一の中から氣力が消え、中身が根こそぎどこかへ行ってしまったようだ。

(おかしな奴)

垣は立ち上がり、修一が投げ出した毛布を畳んだ。

(普通呼ぶか？ 14の男がぬいぐるみの名前を、寝言で?)

それを言うなら、まずぬいぐるみに名前をつけているあたりから突っ込んだほうがいいのか。

(父親か、母親の名前ならまだしも)

あんなことがあった夜なのだ、唸されても仕方ない。

確かに、子どもの命に関わる(それも殺されかけたかも知れない)事故に駆けつけない友樹夫妻に幾分がっかりはしていたが、まあ仕事第一の厳しさの現れと言えなくもないし、佐野や高野への信頼かも知れないし。修一自身も父母がいなくても結構楽しくやっているようだし、そういう家族もこういう世界ではあるのかも知れな

いし。  
いささかざらざらと落ち着かない気分を、それでも長年かけて育て上げた友樹家への憧れで薄めて消し去っていく。  
ジリリリッ。  
ふいに電話が鳴った。ぎくりと修一が体を震わせる。怯えた表情、お節介とは思ったが、手を伸ばして受話器を取った。こちらを見上げる修一に、  
「宮田かも知れんしな」  
自分の過保護っぷりを嗤うように言い放って、受話器を耳に当てる。  
『もしもし?』  
「はい、こちら…」  
『あ、陽一?』  
「?!」  
受話器の向こうで、女の声がいきなり甘く溶けた。ぎょっとする垣に構わず、声はしなだれかかってくるような肉感的な媚をまといつかせて続ける。  
『早かったのねえ、あたし、今起・き・た・と・こ』  
まだ下着も付けてないのよ、とくすくす笑う。  
「ちょ」  
何かお間違えではないですか、そう続けかけた垣の耳に、満足げな声が囁く。  
『昨夜は良かったわ…ちょっと激し過ぎたけど。何かあったのお?』  
「……」  
(これって)  
垣も男だ、相手が何を話しているのか理解はできる、想像はつく。想像はつくが、その内容が受け入れ難い。  
『また早めに来てよね、まあ今夜は許してあげるけど……ねえ…どうして黙ってるの? ねえ、あたしを忘れた…』  
「!」  
突然飛びついてきた修一は、垣の表情で受話器の向こうの人間を察したのだろう、垣の手からもぎ取った受話器を無言で叩き付けるように置く。強張った表情は垣を見ない。  
「友樹君、今の」  
「……」  
問いかける垣の視線を避けるように、修一は俯いた。  
コンコン。  
軽いノックと同時に合鍵が入る音、続いてノブが回る。振り返る垣の目に、一分の隙なく身支度を整えた佐野の姿が映った。  
「おはようございます、修一さん」  
穏やかな笑み、佐野ぐらいの敏腕ならば、昨日何があったのかは熟知しているはずだが、こちらは何もなかった顔だ。それでも、垣に軽く会釈する。  
「垣さん、迷惑をかけましたわね。ごくろうさまでした」  
さらりと言い放って、手帳を取り出す。  
「本日は一日中映画です。集中できそうですね」  
「おい」  
こんな状態のこいつに、いつも通りの仕事をしろってか。  
思わず口を挟みそうになった垣を、再びのベルが遮る。  
ジリリリッ、ジリリリッ。  
受話器を押さえていた修一がのろのろと受話器を取り上げる。気怠そうに二言三言会話した後、垣を見ないまま受話器を差し出した。  
「……宮田さん」  
「宮田?」  
「修一さん、何か作りましょうか。起きたばかりでしょう」  
佐野よりもむしろ側に控えていた高野の方が気遣った顔で、いそいそと近寄ってきた。ダイニング・キッチンの方へ向かいかける姿に、  
「いらない」  
「何か食べておかないと保ちません。高野、簡単なものを」  
拒みかけた修一を、佐野はばさりと切り捨てた。  
「いらない…っ」  
一層強く首を振る修一に、佐野の目配せを受けて、高野がさっさと冷蔵庫を開ける。視界の端でそれを見や  
って、垣は宮田の能天気な声が響いているのに意識を向けた。  
『よう、おはよう。修一との愛の一夜はどうだった?』  
「今度締められたくなかったら真面目にやれ。冗談は今通じねえぞ、苛ついてるからな」  
『あはは、そりゃ悪い悪い』  
きつとちつとも悪いなどとは思っていない、底抜けに明るい声が応じた。  
「それで、何だ?」  
『いや、そうたいしたことじゃないんだけどさ』  
「たいしたことじゃないのに電話してくんな」  
『自分ちの電話でもないくせに。ま、単に友樹雅子が行方不明になっただけだ』  
「え、ちょ、ちょっと待て! 友樹雅子が行方不明?!」  
叫んでからはっとしたが後の祭り、ぴたりと会話を止めた修一、佐野、高野がぎょっとした顔で垣を見つめる。  
「それは本当なのか?」  
『世界に冠たる日本警察の頭脳たる俺の情報を疑おうって言うのか?』  
既にその設定が違うだろ、そう突っ込むのを堪えて尋ねる。  
「いや、疑うわけじゃないが……いつわかった」  
『ついさっきだ。後で話すが、雅子にちょっと聞きたいことがあって任意出頭願おうとしたんだが、全く掴まら

なくてさ。事務所がらみのカバーでもないし、事故なんかでもなさそうで、これはまあ失踪したかな、と』

「それは本当なのか！」

『その台詞、ケータイに入れたら？ 一々しゃべらなくてよくなるぞ』

「冗談言ってる場合か！」

『言ってる場合じゃないぞ、もちろん。修一にも伝えておいてくれ、後で事情聴取に行きますよって』

「思わず、まだ心ここにあらずの修一を見やる。」

「何も知らないぜ」

『それはこっちが決める。それに知らなくても行くの。官僚機構の偉大な暇つぶしさ。じゃ、な』

「おい！」

話すだけ話すと会話は一方的に切れた。溜め息をついて振り返ると、説明を待っているのだろう、それぞれに不安を浮かべた面々に向き直る。

「……友樹君、おかあさんがどこかへ行ってしまって、行方がわからないそうだ」

一瞬目を見張った修一は、素早い一瞥をソファの当たりに投げ、さりげない様子で自分の服に触れた。眉を軽く潜め、やがて諦めたように目を伏せる。

「それから……宮田が後で事情聴取に来るって」

「拒否出来る状態、でもなさそうですね」

佐野が淡々と応じた。

「では、それまでに出来る限りの仕事を済まなくてはなりませんわね。きっとこれから『忙しく』なることでしょうし」

冷酷にも聞こえる声だ。

「けれど、できる限りの調整をお願いしますわ。警察の方もお仕事でしょうが、こちらにも『仕事』はあるのですから」

俺は『警察』でも『宮田』でもねえ。

佐野の冷やかな侮蔑の視線に、垣は心で唸る。

修一がぼんやりとした様子でソファに戻り、テーブルに置かれて既に冷めてしまったホットミルクのカップに触れた。自分の指先に神経が通っているのかどうかを確かめるような危うさで掴み、こくりと一口呑み下す。

それが何かの合図だったように、高野が修一の支度を整えた鞆をさげ、佐野がすらりと背中を向けた。ホットミルクのカップを置いた修一が夢の中の足取りで、佐野と高野が導く戸口へ歩き出す。

「垣さん」「は、はいっ」

呼びつけられて垣は我に返った。

(これからどうなるんだよ?)

映画は撮れるのか。仕事はあるのか。

垣もまた、押し寄せてくる不安と戦いつつ、既に部屋を出つつある3人の後を、急ぎ追った。

(おかあさんは僕を捨ててった)

修一の頭の中を、ことばが繰り返し通り過ぎていく。居ても居なくても変わらない母親、物心ついた時から修一のことよりも芝居や演技のことしか頭にない母親、それでも修一と血の繋がった親だったのに、彼女は今度もまた自分のことを優先させた。

わかりきっていたことだったけれど、自分の立つ位置が周囲から、がらがらと崩れさっていくような感覚の今、改めて1人だと思い知る。

(おとうさんは…)

考えかけて首を振る。

さっき垣が受け取った電話は、きっと父の愛人、若子からのものだろう。事故に怯えていた昨夜、どうしても駆けつけられなかった父親がどこに居たのか、薄々見当はつく。

(誰もいない)

そんなことは今更だ、それでも。

(誰もいないんだ)

「修一さん！」

呼ばれて瞳を上げた。目の前に出されていた遅いロケ弁は修一用特製だったが、ろくろく喉を通っていない。ただ、空腹は感じなかった。

「2時からイベントやるそうです。客も集まっていますし」

高野の声に頷いて立ち上がった。

イベント、とは、周一郎シリーズの広報の一つで、一定間隔ごとに、長いレンガ塀に囲まれた豪奢で広大な屋敷のセット内で、周一郎シリーズのワンシーンを公開するというものだ。

客は映画で見知ったセット内に入って興奮するし、目の前で動く役者に新たな興味をそられる。もちろん、セットを壊されたり小道具を持ち去られたり、別の場面を展開させている役者に撮り終えた場面を繰り返させるばかりか、即興のアドリブも要求する、いろいろと過酷なものでもあったのだが、佐野の提案は効果的で、動員数は日ごとに増しており、PCでのフォローも今度ほどのイベント見た、あのイベントはまだ見ていない、などと盛り上がっているらしい。

「今日はどこ？」

「『猫たちの時間』の119シーン。ほら、周一郎が美華にやられて、俺の部屋に転がり込んでくるところですよ」

「わかってるよ」

「ホン、見ておきますか？」

「うん」

高野から受け取った脚本に、修一は加熱した頭と同様、視界が定まらない感覚の目を向けた。

見なくても覚えている、隅から隅まで、それこそエキストラの動きでさえも。初めて、父親の付属物としてではない『友樹修一』を映画界に認めさせるきっかけとなった映画なのだ。

(僕と周一郎は似てると思った)

環境にも経済的にも恵まれていること、そしてある一方で、いつも置き去りにされていること。共通点を探す

のは簡単で、違和感のある描写を見つける方が難しかった。だから、今まで役作りに苦労したことなどないし、これから予定されているシリーズにも不安を感じたことなどない、今までは。

(でも、僕は、周一郎ほど平静になれない)

自分の回りで起きる裏切りや絶望を、人間関係にはよくあることだ、で済ませられない。自分を傷つけるそれらの動きから、身を竦め眼を背け、どうにかしてそこから逃れたいと思ってしまう。両親のことだって、諦めたつもりなのに、やっぱり自分の危機にも何一つ反応してくれないことに、傷ついている。

(でも、そんなこと、あたりまえだろ)

誰だって痛かったり苦しかったり哀しかったりするの嫌だ。

(嫌だと思わずに居るなんて、それを見つめたままで居るなんて)

顔を背け背中を向けて立ち去らずに、じっと傷ついた自分が地面に転がっているのを眺めているなんて、できやしない。

「友樹君！」

伊勢の声が修一を現実に戻した。

「早く！ 始めるぞ、ぐずぐずするな！」

「はいっ」

答えてそちらへ走り寄る。

芝居の中へ逃げ込んでしまえばいい、いつものように。

そうすれば、修一はもう1人ではない。

カチンコが鳴った。

「周一郎が？」

滝は周一郎が部屋にいないということを知り、眉を寄せた。

「わかった、すぐに行くよ」

高野の姿が消え、ドアを閉めた滝は、背後から吹き付ける薄寒い風に顔をしかめて振り返り、窓の近くの壁にもたれて、かろうじて立っている少年を見つけた。

「周一郎！」

一声叫んで駆け寄り、相手の様子に異常さに眉をしかめる。周一郎の額には汗が浮かんでいるのに顔色はひどく悪く、微かに呼吸を乱しているのに気づいたが、滝は声を荒げた。

「何してるんだ！ 今、美華さんが殺されて、お前が疑われているんだぞ！」

「知って…いる」

小さく呟いて周一郎はずるずると壁を伝ってくずおれた。ぐったりした様子で腰を落とし、壁にもたれて息を喘がせる。

「ルト……外の雪に血の跡を残してきてしまった……消して…おいてくれ…」

にやあん、と答える猫の声がした。滝はぎょっとしたように周一郎の前にしゃがみ込み、両手を伸ばして周一郎の肩を掴んで喚く。

「じゃ、やっぱりお前が！」

「あうっ!!」

びくんと体を強張らせ、周一郎が悲鳴を上げた。どきりとして滝は少年の肩から手を離す。

(毎度のことながら、本当にどきっとする)

垣は思わず素に戻って考えてしまった。

相手の肩からうろたえて手を離す仕草は垣の演技ではない。周一郎役の修一が声を上げるのに、体が勝手に反応して手を離してしまうのだ。

(これを天性、というのかな)

不十分な才能しか持たない共演者にも、演じる状況が現実のものだと錯覚させるほどの力。それによって、必要とされている演技を相手役から無理矢理にでも引き出す能力。

それほど修一の演技はいつも真に迫っていて、この場面に入るといつも、垣は本当に修一が傷を負っていて、自分の掌の下に血のぬめりを感じるような気がする。

(結局オレはこいつの『演技力』にカバーされてるんだ、いつも)

虚しい想いが駆け抜けた。傷ついたプライドに突き刺さってくるその想いを持って余している垣の腕に、脚本通り修一の体が倒れ込んでくる。

「？」

受け止めた瞬間、垣は戸惑った。相手の体は泣いているように小刻みに震えている。ここはそんな演技だったのだろうか、と思い返して、脳裏に雅子の失踪や陽一の愛人のことが閃いた。

(修一…?)

「周一郎…？」

「ひどい…いな……傷……とこ……つかむ…だから…」

掠れた声が夢現のように零れ落ちる。

「ルト……ルト……。眠い……もう……何も見たくない……」

聞いている方が切なくなるような声、ふと、昨夜、修一が同じ声で『ると』を呼んでいたのを思い出した。それと知らず修一の事情に踏み込んだ自分が、わからないまま周一郎の傷を掴んだ滝と重なる。

傷つけてしまったのだろうか、さらになお。

(ああ…そうだよな)

意識してなかっただろうが、滝もそうやって怯みかけただろう。そうして勢いよく離してしまった自分の手を、その下でぬめっていた血の感触を、再び掴み直そうとするのか、迷ったのだろうか、今の自分のように。震えている体を支えて、それとなく大丈夫かと聞いてやろうとしたのだろうか、今の自分のように。

その迷いを断ち切るように、くい、と腕にかかった『周一郎』の手に力が加わり、相手は体を起こした。そのままゆらりと揺れて、後ろへと仰け反りかける。

「おい！」

はっとして『周一郎』の腕を掴み直す『滝』を、一瞬物憂げな瞳で見つめて、

「すみ…ません、滝さん…そこの……ウイスキーのピンを…」



「あ、こ、これな」  
少年の肩にこれでもかと彫り込まれたような傷を認め、真紅に染まったシャツを目にしてうろたえた『滝』がウィスキーのピンを手渡すと、『周一郎』は小ピンをくるりと逆さにして中身を傷にぶっかける。ぎよっとする『滝』の前で、きつく唇を噛んだ『周一郎』は、数分の沈黙の後、ようよう口を開いて呟く。  
「これで…血の臭い…しないでしょう…」  
掠れた声には危うい色っぽさがある。見惚れる周囲が微かに唾を呑み込むのを聞き取って、垣は唸る。  
「そりゃ…しないだろうさ」  
ぶっかけたのは酒ではない、ただの色水、それでも濡れたシャツや首筋に流れ落ちる雫は蠱惑的だ。見せつけて視線を集めた後で引き抜くように身を引いて立ち上がる、修一の演技は隙がない。  
「先に…行って…下さい…すぐに…行きます…」  
台詞の余韻を残して修一は部屋を出て行き、ぱたりと閉められた扉のこちらに、垣は一人取り残される。

「カーット！」  
「きゃああっっっ！」「修一っ！」「周一郎！」「いやあもっっと！」  
カチンコが鳴ると同時に黄色い声が上がった。扉の向こうから濡れた服をさっさと着替えてきた修一が姿を見せると、歓声は一層大きくなった。中には多少ドスのきいた声も混じっていたが、もちろん誰もけなしたり嘲ったりする者はいない。  
「皆さん、ありがとうございます」  
修一ははにかんだように微笑した。  
「まだまだ映画は続きます。これからも応援よろしく願いいたします」  
次回作を確約出来る役者が、この世界に何人居るだろう。それでも、修一が映画は続くと言えば、この先何本も撮影が約束されているように聞こえるから大したものだ。  
「では、友樹修一さんのサイン会、始めます！ 色紙へのコメントは、お1人一言までをお願い致します！」

「（どうせオレにはファンがおらんよ）  
自分を振り返りもしない少女達にいささかいじけて舞台を去るが、その垣を追う視線はやっぴりなさそうだ。  
（どうせ、『周一郎』シリーズなんだ）  
「あの…」  
「はいはいはい！」  
呼びかけられた声に満面に笑みをたたえて振り返った垣の目に、楚々とした恥ずかしげな娘が映る。  
「あ、の…」  
「はい、何でしょうか」  
「友樹さんのサイン会はどこで…」  
「……あっちですよ、ええ」  
「ありがとうございます！」  
一転むっつりした垣に明るく笑いかけて、少女はワンピースを翻して走り去る。その先には、佐野と高野を従えて、椅子に上品に腰掛け、周一郎のイメージをそのままに淡々と、けれどもにこやかにサインをこなし握手することを繰り返す修一の姿がある。もの馴れた動作には強張りもなく滑らかだ。  
（さっき、泣いてたように思ったんだが）  
端正な修一の横顔を見た。笑みをたたえた顔には鬩り一つない。  
（そうだな、オレが気にしてやらなくとも）  
吐息一つ、垣は修一に背を向けた。  
（あいつには、周一郎と違って佐野・高野って付き添いもいるんだし、大勢のファンもスタッフもいる。オレ1人ぐらい抜けたところでどうってことないだろうさ）  
修一のサイン会の間は撮影は進まない。どこかで一休みしようと、人混みを抜けてぶらぶらと屋敷の外へ出る、と、背後から再び声がかかった。

「あの…」  
「はいはいっ」  
思わず弾んだ声を出して振り返った垣は、正面に牛乳ビン底眼鏡を突きつけられて、うんざりした。  
「なんだ、お前か」  
「来るって言っといたろう？」  
それで友樹修一は、と早々に周囲を見回す宮田に、垣は溜め息まじりに応じる。  
「今サイン会やってるよ。終るまで待ってるしかない。サイン会の後なら休憩があるから」  
「優先順位というのは考慮なしか？」  
「考慮してもいいが、数分後にあそこのファンに袋叩きにされるぞ」  
そんなマゾだとは思わなかったな、と呆れてみせると、宮田は修一を取り囲む連中をじっくり眺めた。小柄で華奢な女の子達、がっしりどっしりの『旧』女の子達、ついでにがちりどっすんのあからさまに怪しい雰囲気  
で修一を見つめる男の子達。  
「…男女見境なしか」  
宮田がぼそりと唸る。  
「ついでに年齢にも区切りはない」  
垣は肩を竦めた。  
修一の支持層は驚くほど幅が広い。むしろ、1作やるごとに広がっていると言っている。遅かれ早かれ、今はもうとっくに廃れた『国民的スター』に近い存在になるのかも知れない。  
「…そうか、なら仕方ない」  
宮田はあっさりと言いつつ放った。  
「今はお前で我慢しとくか」  
鯛がなけりゃ目刺しでも魚は魚だよな。  
「何だ、それは」  
「いや、単に、食うなら見目形の良い方が好みだって言うだけだ」

「お前の言い方には、どうもひっかかりがあるよな」  
「あるよ、山ほど」「……」  
くるりと向きを変えて歩き出した垣がどんどん速度を上げるが、宮田は苦もなくついてくる。  
「昨夜、友樹君を助けたら？」  
「……」  
「あの時、俺、あの子を覗き込んでたろう？」  
「……ああ」  
ようやく真面目に話す気になったらしいと思って、垣は頷く。事件に関係のある情報ならば、多少なりとも知っておきたい。  
「あの時さ」  
宮田はにこやかに続けた。  
「お前が邪魔しなけりゃ、もう少しで友樹君の唇の感触を」  
「…沈めっ！」  
垣は振り返りざまに数発相手に叩き込んだ。  
数分後。  
「おーいて…」  
鼻の頭にこれみよがしに×印にカットバンを貼った宮田を、垣はじろりと見やる。  
「お前は人類を滅亡させるために産まれて来たんだろ」  
「まさか！ 俺は刑事だぜ！」  
「関係あるか！」  
「ところが関係あるんだな、昨夜のこと」  
垣は冷やかに相手を睨みつける。  
(こいつ、事情聴取と称して、友樹君に迫る気じゃねえだろうな)  
迫るだけならまだしも、隙あらば押し倒して事に及ぼうとしかねない。  
「昨日、あの事故の時、友樹君から転がり出した物……まあ、小さなガラスのビンだったんだが、これを鑑識で調べさせてもらった」  
宮田は煙草をくわえると、火を点けないまま上下させた。  
「ビンにこびりついてた中身、これが純度八十二%のアヘンアルカロイド系物質、つまり麻薬だとわかった」  
「っ」  
どきりとして垣は身を引く。  
「じゃ……何か、友樹君が……中毒者だって…」  
「その可能性もあるってことさ。今日来たのは、あのビンに友樹君がどこで手に入れたかを聞きたいのと、友樹雅子の失踪について何か知らないかってことで」  
「知る訳ないだろ！ 母親の失踪が一番ショックを受けてるのはあいつだぞ！」  
「……いやに庇うな」  
「あん？」  
「お前もひょっとしたら、あの子に気が」  
「ば、馬鹿っ」  
「垣さーん！」  
デスマッチを再開しかけた二人の耳に、明るい声が響いた。  
「休憩だって！ 何か飲もう……よ……？」  
息せき切って駆け寄ってきた修一が宮田の姿を認めた。1、2m離れた所で立ち止まり、問いかけるように垣を見つめ、続いて宮田に目を戻す。  
「やあ友樹君！」  
宮田が満面の笑みで呼びかける。  
「ちょっと聞きたいんだけど、いいかなあん？」  
「宮田っ」  
「明るい警察っ、楽しい事情聴取！」  
「はい……。……お母さん、の事です」  
きゅっと修一は唇を引き締めた。

「……え？」  
「うん」  
宮田はことんとテーブルに小さなビンを置いた。  
事情聴取に選ばれた場所は平凡な喫茶店だった。表通りから外れ、近所の者が数人出入りする程度、俯きがちの修一に誰も目を向ける様子もない。カウンターの中のオーナー兼シェフ兼ウェイターは、多少気になるようであちこちを伺っているが、目の前に座っているお得意さんの相手に忙しく、注文したコーヒーを置いていったきり、近づく気配はない。  
「おかあさんのこともだけどね、これについてまず聞きたい」  
「これ…」  
さっと青ざめた表情に緊張が走る。修一は軽く唇を噛んで小ビンを見つめる。  
「うん、これ」  
対照的に楽しげに宮田が小ビンを突つく。  
「…」  
修一は答えずに黙って俯いた。黙秘権とまではいかななくても、積極的にしゃべるつもりはないと無言で知らせている。  
「知ってることは話した方がいいよ。後でいろんなことがわかると、困るの、君だし」  
「……」  
飄々とした宮田の声に、修一はますます体を固くした。  
「どうして君がこれを持ってたのかな」

「……………」  
「隠し続けるといろいろ厄介なんだけど」  
「……………」  
「社会的な影響もあるだろうしね」  
「おい」  
やんわりと脅しにかかる宮田の脇腹を垣は突いた。  
「お前、友樹君が気に入ってるんだろ？」  
「うん」  
唇に爽やかな笑みを浮かべて宮田は頷く。  
「じゃ、そんな風に陰険な追い詰め方するなよ」  
大体こういうの、弁護士が同席したり、未成年者の保護とかそういうもんがあるんじゃないのか。  
「うふっ」  
垣がこっそりと囁いた内容に、宮田は粘っこい笑い方をした。  
「オレ、気に入った人間は苛めたいの」  
「変態」  
「何とでも。それに、友樹君のためにも、今吐かせちゃった方がいいんだよ？」  
「へ？」  
「後で不利な立場になる」  
一瞬生真面目な顔を取り戻した宮田は、それでもこのままでは修一が口を開きそうにないと思ったのだろう、再びもとの爽やか親切系にっこりに戻った。  
「ま、いいか。もしそのことを話す気になったら、こいつにでも言っといて。それじゃ、次の質問。趣味は？」  
「…え…あ…あの、映画を観ることですが」  
唐突に全く別の問いを投げられた修一が、一瞬戸惑い、それでも雑誌のインタビューのようにすぐに卒なく応じる。  
「ふん。で、好きな色は」  
「青…」  
これって何の質問？  
修一の物問いたげな視線に、垣もわからんよ、と目線で答える。  
「今日の下着の色は？」  
「は？」  
「いつも何着て寝てるの？」  
「あの」  
「風呂に入ったら、まずどこから洗う…」  
「宮田っ！」  
コップを掴み、中の水を一気にぶっかけようとした垣をちらりと一瞥し、慌てる様子もなく宮田は質問を続けた。  
「おかあさんの失踪について何か心当たりは？」  
「う」  
「…さあ」  
質問が真っ当なものに戻って凍りついた垣、対照的に低く沈んだ声で修一は答える。突拍子もない世間話に巻き込まれてつい口を開いてしまった、そんな顔だ。  
「いなくなる前後、つまり、最後に会ったのは？」  
「……………昨日です」  
「昨日？ 昨日のいつ頃？ どこで？」  
「…仕事終わってからだから、6時ぐらい、僕のマンションで」  
ためらった修一は、話し出してしまったのなら仕方がないと思ったのか、ほ、と小さく息をついた。  
「どんな感じだった？」  
「急に帰ってきて、それから…」  
一つ一つ記憶を確かめるように、修一はぼつりぼつりと話し出す。いきなり飛び込んできた母親、取り乱した姿、疲れ切った顔の目の下の隈、かかってきた電話と母親が懇願する声……。  
「電話？」  
メモを取っていた宮田が問い返した。頷く修一を鋭く見やり、重ねて尋ねる。  
「どんな電話？」  
「よくわかりません。ただ、いつもの2倍…とか、いつもの所へ8時…とか……………げん…」  
「修一さん」  
いきなり背後から声が響いた。はっとして顔を上げた修一が、  
「佐野さん…」  
振り返る垣と宮田に、いつの間に現れたのか、佐野は穏やかな、見ようによっては得体の知れない笑みを浮かべた。  
「アポイントなしのインタビューはご遠慮願いたいものですわね。撮影の時間ですわ、修一さん……………垣さん」  
「あ…はい」  
こちらに向けられた容赦なく鋭い視線に、垣は思わず首を竦めた。  
「ちょっと！」  
無言で立ち上がる修一を宮田が制する。  
「最後に一言」  
睨む佐野を苦しめた様子もなく、  
「それで、おかあさんはいつ出て行かれましたか？」  
「あ…と」  
修一はちらりと佐野を見た。  
「その電話からすぐです」  
「これでよろしいですわね。修一さん？」  
「行きます」

佐野が手を伸ばしてレシートを掴む。  
「垣さんも早く」「はっ、はいっ」  
慌てて返事をした垣を見もせず、佐野は修一を伴って店を出ていく。  
宮田は難しい顔で椅子に座ったままだ。垣が覗き込むと、妙に目を光らせた。  
「あの佐野とか言うマネージャー、切れ者だな」  
「ああ、周囲もそう言ってる」  
「俺が一番聞き取ったことの寸前で、修一の台詞を切りやがった」  
「え？ 偶然だろ」  
「偶然なものか」  
宮田は肩を竦めて立ち上がった。  
「彼女、友樹雅子の失踪について、かなり詳しく知ってるな。いや、ひょっとしたら、陽一あたりから『もみ消し』を依頼されてるのかも知れないな」  
「つまり…」  
これからどうなるんだ？  
尋ねる垣を横目で見遣って、  
「あの女が修一の側にいるなら、あの子にそうそう危険が及ぶことはないだろうが、何となく一筋縄でいく相手じゃないような気がするし…」  
店を出ながら宮田は続けた。  
「ただ陽一の依頼で動くか、あるいは、友樹君の人気を守ろうと言うならいいのだが、もっと『違う意図』で動いてるとなると、今度はあの子が危ないし…」  
「『違う意図』って？」  
垣は不安になった。修一の命が狙われる以上に危険なことが迫っているのだろうか。  
「うん」  
ぐるりと宮田は真面目な顔で振り返り、がっしりと垣の両肩に手を押した。  
「？」  
「これはお前にしか頼めない」  
「う、うん？」  
「お前を男と見込んで頼む」  
「うん？」  
「どうか……………あの女が友樹君を手に入れないようにしてくれ！」  
ばごっっ!!  
「あつっ…」 「ったくお前は！」  
真面目にやろうという気がないのか！  
「いや～これ以上真面目にやれと言われても……………いたたたっ！」  
「お前はお前はお前はっっ！」  
垣は右手の拳を振り回しながら喚いた。

## 5. シーン305

「カーッカットカット！」  
伊勢は膨れっ面で喚いた。  
「違うって言うのに！ 友樹君、それじゃ、直樹と同じだろう!!」  
「珍しいな…」  
ひそっと山本が高野に囁いた。  
「ええ。NG3回目、修一さんにしては新記録ですよ」  
高野が溜め息まじりに返す。  
「やっぱり、あの件が響いているのかな」  
「友樹さんのことですか？」  
「そ。あの雅子さんが行方不明、おまけに麻薬常習者の疑いもある、なんて派手にすっぱ抜いたからな、旭日が」  
「3日前でしたっけ……でも、どこから漏れたんだろう」  
「え？」  
「そういうことのガードは佐野さんが完璧なはずなんだけど」  
「あの人も人間だ、ミスる時もあるさ」  
「あれから新聞がその件を書かない日はないですもんね。また芸能界の麻薬乱用に話が飛びそうだし」  
「友樹雅子っていうのは、派手は派手だが、そういう事に関しちゃ、ご清潔だったからな」  
「……佐野さんがブレインでしたしね」  
高野は意味ありげに嗤った。  
「いろいろとあったことはあったらしいけど、彼女が超一流（ないみつ）に処理してたんです」  
「ふん」  
「友樹君！ 違うと言ってるだろう！」  
伊勢の声が、演技を止めて振り向いた修一に叩き付けられる。  
「それじゃ直樹でしかない！ そこは、周一郎なんだ！」  
「でも、周一郎の気持ちは」  
「確かに周一郎の気持ちは高ぶっているし、揺れているさ！ 唯一信頼している俺に殺されそうなんだからな！ だが、周一郎の自制心は天下一品なんだ！ かてて加えて、自分がこのまま生きていいのかわからないんだ、言わば自暴自棄になっているんだ！」  
伊勢はパンパンと脚本を平手で打った。  
「そんな生氣のある演技をするな！ 激しい感情の揺れを見せるな！ 何かの衝撃があれば、支え一つなく崩れる虚ろさを出せ！ 自分の存在理由を、息を詰めて見守っているんだぞ、周一郎は！ そんな人間が、そんなふうには喚くか！」  
一息に言い放って、首を強く振った。  
「駄目だ駄目だ、そのシーンは後だ。直樹のシーンをしよう。セット！ メイク！」  
人々が一斉に動き出す。伊勢は不満そうに唇を曲げて椅子に体を落とす。  
立ち竦んだ修一にメイクが駆け寄り、服を整えるべく、彼を移動させていく。  
「やっぱり母親の醜聞が堪えてるのかな」  
「みたいだな」  
山本はむっつりと腕を組んで続けた。  
「所詮は子どもだ。身内の醜聞に一タシヨックを受けてちゃ、芸能界（ここ）じゃやってけねえよ。その醜聞を、どう自分に有利にするかを考えるのが当然だろ」  
「修一さんは14ですよ」  
「14でも10年近く芸能界（ここ）にいるんだろうが。甘いこと言うなよ」  
「きついね、山本さん」  
「当たり前だよ、ここじゃ。今まで恵まれ過ぎていたんだよ、あいつは」  
くい、と顎をしゃくった山本の前で、再び修一が演技を始める。今度は直樹としての周一郎と俺の絡みだ。だが、数言会話が進んだとたん、伊勢が再び大声で詰った。  
「いい加減にしろ、修一！ それは誰だ?! 周一郎か？ 直樹か？」  
「え…僕、今、直樹を…」  
「直樹がそういう感情の出し方をするか？ 直樹だから何でも出してしまえばいいってもんじゃないぞ！ 直樹が出すのは、あくまで直樹としての感情だ、周一郎の俺への思い入れなんかじゃない！」  
「……」  
唇を噛んだ修一が強張った顔で拳を握る。  
「いいか？ この『月下魔術師』では、周一郎と直樹の1人2役が呼び物なんだぞ、同じ人間だが同じ人間であってはならないんだ！ 君がそんなじゃ、この映画は撮らない方がましだな！」  
伊勢は冷ややかに吐き捨てた。

がががする頭。  
のろのろと修一は首を傾げ、重たく頭を振る。  
痺れたような感覚が頭を中心にあって何とか振り切ろうとしたが、『それ』はこびりつく煤のごそごとと不透明に溜まっていくばかりだ。  
『やめちまえやめちまえ！ そんなもの、周一郎じゃない！』  
伊勢の声がくすんだ頭に錐を揉み込むように響く。  
「修一さん！」  
高野が車の側に立ちこちらを手招きしている。ここ数日間、記者に追いかけて回されているので、佐野が手配して人が気づかない所へ車を回してくれたのだ。急いでいるつもり、だが、足はなかなか前に進まない。木立の後ろへ回り込んでいく、と、いきなり眩い光が修一の目を射て、思わず立ち止まった。  
「や」  
木立の端から旭日新聞の本田が顔を出し、にやりと嫌らしく嗤った。フラッシュをこれ見よがしに光らせてもう一枚、容赦なくシャッターを切り、茫然としている修一に近づいてくる。  
「新しいコメントを頂きたいんですよ、修一さん。もう以前のコメントも再三再四流しましたし、そろそろファンも次のネタに期待してるでしょうしね？」  
「…」  
「友樹雅子さん、いや、『おかあさん』について、どう思われてます？ 今どんなお気持ちですかね」  
「修一さんっ！」  
はっとしたように高野が叫びながら駆け寄ってくる。と、ほとんど同時に背後から数十の足音が迫り寄ってきて、たちまち修一はカメラをかざしながら覗き込む記者達に取り囲まれていた。  
「友樹さん、『おかあさん』が失踪されたことですが」「雅子さん、つまりあなたの『おかあさん』の事ですが麻薬の」「『おかあさん』は最近舞台に行き詰まりを感じていらっしや」「陽一さん、あなたの『おとうさん』の愛人が浅倉若子だというのはもうご存知」「痴情のもつれはどの程度の」

溢れ出すような質問がそこら中から修一に降り注いでくる。ぱくぱく開いたり閉じたりする口、口、口、口、1人ずつの見分けな  
どつきはしない、それでも必死に周囲を見渡し、もう繰り返し疲れたことばを吐く。

「それはこの前お話した通り、佐野さんから」

「いや我々はあなたの」「あなたのコメントを」「あなたがどう思ってるのかを知りたい読者が」

(うるさい)

「あなたの気持ちがファンに届くかどうかという」「『おかあさん』が麻薬を使っていたことについて」「社会常識から考えてで  
すね、『おかあさん』のなざったことは」

(知らない、僕は…)

「『おかあさん』は演技に悩まれていたんでしょうか、舞台に対しては」「役者であることの責任と義務について考えられて」

(僕は知らない…)

自分が太刀打ち出来ないことばの壁が次々と目の前に立ち塞がる。何を言っても無駄な気がする。何を伝えても意味がない気が  
する。

(だってあの人は)

修一のことなど振り返らなかつた見もしなかつた修一が居ることさえ疎ましいという気配でしかいなかった、だから修一も。

(あの人のことなんか興味なんて)

嚙んでいた口を開きかけた、お前らに何がわかる、そんなこと僕の知ったことじゃない、そう大声で叫びかけた瞬間、

「失礼、皆さん！」

凜とした声が割って入った。

「佐野マネージャー」

本田が忌々しげに舌打ちする。

「コメントは既に発表した通りです」

するりと記者達の輪の中へ滑り込む、無駄のない滑らかな、けれど断固としてその背に庇う修一に接触することを許さない動  
きで、記者達の前に立ちはだかった。修一を軽く高野に押しやり、心得た高野が修一を導く。

「さ、修一さん、こっちです」「あ、友樹さ」

「彼への質問は」

追いつがろうとする記者達の声は佐野の一声で封じられた。

「私がお答えしますが、必要なことは既に発表しております。現時点で付け加えることも削除することもありません」「しかしで  
すね」「捜査上」

反論しかけた記者の声を断ち切った声は、張り上げていなければ脅しをかけてもいない。細い背中をこちらに見せて、佐野は  
笑みを含んだ声になっている。

「警察の方に十分に協力していきたいと思っております。皆様にも、その旨、よくご理解頂いて、事件の早期解決にご協力お願い  
いたします」

毒気を抜かれたような顔で口を開いた記者達が、くるりと身を翻した佐野の後ろで悔しげに唸る。

「…友樹樹一の懐刀かよ」「噂通りの切れ者だな」「何かまだ出そうなんだが」「突っ込むと捜査の妨害をしたの何のごねられ  
そうだけ」

その声が聴こえているのかいないのか、修一の後ろから車に戻ってきた佐野は、何事もなかったように運転席に乗り込み、車を  
発進させた。ルームミラーで後部座席に埋まり込んだ修一を見つめる瞳は、いつもと同じく涼やかで落ち着いている。

「明日のスケジュールです。サイン300枚、レコードと色紙に。雑誌取材はキャンセルしました。TVの方も自粛します。その代  
わり、映画撮りを進めます。休憩時間に…」

淡々とした声に、高野がはらはらした顔で自分と佐野を見比べているのがわかる。

修一はじっと佐野の顔を見返していたが、頭には何も入って来なかった。連日の騒ぎで疲れは頂点に達している。信号が変わっ  
て走り出した車の振動に、ぐったりと寝そべて、窓の外を眺める。

(景色が流れてく)

洪水のように溢れる光と色、乱れ狂う色彩の街並。流れては止まり、止まっては流れ出す様を見ていると、自分はじっと動けず  
にいるのに風景だけが動いているような気がしてくる。

一度、信号と交通渋滞で停止した時、窓の外に映画館があるのを見つけた。上映中の映画、と題されて、小さな画面で『京都  
舞扇』の一場面が流されていた。

(あ…シーン305だ)

ぼんやりと見つめている脳裏に、台詞が浮かび上がってくる。

周一郎と清と滝が、清の家と思しき部屋に座っている。

3人の目の前には、布団に横たわり白い布を顔に被せられた細い体がある。布団が重そうに見える。それほどにか細い亡骸だった

『坊っちゃん』

清の唇が動く。ん、と優しい表情で見つめる周一郎、その視線を避けるように俯いた清が呟く。

『本当なんですか…』

「『清はどう思う?』」

窓の外のTV画面と同時に、修一は呟いた。ぎくりとしたように振り向く高野を無視して、続く台詞を呟き続ける。

「『違ったら…なんで…京子ちゃんがこんなことに…』」

「『清! それは!…』」

「『滝さん!』」

自分の台詞だけではない、全ての台詞を修一は覚えている。当たり前だろう、あれほど何度も何度も繰り返し演じた場面、忘れ  
るはずがない。

清を止めかけた滝を一言で制して、周一郎はじっと清の弾劾を聞いている。静かな表情で、秋の庭で風の音を聴いているように

。耐え切れぬように滝が再び、清に真実を告げようと口を開く。

「清、周一郎じゃないんだ! 実は…」

「滝さん!」

が、今度も周一郎の声と、その瞳にたたえられた哀しみに滝は黙らざるを得ず、1人でおろおろする。

「……」

車が動き出した。映画館のTVを見送った修一の唇が動き続けているのに気づいたのか、高野が修一を覗き込んでくる。

だが、それ以上は声をかけて来なかった。おそらく修一が眠ってしまったのだらう。

「……滝さん……」

微かに呟いた声が、夢のものなのか現実なのか、修一には区別がつかなかった。

「それじゃ…」

気遣いしげに高野が出て行くのにも、ソファに座った修一は反応しなかった。しばらくしてから、ぼつりと呼びかける。

「『ると』」

ソファのもう片方の端に、『ると』はちょこんと座っていた。毛布の上に乗っているのをいいことに、ずるずる毛布を引っ張り  
寄せて、『ると』を引き寄せる。

「『ると』……どうなるんだらう、これから」

『ると』は真ん丸な金色に光る眼で修一を見上げている。

「お前が答えるわけ、なかったね」  
淡く微かに修一は笑った。  
「……答えてくれる人がほしいよ、『ると』」  
ジリリッ。  
電話の音に修一はびくっと体を強張らせた。おそるおそる電話を振り返りながら、なかなか立とうとしない。電話はあまり良い知らせをもたらしたことがない。こここのところ、特にそうだ。破滅と絶望をもたらす知らせばかり運んできている。ベルは鳴り止まなかった。まるで修一がそこで息を潜めているのを知っているように、電話の彼方の人物は諦める気配がない。しつこく鳴り続ける電話に、修一はようよう、片手に『ると』を抱いたまま立ち上がり、受話器を取り上げた。  
「……もしもし」  
『もしもし、修一さんだね』  
低く冷めた声が問いかけた。答えぬ修一を肯定と看做して、ことばを続ける。  
『今、ここに君のおかあさんがいる』  
「っ?!」  
ぎょっとして目を見開いた。  
『既知知ってるだろうが、少々困った立場にあるんだよ、『君のおかあさん』は。その為に、今、少しばかりお金が必要なんだ。ところで、『君のおかあさん』が言うところでは、マンションにはいつも二、三十万は現金を用意しているというじゃないか。それをちょっと持ってきてほしいんだ』  
「……僕が？」  
掠れた声が自分の喉から漏れるのを、遠く感じた。  
「僕1人が…？」  
こんな状況を背負うしかないって言うのか？  
相手はくぐもった声で嗤い、すぐに声を改めた。  
『そう、君1人で、だ。マネージャーや付き人を呼ばない方がいい。『君のおかあさん』の命を保証出来なくなる』  
淡々と示された現実、ドラマのよりも容赦なかった。  
「……わかった」  
修一は乾いた喉に、無理矢理唾を呑み込んだ。  
「どうすればいいんだ？」  
『今から10分後、現金全部を持って、一番近い電話ボックスに来たまえ』  
誰でも携帯を持っているご時世に、電話ボックスなんて見つからない、そう答えかけた矢先、帰りにも通り過ぎたコンビニが脳裏を掠める。心得たように、相手は優しく続けた。  
『そう、あの、近くにコンビニがある所だ。そこにいたまえ。迎えに行く』  
チツ、と耳の向こうで電話の切れる音が聴こえた。  
修一は時計を見上げた。8時25分。35分までには行かなくてはならない。慌ただしく『ると』をソファに据え、引き出しを開け、手を奥に探り入れて、茶色の紙袋を引っ張り出した。中身を改め、羽織ったジャケットのポケットに突っ込み、部屋を出る。小走りに駆け、エレベーターを飛び出し、マンションの入り口を駆け抜け、一直線に電話ボックス目指して走る。  
(おかあさん！)  
コンビニの近くと聞くと、如何にも安全で明るそうに聞こえるが、実はコンビニの裏手近くは建築途中のマンションになっていて、いつからか工事が進まぬまま放置されている寂しい場所になっている。時折、互いをのりあひ噛み合うような連中がたむろし、何度か警察も巡視していたが、集まりはするものの、それ以上でもそれ以下でもない判断したらしく、今は警邏も行われていない。必然、日が落ちてから人通りは少なくなる。そこを指定したあたり、相手は修一のことをかなり詳しく調べ上げていると見えた。  
電話ボックスには誰も入っていない。皓々と明るい室内が妙に白々しい。  
それでも少しほっとして、ボックスに駆け寄った修一を、突然眩い光が包み込んだ。  
「っっ！」  
「こちらへ、修一君」  
聞き覚えのある声と同時に、おそらくは車のヘッドライトだろう、目を射る光の中を横切って、1人の男がやってきて手を伸ばす。眩さに眼を細めて、何とか相手の姿勢を見定めようとするが、ライトは明る過ぎて視界を白く灼き、影がかりうじて見て取れるだけだった。  
ぐっと手首を掴まれる。大きな分厚い手にそのまま自分の手首が握り潰されそうな感覚が重なって、修一が息を呑んでいる瞬間、今度は別口の暗い穴、すぐ側まで迫っていた車の後部座席へ引きずり込まれた。  
「、っっ！」  
もがこうとして腕をねじ上げられ、咄嗟に振り向いた隣の席、酷薄そうな顔を眼にした途端に目隠しされ、修一は体を強張らせた。  
「静かに。行き先を知ってほしくないだけだよ」  
穏やかに諭す声が返って不気味だ。この先の命はないものだから、あえて優しくしている、そんな気さえする。  
それでも修一は声を絞った。  
「お…かあ…さんは…」  
「無事だよ。……少々、疲れてはいるがね」  
微かに響いた嘲りに、修一は唇を噛む。  
車が動き出す。振動はほとんどなく、この車が高級車と呼ばれる類だとわかる。幾つも角を曲がっていく。マンションの近くをぐるぐる回っているようにも思うが、車内には外の物音がほとんど聞こえない。一度、警笛が鳴らされて軽くブレーキが踏まれた、それぐらいだ。  
そのまま数十分運ばれただろうか。あちらこちらを迂回しながら目的地についたらしく、小突かれ急かされながら修一は車から降りた。  
「金だけというのも残酷だろうと思ってね。君にもおかあさんと合わせて上げたくなくなったんだよ」  
淡々とした声は、その奥に舌なめずりしているような気配がある。目隠しされたまま引きずられるように歩かされる。足下はコンクリートからリノリウム、続いてかなり高価なカーペットに移り変わっていく。  
(どこまで行く？ どうやったら逃げられる？)  
母親が居るとか会わせるとかのことばが本当だとは思えなかった。しかし、すぐに殺さないあたりが、一層怖い。じっとりと冷や汗が浮かんでくる体が、気を抜けばぶるぶると震え出しそうだった。  
「あっ」  
唐突に、どん、と強く押された。前のめりにこけそうになると同時に、目隠しが取られ、視界を埋めた光に瞬き目を細める。背後でぱたりとドアが閉まり、目の前で何かが動いた。  
「薬をちょうだい…」  
「！」  
掠れた声にぞっとした。それはよく知っている声、確かに時々しゃがれはするけれど、大抵は艶を帯びて甘やかに囁くはずの声、そしてまた、目の前の床に座り込んだ、白昼夢のような女から響くはずがない声だ。  
服はもとシフォンドレスだったのだろうが、薄汚れ垢染みでいて見る影もない。艶やかな盛り髪はぐしゃぐしゃに乱ればさついで、顔は憔悴し切っている。眼の下には黒々とした隈があり、肉の削げた頬には表情らしい表情もなく、雅子はただ空洞のような目で修一を見上げて呟いた。  
「薬をちょうだい……ちょうだいよ！」  
思わず後じさりした修一に、思わぬ素早さでしがみついていた雅子は、噛みつくようにまくしたてる。  
「お金ならあるわ！ 修一が持ってくるわよ！ 足りなきゃあの子から絞ればいいのよ、だからお願い、薬をちょうだいよお！もう死にそう!!」  
恐怖に大きく見開いた目を病人のようにぎらぎらと輝かせて、雅子は修一を揺さぶり喚く。既に目の前の人間が誰なのかも見え

ていないのか、それとも見えていても、それと認識できないのか。しがみついてくる手の力の強さ、まるでそのまま眼に見えない穴に引きずり込まれそうな気になって、修一は必死にポケットを探って茶色の紙袋を引きずり出す、と、次の瞬間、割れて欠けた爪で怪鳥のように襲い掛かった雅子が、あっという間に紙袋をひっ攫った。

「金ならあるって！ ほら見てよ見なさいよ、あるわよあるってばあ！」  
茶色の袋を振り回すと、ばさばさと中から零れた紙幣が散る。だが、それも雅子にはもう別のものに見えているらしい。ひ、と息を引いたと思うと、紙袋を放り出してドアに駆け寄り、

「修一に連絡してって！ あの子に持って来させてって！ 薬をちょうだい！ ちょうだいってば！」

どんどんがんとドアを叩き続け喚き続け、髪を振り乱して哀願する。

「何でもするわよ、あの子もどうにでもして構わないわ！ だから薬を、薬をおお！」

誰が思うだろう、これがあの大女優、友樹雅子、だと。

(誰…なんだ…)

膝ががくがく震え、よろめきながら修一は壁に縋る。

(これは…誰…だ…)

ふいに別のドアが開いた。気づかずに叫び続ける雅子の背後から男が近寄り、無造作にその腕を捻って引き寄せる。

「ああああああ！」「大人しくしてな、うまく楽しめねえぜ」

伸びた白い腕には所狭しと内出血の跡があった。もがくように縋るように男に絡み付く雅子を組み敷いて倒し、男はその腕に注射器を差し込む。

「うあああ……あア………」

雅子がびくりと痙攣した後、切なげな声を上げて仰け反った。床に乱れ散る髪の中、真っ白になった顔が見る見る薄赤く染まり、

「……」

修一は喉を鳴らした。今にも吐きそう。

(どうして……僕は…ここに…)

自分の目の前で、母親が薬を打たれて陶酔に耽って行く。だらりと開いていく赤い唇、ぼんやりと見開いた瞳が物憂げに修一を見たが、もちろんそれは、修一の居る方向を見ただけで、彼の姿は映っていない。

いや、今は修一だけでなく、雅子の視界には現実の何も映っていないのだろう。引き攀れたように時々微笑む顔は、笑顔ではない、ただ何か原型を失って崩れていく出来の悪い仮面のように、生氣もなく活力もなく、身動きしたくともできない、見たくない

とどれほど願っても目を逸らせない、修一の心を食い破っていく。

(目の前にいるのは誰？ 僕はここで何をしている？)

誰か助けて、体が動かない。

動かないまま、あのぐったりした軟体動物みたいな女が、きょろりと視線を向けてきて、ずるずる這い寄ってきて、修一の爪先から全て食い散らかされていきそう。

(誰か)

手首が掴まれた。引っ立てられた。崩れかけた脚は無理矢理引きずられて歩かされ、部屋から連れ出されていく。

(僕も)

溶かされてしまうのだろうか、あの注射器に入っている薬で。

(僕も)

ああやってへらへらと笑いながら自分の終末を楽しんでいくのだろうか。

「目隠ししなくてもいいんじゃないか、かなりショック受けてるみたいだし」

「実の母親がああだからな」

「お子様には刺激が強過ぎたか」

くつくつ唾いひそひそ囁かれる悪意。

「この後のお楽しみはもっと刺激的だがよ」

「見せてやるか？ それとも参加させるか」

「……放り出せ」

冷ややかな声が命じた。

「元通り、連れ出せ」

「けど、こいつ焦点が合ってませんぜ」

「用心するに越したことはない、それに」

冷ややかな声をもっと冷たく啜う。

「そのうちまた、絞り取れる」

「そっすね、じゃ、綾野さん、俺らが行ってきます」

(あやの…)

頭を押さえつけられ、再び目隠しされた。真っ暗になった視界に、鮮やかな華やかな雅子の笑顔が広がって歪んで溶け落ちていく。

「家の近くに放り出しとけ。腕利きのマネージャーとやらが回収するさ」

嘲笑う声を背中に引きずられ、押し込まれ、運ばれてやがて、放り出される。

「風邪ひくなよ、坊主！」

馬鹿笑いが響き渡った。背後で次々閉まるドア、勢いよく走り去った車のように、修一は空を見上げる。

「……」

ばたばたばたばた。

糸のように細い雨とはこういうものを言うのだろうか。

夜闇の中から雫が線を描いて落ちてくるのが見える。細く頼りなく見えても、雨は冷えていた。見る見る体が固まり、動けなくなってくる。

寒さに耐えかねて、修一は歩き出した。どこへ行こうというのではない、とにかく動いていないと冷たくて辛い。

「…」

突然修一は立ち止まった。

何気なくポケットに突っ込んだ指先に触れた紙切れを引っ張り出す。ぐしょぐしょになっていて広げるのに苦労したが、それでも書いた住所は何とか読めた。周囲を見回し、それほど遠くないと気づく。通りがかった傘をさした中年女性に尋ねると、不安そうに、それでも丁寧に教えてくれた。

「あの、あんた、大丈夫？」

「…はい」

にっこり笑ったのは業務用だが、相手の安心は得られたらしい。風邪を引かないようにね、と声をかけて遠ざかる姿に、少し頭を下げて、教えられた方向に歩き出す。

悪意と善意が同じことばをかけてくるなんて、不思議だし滑稽だ。

(ことばなんて、意味がないんだ)

それは役者を否定するようなものだけど、きっと真実なんだろう。修一が、あの場で何一つ話せなかったのは、自分のことばがどれほど意味がなくて弱くて軽くてどうしようもないものだから、十二分に感じたからだろう。

(でも、他に何かある？)

台詞のない役者など大勢居る。彼らはいつか台詞を得よう、台詞のある役を射止めようとやっきになっている。

けれど、その彼らはこんな状況に出くわしたことがないのだろう。修一の蓄えて来たことばは、これほどどの役にも立たないものだ。

数分歩くうちに、目当ての安アパートを見つける。

「……………」

無言で2階を見上げ、修一は立ちすくんだ。上から下までぐっしょり濡れ、冷気が皮膚を凍らせるほどに染み通ってくる。髪を



濡らした雨粒が雫になって、顔を伝って幾筋も落ちる。眼に入って視界を滲ませ、冷たく脳髄に突き刺さってくる。

「……………」

ぶるっ、と犬のように頭を振って雫を振り払い、修一は濡れたポケットに凍った指を突っ込んで、再び垣のいるはずの2階を見上げた。

(入っていけばいいんだ)

自分を励ます。

(濡れちゃったから、雨宿りさせてよ、垣さん、って)

瞬間、脳裏に葉に濡れぐったりと床に寝そべる母親の姿が過った。

(だめだ)

僕はもう入れない。

この先、どこに修一を受け入れてくれるドアがあるのだろう。この先、誰が修一に笑いかけてくれるのだろう。

崩れる母親とその背後にある暗い力は、きっと修一を越えて滲み出して修一が関わる全てを汚していくのだろう。

(僕はもう、どこにも)

胸の底が凍りついた。

(誰にも)

腰の辺りが冷えた。

(助けを求められない)

顔から表情が消えたのがわかった。冷酷な現実、動かし難い真実、そんな台詞は今まで何度も口にしたのに、今修一の前に立ち塞がったその壁は、ことばにする気力さえ奪うような代物だった。

(何もわかってなかった)

2階をじっと見つめ続ける。

灯が点り、優しい笑顔があるだろう場所を。

(きっと周一郎はこんな気持ちで滝を見ていた)

永遠に手の届かない、温かな日だまり。

唇の片端が吊り上がる。

(この幻は綺麗すぎる)

それを見つめ続けられた周一郎は、きっと修一より遥かに強かったのだろう。

「きつくなったな、雨」

呟いて、垣はごろ寝から立ち上がった。

時計は11時を回っている。垣の住処は、夜になって賑やかになるほど明るい場所にはないから静かには静かだが、時に寂しくなる時もある。

「こう寒くちゃ、すぐ寝る気にもならん。酒でも吞んで…」

ああ、そうか。

部屋の隅を眺めて溜め息をついた。そもそも買い置きなどという贅沢な物があるわけがなかった。必要な時に必要なものがろうじて手に入る、そんな暮らししかしていなかったのを、最近時々ふっと忘れる。

「よくないよな、全く」

中途半端な成功は人をあやふやにさせる。映画に出たこと、それがシリーズ化されたことで、垣でも時々視線を浴びる。人気が得た経験がないから、僅かばかりの人気ですぐにふわふわと浮く、本当に幻のような時間だと言うのに。

「やれやれ」

ジーンズのポケットを探ると小銭が残っていた。缶ビール1本だけ、と思いつつドアを開けたが、外はいつしか本降りになっていて、おまけに吹き降りになりつつある。

「こりゃ、かえって寒いか」

唸ってドアから首を引っ込めようとして、ふと眼下の道路に立ってこちらを見上げる人影を見つけた。

「誰だよ、こんな夜に傘もささず……あーあ、ずぶ濡れになっ……?!」

思わず手すりから身を乗り出す。間違いない、あれは。

「友樹君?!」

「…」

垣の上げた声に、少年は微かに唇を緩めた。

「おいおい何だよ一体っ」

慌てて手近の傘を掴んで階段を駆け下りる。

(何だ?)

頭の中に沸き起こる疑問符、傘をさしても吹きつける風雨に濡れながら、ますます違和感が増す。修一は雨に濡れていると感じていないようだ。まるで春先の陽射しの中にいるような茫洋とした表情で、駆け寄っていく垣をゆっくり目で追っている。いや追っているが見えているのかどうか。どんどん垣が距離を詰めても、ほんやりとした表情が動かない。まるで仮面を貼付けているようだ。

「友樹君……?」

側まで近づいても、こちらを見上げてくるだけの相手に、垣はおそろおそろ声をかけた。こんな時間に、あの友樹修一が、マネージャーも付き人もなしで、しかも雨に濡れながら突っ立っている理由がどうにもわからない。ただ、尋常じゃない、それだけはわかる。

(何があった?)

「…どうした…?」

「っ」

ふいに相手が体を震わせた。瞳がゆっくりと焦点を合わせてくる。真っ青な頬、白い唇、強張った顔が引き攣れたように歪んで微笑みかけ……失敗した。

「……垣……さん……」

「友樹……」

端正な顔にいきなり次々と涙が溢れて流れ落ちた。ぐしゃりと崩れた仮面が悲鳴を響かせながら飛び込んでくる。

「垣さん……っ!!」「!!!」

しがみつかれて危うく傘を飛ばされかけ、垣はかろうじて持ちこたえた。飛びついた友樹がわああああっ、と大声を上げて泣き始める。

「おい……」

「!!!……」

「友樹……っ」

しがみついて身悶えする相手を引きはがそうとして肩に触れ、ぎょっとした。

(氷みたいだ)

冷えきってかちこちで、まるで陶器が何かを掴んだような気がする。きっと随分長い間ここに立っていたに違いない。

◆「おいおいおいおい……」

傘を片手で支えてジャケットを脱ぐ。身もがきする修一に何とか着せかけて包んでやる。ほんの小さな子どものように泣きじゃくりながら、修一は一瞬でも垣から離されることに必死で抵抗した。

「とにかく君のマンションに行こう、あそこの方がすぐにあったまる……」

「やだ……っ」

「けどさ」

「…いや…だあ……っ！」  
掠れた悲鳴を漏らしながら、修一は激しく首を振る。あそこは嫌、絶対嫌、戻るの嫌と繰り返して、今にも垣の手を振り払ってしまいそう。既に意味がなくなった傘をたたみ、暴れる修一を抱え込む。  
「ああわかったわかった、わかったから、ほら来いよ、ここで凍えてるわけにはいかねえよ」  
何とか自分の部屋の方に押し出そうとするのに、修一は何か怯えたように強くと首を振って動こうとしない。  
「友樹君、ほら、おい、友樹君、俺も冷えるし、なあおい、おい……友樹！」  
「っ」  
声を荒げると突然友樹は体を凍らせた。振り仰いだ顔は恐怖に引き攣っていて、まるで垣に喰われかけたような表情だ。さすがに怯みかけたが、朝まで押し問答する気もない、語気を強めたまま相手を覗き込んだ。  
「泣くなって。何があったか知らんが、とにかく部屋に入って、あったまって、それから話聞くから！」  
「……っ」  
しゃくりあげながら、修一はようやくのろのろと垣から離れた。その体を引きずるように階段を上がり、自分の部屋へ連れ込みながら、垣は疑問を持って余す。  
（一体何があった？ こんな夜更けに友樹修一がこんな状態になる、なんて？）  
第一、友樹一家の守護神、佐野はどこへ行ったのだ。お守役の高野は何をしているのだ。  
「待ってるよ、とりあえず濡れたものを脱がなくちゃ」  
ゴミ袋を敷き、戸口で服を脱がせ、タオルで手早く体を擦って毛布で体を包んでやり、仕上げにストーブの前に修一を座らせる。されるがままの修一を横目に、自分もずぶぬれになった服を着替えた。残り少ないきれいなTシャツとパンツをもう一組、修一のために準備する。濡れた衣服はゴミ袋に放り込んだ。明日にでもコインランドリーで洗濯しよう……ひょっとすると、そんな風に扱っちゃいけない代物かも知れないが。  
「新品じゃないけど、我慢してくれ。変な病気は持ってないし、洗濯はしてある」  
「…」  
着替えを押しやったが、修一は動こうとしない。魂が抜けた人形のように、毛布に包まれた体を小さく縮めたまま、ストーブを見つめている。  
「頭ももうちょっと拭いた方がいいぞ、濡れたままじゃ」  
「……クション！」  
「……乾く時に冷えるんだ、だから」  
タオルも渡そうとしたが、受け取ろうともしない。拭いてくれればいいという傲慢さではなく、そんなことをする気力さえないようだ。  
「……拭くぞ」  
溜め息をついて、垣はタオルで修一の頭を擦りにかかった。さりげなく触れた体はまだひんやりとしている。部屋はあまり立て付けがよくないし、保温も不十分だ。ストーブの火力をもう少し上げ、ごしごし擦り続けていると、つい愚痴が口を突いた。  
「あんな所にずっと立ってちゃ駄目だ」  
「……」  
「もっと早く来てたんだろ、さっさと入って来い」  
「……」  
「それとも、どっか他に行くところ…」  
「……みたいだ……」  
わさわさと頭を揺さぶられながら、修一が掠れた声で呟いた。  
「あ？」  
「……滝さん……みたいだ……」  
「……どうせ貧乏所帯だよ」  
「違う……そうじゃない……そうじゃなくって……こんな僕を……部屋に……入れ……」  
ことばが途切れた。なおも頭を擦りながら待ったが続かない。  
「友樹？」  
「……」  
覗き込んだ友樹の顔はまるで既に死んだ人間のようなようだった。何の表情もなく、疲れ切ったように感情が削られていて、虚ろな瞳が真っ黒な穴に見える。  
「……どうして、あんな所に居た？」  
びくりと修一の体が震えた。だが、ことばは出ない。  
「……嫌なら言わなくていいぞ」  
付け加えたことばにも反応しない。  
「……少しはあったまったか」  
乾き始めた髪を手櫛で整えてやって、垣が離れようとした矢先、  
「…おかあさんに……会った…」  
「…え？」  
干涸びた声が続けた。  
「おかあさんに……会ったけど……もう……会えないと、思う……っ」  
修一の顔が絶望に崩れた。

話し出すと垣が切れたようなものだった。唇から溢れ出すことばを繕うことも整えることもなく、時に意味を為さない呟きを挟みながら、話し続ける。どうして母親に会うことになったのか、どこで会ったのか、どんな風に会ったのか、連れていかれた場所、雨に濡れたら……何だか道に迷ったみたいで……近くに垣さんの家があったと思って……けど……来たら入れなくて……何でかわからなくて……でも……他にどこにも……行けなくて……」  
見開いた目から瞬きする前に涙が零れ落ちていく。  
「どうして……いいか……わかんない……それで……僕……」  
修一は引き寄せた膝に頭を伏せる。肩が細かく震えている。  
「泣きたい時はちゃんと泣けよ」  
垣は立ち上がりながら、あえて放り捨てるように声をかけた。  
「もうさんざ泣きつられてんだから、今更飾っても仕方ねえだろ」  
せんべい布団を引っ張り出す。たった一組しかない薄くて狭い布団を畳に敷く。  
「……っ……う」  
背中から微かな嗚咽が漏れてくる。堪えに堪えたその声に、溜め息をついて振り返り、今度は少し声を和らげた。  
「ほら、無理すんな」  
ぼん、と頭に手を載せる。思ったよりも小さな感触に、どきりとした瞬間に修一がしゃくり上げ始めた。  
（意外に恵まれてねえな、こいつ）  
貧乏は苦しい。社会的地位がないのはきつい。行き先が見えない暮らしも、自分が無価値だと思われ知らされる仕事も、正直言ってがっかり以外の何ものでもない。  
しかも今は二重に落ち込み凹んでいる。  
友樹夫妻こそ理想の夫婦だと思っていた。二人の人間性に憧れて役者を目指し、いつかきつとその足元には這い上がろうと思っていた。その高みには登れなくとも、共演は難しくとも、それでも小さな脇役として同じスクリーンに映し出される時を思うたびに、動けなくなりそうな気持ちは鼓舞された。

けれど、その姿は幻だった。  
思いやり深く豊かに温かい父親そのものと思っていた友樹陽一は、自分と同じように色と欲に塗れて、体面のためなら我が子を切り捨てる男だった。激しく熱く男を誘うけれど、最後の一線では貞淑で芯の強い鮮やかな妻だと思っていた友樹雅子は、自分の欲望を叶えるために遠慮なく我が子を闇に差し出し、快楽に溺れて全てを放り投げられる女だった。  
修一だって、確かに傲慢で生意気で人をからかう趣味はあるが、仕事にはちゃんとした姿勢を貫いている、年下ながらも立派な奴だ、そう少しばかり見直しつつあったのに。  
全てはスクリーンの彼方に描かれた夢、そんなことはわかっていたけれど、友樹夫妻は違うと信じた、信じていたかった。  
(これから何を目標せばいいんだ?)  
目標がなくなった。  
いや、目標だと思っていたものは影だと思知らされた。  
それが映画というものの、芝居というものだと、見せつけられた気がした。  
(落ち込むよな)  
せんべい布団にもぞもぞと潜り込み、溜め息をつく。  
ふと目をやると、修一はストーブの前でまだ小さく丸まっている、まるで捨てられた小猫みたいに。  
「少しあったまったらこっち入ってこい。明日も仕事だろ」  
「…」  
仕事、のことばにびくりと顔が上がった。しばらく凍りつく。やがて、こっくりと幼い顔き方をして毛布を巻き付けたまま立ち上がり、俯きがちに毛布ごとせんべい布団に入ってきた。垣を見ない。深く顎を埋めた姿勢で横になると、手足を縮め、そのままどんどん縮んで胎児に戻ろうとでもするように小さく小さく体を竦める。あまり心細そうなので側に寄り添ってやっても、顔を上げない視線を合わせない。ただただぎゅううと身を固めるだけだ。  
それでもやっぱり疲れ切っていたのだろう、数分するうちに、その姿勢が静かに緩んだ。堪えたような息づかいが、静かで穏やかな寝息になる。  
(こいつの方がショックだろうな)  
垣は警戒の解れた修一の顔を見つめた。  
端正な顔立ちはここ数日で曇れ汚れ疲れ切ってしまった。目元に皺が寄り、唇はかさかさ乾き、疲労だけではない、まるで数十年一氣に年を取って、垣の年さえ越えてしまったように見える顔だった。  
「人間……だよなあ…」  
役者だってロボットじゃない、CGじゃない。仕事以外のいろいろな顔がある。いろいろなプライベートをちゃんと抱えている。それは時には華やかな評価を裏切るものかも知れないし、誠実な物言いを一気に反転させてしまうものかも知れない。  
けれど表の顔と裏の顔が全くぶれずに、合致したまま生きられる人間の方が少ないのだ。  
(弱点あって当たり前、か)  
追い詰められ続けていたんだろう。表の顔が立派になり華やかに見事になればなるほど、小さく縮んでしまった、もう1人の弱々しい自分が呻き悶え認めてくれと訴えてくる。  
無視しないでくれ見捨てないでくれ、俺もまだ生きたい、俺もまだここにいる、確かに存在しているんだ、どんなにみっともなく醜くてどうしようもない存在でも、と。  
(なまじの名声は命とり、だよなあ…)  
今、垣は自由に振る舞っている。たとえ数本映画に出ようと、屋台でラーメンを啜っても、コンビニでコンドームを購入しても、指差されたり何をしているのかなんて囁かれたりしない。パチンコでぼろ負けして地団駄踏んでも、綺麗な女に目を奪われて駅のホームから転げ落ちて、人としてどうかなどと評価されたりもしない。  
淋しいかもしれないけれど、それはとても自由だ。  
(役者って、難しいもんだな)  
誰かの夢を背負って歩き続けるということは、常に自分を一部失って歩くってことかも知れない。  
(『俺』を、失う)  
ごろんと腕枕して仰臥し、天井を見つめる。  
(そんな風に考えたことはなかったな)  
そういう世界で、本当にこの先生きていけるのか。生きていたいと思っているのか。  
そこまで役者は魅力的か。そこまで芝居をやり続けたいか。  
「……………」  
目を閉じる。眠気が来ない。静まり返った部屋の中、じっと考え込み続けて、頭が煮えそうになった時、ふと部屋の中に違うものを感じ取った。  
(別のリズムがある)  
吸って吐いて。吸って吐いて。  
今自分が繰り返している呼吸とは違うリズムで、もう一つの呼吸が響いている。  
吸って……吐いて。吸って……吐いて。吸って…吸って、吐いて。  
(違うリズムだ)  
意識すると体の隣に、ストーブとは違った温もりが感じ取れた。布団を通じ毛布を伝わって、ゆっくり拍動しながら温もりが広がってくる。  
(温かいな)  
そういや、猫も湯たんぽがわりになるんだって。  
俺はそんなことを考えただろうか。あいつも1人で生きてきたはずだから、1人とか孤独とか温かいとか寒いとか、特別な感覚で受け止めてきたんじゃないだろうか。  
(脚本には、そんな表現、あんまりなかったな…)  
ああ、けどそうか、俺ってのは1人なようで1人じゃないんだっけな、いつも。回りに誰か彼かが必ず居て、けなしたり笑ったり心配したり怒ったりしつつ、あいつも一緒に生きているんだ。  
(けれど、周一郎は違う…)  
たくさんの人間に囲まれて、たくさんの物を与えられて、けれど、そのどれもが周一郎の心に届くこともなく。  
(ああ……そうか……)  
だから、俺は周一郎を放っておけなくなる。  
そんなことしてちゃ駄目だ、そう手を伸ばしてしまう。その支えがないときの孤独に想像がつくから。  
脳裏に雨に濡れていた修一が浮かぶ。  
(俺は、知ってるんだな)  
本当に1人であること、を。  
身動きできない孤独というものを。  
それがどんなに苦しいかも。  
(だから、皆が俺に近づいてくるのか……)  
きっと誰もが抱えている、本当の孤独の理解者であると、本能的にわかるから。その孤独を打ち明けても、俺なら嘔吐せずに聞いてくれると知っているから。  
俺の側なら、どんな自分でも、安心してさらけ出せるから。  
笑ったり泣いたり怒ったり、惨めだったりいじけていたり虚しかったり、ひょっとして何の価値もないかも知れない自分でも、俺はいつもみたいに何事もなかったように、当たり前のように接してくれるから。  
(そうか……そういうことか……)  
「う…ん…」  
修一が身動きして、少し垣の側にすり寄った。そろそろ手を伸ばし、垣がいるのを確かめるように探って、小さく安堵の溜め息をつけて寝息を立て始める。  
「…無邪気な顔もできるんじゃないか」

くす、と思わず笑った。  
なるほど、違う顔を見つけるのは楽しいものだ。それが自分にだけ見えているなら、なおさら。  
(そうか……そうか……そういうことか)  
胸の中で何度も頷き、何に頷いているのかも次第にわからなくなりながら、垣は大欠伸した。それから、ゆっくり静かに眠りに落ちていった。

(緩んでしまった)  
ところが。  
からだが。  
(垣さんに声をかけられた途端、何かが切れてしまった)  
夢現に修一は考えている。強張った心がほろほろとほぐされていくのを感じる。  
(温かい……)  
本音を晒したという失敗感を感じないのを、不思議に思った。ふわふわと自分を包む柔らかな熱。心の隅々まで、温められほぐされて、竟いでいく、今まで味わったことのない開放感に。  
(もっと……もっと温かさが欲しい……)  
修一は心の中で、凍えた心と周囲の温かさを秤にかけた。温かな気配に見る見る浮かび上がった凍えた心は、すぐさま再び下降していく、自分の居場所を取り戻そうとでもするように。そしてまた、温かな気配が天秤を揺り動かし、秤は不安げに腕をゆらゆらと揺らした。  
(もっと温かさ……欲しいよ)  
心の奥底に、自分を見つけて駆け寄って来てくれた垣の姿が浮かんだ。ほんわりと温かが増す。しがみついた彼をよろけながらも受け止めてくれた垣。ふわっと湧き上がる温かさ。頭に載せられた垣の手。ぽうっと小さな灯のように点った温かさを引き寄せ、抱き締め、抱え込む、  
(ああ……あったかい……)

修一はほっと息を吐き、より深い眠りへと引き込まれていった。

## 6. シーン203

たったったった。  
軽い足音をたてて、一人の男が垣のアパートを目指して走っていた。  
片手には咲き綻び始めた見事なサーモンピンクの薔薇の花束、春にはまだ間があるこの季節にはかなりの出費だっただろうと思われるのに、本人は至って気軽くその花束を振り回しつつ駆けている。  
とても機嫌がよさそうだ。もう少しで空へと舞い上がれそうなくらいだ。足取りを変えずにアパートの階段を駆け上がり、垣の部屋に辿り着くとおもむろにドアを開けようとしたが、さすがに鍵がかかっている。  
けれど男は動じない。にやりと笑ってポケットから一本の鍵を取り出すと、平然と鍵穴に差し込み、にこやかにドアを開け放った。  
部屋の間取りは熟知している。あちらこちらと探すほどの広さでもない。大きく息を吸って、爆睡しているであろう相手の心安らかな眠りを気持ち良く踏みにじろうとして大声を出す。  
「おっはよおおお！ 垣くん、元気……か……な……」  
声はもごもごと尻すぼまりに口の中に含まれていった。  
目の前の光景を凝視する。  
瞬きして、一瞬、ああ青い空だなあ的に上を見上げ、気を取り直してもう一度視線を降ろしたが、状況は変わらない。  
薄暗い部屋の中にはせんべい布団が一組敷かれていた。  
大の字になって寝転がっているのは見慣れた垣の姿だが、その腕の下、伸びやかに手足を伸ばして眠っている別の姿があった。  
「……女なら良かったのに」  
ぼそりと呟く男、宮田の目が冷ややかに温度を下げる。毛布にくるまり、まさにここが安心の場所、そう言いたげに、乱れた髪で安らかな寝息をたてている相手を見間違えるものか。  
宮田はぐるりと部屋の中を見回した。びたりと止まったのはゴミ袋の上、ぐっしょり濡れたまま脱ぎ捨ててある衣類一切適切、おそろくは眠る美少年のものだろう。下着までである。  
「ふーん」  
ぱたりと静かに後ろ手にドアを閉めた。  
「ふーん」  
花束を衣類の側にそっと置く。乱暴に扱ったから、多少花卉が散り落ちた。それに余計にかちんと来る。部屋に上がって、勝手知ったる他人の部屋、部屋の隅の洗濯物干し用の紐を拾う。  
びんびんびん。びん。  
両手に巻き付け、強度を試した。問題ない。  
「ふーん」  
相変わらず、これと言った感情を含まない鼻声で唸り、そろそろと垣の上に屈み込んでいく。くーかーくーかーと、漫画じみたいびきを立てている相手の首を、そろりと紐で巻いた。まだ起きない。考えて、もう一回巻き付ける。  
「ふーん」  
何も何が何でも殺したいわけでもない、が、誤って殺してしまうぐらいの程度は意図している。ただ二重に巻いていることを検事がどう判断するのだが。  
腰を安定させて、次の瞬間全くためらいなしに両手を左右に引いた。  
「ふーんっっん！」  
「ぐあっっ!!」  
かっと目を見開いた垣がもがいて跳ね起き、すぐに飛び離れた宮田の前で首に絡んだ紐を取ろうと大暴れする。  
取れないんだよね、意外に。  
ぐあああとかごごおおとか言いつつ暴れた垣が、ようやく首の紐を取り、部屋の隅で見物していた宮田めがけて突進してきた。  
「おのれはなっ!!」  
「何なんだ、この状況？」

「は？」  
頭ががががしている。酸素不足に違いない。しかも、それを引き起こした当人は、こともあろうに現職の警察官で、ついでに何があったのどうしたのという顔で垣を眺めているから、余計にむかつく。  
「は、じゃねえ、は、じゃ！」  
もう少しで人殺しだぞ、お前！  
首の回りがざらざらしている。烏肌立ったのと紐で擦れたの、両方のせいで。擦り剥けてもいるもだろう、触るとひりひりする。

。「なんでオレを殺さなくちゃならん！」  
睨みつけた垣を、宮田は宇宙人が落語を語ってるような顔で見返した後、ぼそりと唸った。  
「友情を裏切った」  
「はあ？」  
「俺は友樹君が他の奴の手に入らんようにしてくれと言っただろ」  
「はああ？」  
そんなことをいつ頼まれただろう。  
「頼んだよな」  
「…それがどうした」  
「何なんだ、この状況は」  
宮田は目を据わらせて、ついと指差した。その先を辿っていて、つい今まで自分が横になっていた場所に寄り添って眠っているらしい修一の姿を見つける。  
「何なんだって…」  
こいつが泣いてぐっしょり濡れてしまったから引剥がして、半端に火照った体を冷えないように毛布であつたためて、そう説明しかけて、なおも極冷えまで温度を下げていく相手の視線に気がつく。  
「友樹君が、濡れたんだ、へえええええ」  
「っ、お前っ！」  
ことさらに繰り返すことばに、ようやくはっとした。  
「待てっ」  
「そんなに慣れてると思わなかった」  
「おい！」  
「ずいぶん啼かせたんだろうな、ええおい」  
「っっっ、世の中の男が全部お前と同じ嗜好だと考えるなっ!!」  
「どうだか」  
「あんなあっ!!」  
嘲笑を浮かべる相手の胸倉を掴み上げ、なおも詰ろうとした矢先、  
「ん…」  
小さく響く声に二人ともひやりと首を竦めた。  
「…起こしちまう。……とかくな、オレにはそのケはない」

「そのケって？」  
しらっとした顔で宮田が問い返す。  
「……そのケ、だろうが」  
「……友樹君、可愛いと思わんの？」  
「…あのな」  
「お前頼ってきたんだよ、夜中に一人で」  
「うーん…」  
「いろいろあったからだろ、心細くてさ」  
「……うーん……」  
まあ少しは可愛いかも、そう呟きかけて、ほうらみる、と目を細める相手に我に返る。  
「いい加減にしろ、それより何だって急に来たんだ」  
「急に來られて困ったのか」  
「……放り出すぞ」  
垣も笑みを消すと、さすがに潮時だと思ったのだろう、宮田はくると表情を変えた。  
「あ、事情聴取」  
「……あれを持ってか」  
放置されているサーモンピンクの薔薇を目で示す。  
「ずいぶん高いんだろうな」  
捜査費用からは勿論出てないよな？  
にたり、と宮田の顔が綻んだ。  
「貴重な税金をそんなことには使っていない。勿論、全額俺のポケットマネーだ」  
今月の給料半分はつぎ込んだ。  
「自分を削ってこそその愛だろう！」  
誇らしげに胸を張る相手に、垣はどっと疲れた。  
「はあ」  
「まあ事情を聞いてやろう、話せ」  
「……切り替えの速さは天下一品だな」  
「ありがとう」  
「褒めとらん！」  
「まあとにかく話せて。どうしてこの子が、『俺』の所じゃなくて『お前』の所に来たのか」  
「……微妙に観点がずれてないか？」  
「どこが？ だから、どういう理由で修一がこういう状況になったかだろうが？」  
「……」  
垣は項垂れた。どうしてこいつとずっと友人なんだろうな俺は、と思う。追い打ちをかけるように、妙に甘やかな声で宮田が囁く。  
「かおる、めげないで」  
「よせ」  
名前と呼ばれるのは嫌いだ。  
「か〜お〜るっ」  
「よせっつーのに！」  
わかってやっている宮田は満面の笑みで振り上げた顔を覗き込んでくる。何を言っても堪えない。宮田を驚かせられるのは、日本沈没でも世界の破滅でもない、友樹修一が垣を恋人にすると断言するぐらいのものだろう。  
「……わかったよ」  
とにかく話してやるよ、と垣は宮田に座るように促した。

昨夜からの顛末。夜、気がつくと修一が雨の中に突っ立っていたこと。迎えに行くのと泣いてしがみついていたこと。部屋に引き入れ話を聞いたこと。そして、とどのつまりは、友樹雅子が重度の薬物依存患者であったこと。  
「ふうん……綾野、ね」  
「有名どころだよな？」  
「まあな。だが尻尾を掴みにくい組織でな、もうちょっと動きを見せてくれりゃ、何とかなるんだが」  
「…こいつの母親だけでも何とかならないか？」  
思わず垣は頼んだ。  
確かに話を聞く限り、女優としてはともかく、立派な母親とは言い難いようだ。だが、それでも修一にとっては母親、に違いない。  
「なるよ」  
「え」  
とても無理だとか、そんなのあり得ないとか、宮田の罵倒を予想していた垣の耳に、意外にあっさりすらりと宮田の肯定が届いた。思わずぼかんと相手を見る。  
「なるよ？」  
「なるよ」  
「なるよって……おい」  
「俺がやるんだから、何とかならなきゃおかしい」  
にやりと笑って自信たっぷりに宮田は応える。  
「いつかの電話で、雅子が『いつもの場所』って言ってたな。おそらく、雅子はその所に監禁されていると見ていい。その『いつもの場所』って言うのは、薬の引き換え場所のどれかだろうし、この周囲の引き換え場所は売人から聞き出せる。幸い、雅子は『大女優』だからな。友樹君のマンション近くの電話ボックスから、彼女だとわからずに目立たずに行ける所となると、もっと絞られてくる」  
「…お前の言うことを聞いてると、凄く簡単そうだな」  
「カンタンさ。けど、その雅子の様子じゃ、薬物依存もかなり進行している。回復には入院が必要だろうし、しかも長期になる。そうなるもまた、友樹君の回りが騒がしくなるぞ」  
「……だな」  
垣と宮田は同時に修一の寝顔に視線を落とした。と、その気配に気づいたように、唐突に修一が身動きして目を開けた。  
「ん……？」  
「！」  
いきなり宮田が身を翻して、垣はぎょっとした。たったの2歩で玄関に辿り着いた宮田は、薔薇の花束を掬い上げるように抱え、むくりと体を起こした修一の前に飛び戻ってくる。  
「あ…れ……？ 垣さん…？」  
「おはよう」  
「あ…おはよ……僕……どうして……ここ……どこ？」  
修一は呆気に取られた顔で部屋の中を見回す。どうやら昨夜のことはあまり覚えていないようだ。  
「はい、友樹君！」  
その修一にいきなり薔薇を差し出して、宮田はにっこり笑った。  
「おはよう！」

「お…おはよう…ございます…？」  
明るく挨拶されて、そこはそれ、何とか挨拶を返したものの、この人誰、何でここに、そう言いたげな顔で振り仰ぐ修一に、垣も微妙な表情を返す。  
(宮田が何者かなんて、こっちが知りたい)  
昔から得体の知れない男だったし、今現在もそうだし、きっと未来永劫、宮田は理解し難い男だろう。  
修一と宮田の間に通じた奇妙な共感を気づかず、宮田はにこやかに会話を続ける。  
「薔薇、似合うねえ、友樹君」  
「は、あ？」  
もぞもぞと修一は座り直した。寒そうに毛布をかき寄せ、その仕草にはっと息を呑んで宮田が垣を振り向く。  
「かおるっ！」  
「呼ぶなっ」  
「コイン・ランドリーだ！」  
「は？」  
「友樹君の服を乾かしてこい！ ついでに洗濯もしてこい！」  
「オレがっ？」  
「薔薇の代金、お前宛にしてもいいぞ」  
「どういう権利だ」  
「そりゃあお前」  
にいと宮田は笑う。  
「俺は国家の犬だから」  
「……わかった、行くよ、行きます」  
本気が冗談かわからないが、人の迷惑や世間体を考えず、何をするかわからないということは事実だ。  
「それでね、友樹君」  
2人きりで話せると思ったのか、嬉しそうに話し始める宮田を背中に部屋を出た。  
ジープのポケットの小銭を数える。何とかコインランドリー代はありそうだ。  
部屋を出る時にゴミ袋に突っ込んできた修一の服を持って階段を下りていくと、すうっと見覚えのある車が1台、目の前に滑り込んできた。思わず立ち止まると、するすると運転席の窓が降りる。  
「？……佐野さんっ?!」  
「おはようございます、垣さん」  
どうしてここに、とか、なぜここに、とか言う問いは、佐野には愚問以外の何ものでもない。必要な時に必要なタイミング、必要な状態で現れる友樹家の守護神は、にこやかに微笑みながらことばを継いだ。  
「それは修一さんの服ですね？」  
「あ、はい」  
「着替えはこちらにあります。15分だけ準備に時間を差上げますから、急いで下さい」  
柔らかいけれども断固とした命令に、溜め息まじりに呆れる。  
「知ってたのか、佐野さん」  
昨夜、姿を消した修一を探し回ることさえなかったのか。  
「想像はつきます」  
佐野は垣に着替えを渡し、代わりに濡れて持ち重りのするゴミ袋を受け取ると、嫌な顔一つせず、後部座席にそれを置いた。  
「修一さんが1人でマンションを出る理由は2つ、父親か母親からの連絡か、あなたを訪ねるためです。陽一さんはまず連絡を入れませんが、雅子さんはあなたも知っている事情の通りです。たとえ、母親に呼び出されたとしても一緒には居られないでしょうし、すぐに帰される可能性が高い。修一さんは人目を引くし、メディアも黙っていませんからね。周囲のそういう動きはなかった。ならば、残る1つはあなたのところですよ。修一さんのジャケットがなくなっていたし、伊勢さんにあなたの住所を尋ねていたはずだから。傘は残っていました。修一さんはコンビニで傘を買うタイプではありません。昨夜の雨なら濡れ鼠でしょう」  
サングラスの向こうから零れた笑みは艶やかだった。  
ひょっとすると、佐野の方が雅子より、いや陽一よりも、『役者』の技量は遥かに上なのかも知れない。  
呆気にとられて開いていた口をようやく閉じ、垣はそろそろとまた開いた。  
「『全部』……知ってるんですか、佐野さん」  
全部知った上で、何が一番、修一を輝かせるかを考えてたりするんじゃないですか、それこそ、両親の状態を知った修一がどう感じるかさえも『計算』の上で。  
そんなことができるのかどうか、それでも垣はあやうく尋ねそうになった。  
(佐野さん、実はあなたが裏で糸を引いてたりしてませんか?)  
そんなことになったら、垣の運命は風前の灯だ。  
「さ、どうですかしら」  
佐野はさらりと受け流し、微笑みながら付け加えた。  
「でも、私、マネージャーとしても私個人としても、修一さんを『買って』いるんです。だから、彼の才能を妨げるものがあるれば、微力ながら『それ』を排除するのに全力を尽くしますわ、たとえ『それ』が何であろうと」  
ことばは柔らかかったが、底に秘められた冷ややかな凄みにぞくりとした。その垣の表情を見て、佐野は嫣然と笑った。  
「あなたは違いますわ、垣さん」  
笑みが深まる。  
「私にもわかってるんですよ、修一さんにとっての、あなたの必要性はね」  
(修一さんにとっての)  
それは垣本来の人権とは無関係に、ということだよな？  
ツッコミどころ満載だが、突っ込んだ後の命の保証がない気がする。  
「……そりゃ……どうも……」  
もごもごと応じると、再び音もなく窓がせり上がった。  
解説は終わり。心優しい配慮の時間も終了。  
窓とサングラスに遮られた佐野の本音は、氷河なみに凍てついていそうだ。  
垣はそろそろと後じさった。ゆっくりと離れていく車に、眠っている獅子を起こさないような足取りで階段を戻っていく。  
(悪い人じゃないんだらうが)  
「こええ女……」  
思わず呟いてしまった。

「な…んか」  
「え？」  
高野は山本の顔を振り仰いだ。例によって、『月下魔術師』撮影の合間の、他愛ないおしゃべりの最中だ。  
「なんかこう……いやに目につくな」  
「何がです？」  
「いや……ほら、修一の奴さ、前より垣へのまわりつき方が酷くなったような気がしないか？」  
「…そういえば……そんな気も」  
高野は演技中の修一に目をやった。  
伊勢は修一の演技にまだまだ納得しておらず、喚き散らしている。  
「何やってんだよ！ 友樹君！ そこでそんなに瀧を頼っていくな！」

「はいっ」  
素直にこっくりと頷いて、修一は再び演技を始める。だが、今度は、垣の方が椅子の脚に蹴つまずき、テーブル掛けを引っ掴んでこけた。  
「垣っ！ 何やってやがるっ！」  
「垣さんっ！」  
修一がうろたえて垣の側に走り寄る。心配そうな顔で覗き込み、どこも怪我していないらしいと知って、ほう、と溜め息をついた。  
「ありゃ、肉親を見る眼だよ」  
山本がぱっさり切り捨てる。  
「肉親？」  
「そ。それも血の繋がった父親とか、兄貴とか、な」  
山本は口調に皮肉を響かせた。  
「あ、修一さんと言えばね、最近素直になってませんか？」  
「そうなんだ。この間、落ちた脚本を拾ってやったら、『ありがとう』だってよ」  
「へえ、あいつが」  
心底意外そうに口を挟んだのはメイクの山根だ。  
「前のときは拾ってやっても少し頷いただけでさ、プライド高いぜ、って見せつけてきたのに」  
「今撮っている映画（もの）のせいでしょうかね」  
「10年来の当たり役だって、監督一人で喜んでるぜ」  
「そうは見えないけど」  
高野は怒鳴っている伊勢を不審そうに見つめる。  
「ああ、ありゃ、監督一流のポーズだよ」  
山根が事情通ぶって教えた。  
「修一はもっと何かを引き出せるって言ってたぜ、監督。今は自分の才能だけに頼ってるが、その上に積み重ねりゃもっといいものが出来るはずだってさ」  
「周一郎シリーズも3作目だからな。なまじな演技じゃ客は呼べんって訳だ」  
冷やかな山本の声が続いた。  
「あ、それじゃあ修一さん、その当たり役だってうえに感情移入してるのかな」  
思いついたように高野が瞬きした。  
「修一さんと周一郎、どことなく境遇が似てるし、このところ修一さんも辛い事が続いてましたからね」  
感情移入じゃないよ、と山根が嗤った。  
「ありゃ、完全に周一郎になりきってるよ。垣を滝に見立ててんのさ、休憩の時もな」  
山根のことばと同時に休憩になった。垣さん、と修一が声をかけながら垣の側へ歩いていく。へたへたになって座り込む垣にタオルを渡して、脚本と一緒に覗き込みながら何かかやと話している。  
「甘えているんだな、あれは」  
「いいじゃないですか、役がうまくいくんだから」  
山根と高野がのんびりそれを見守っていると、  
「そううまくいかな」  
山本の冷笑が響いた。  
「え？」「は？」  
高野と山根が振り向く。  
「どういうことですか、山本さん」  
「簡単なことさ」  
訝しげな高野に山本は肩を竦めてみせる。  
「確かに修一は周一郎に同化して、勝手に垣に滝のイメージを被せて甘えてりゃ、演技もうまくいくし、あいつもシアワセだろうな。けれど、問題は垣だ」  
答えを引き出そうとするように、山本は2人を見返す。問われている気配に、2人はちらちらと視線を交わすが、答えには辿り着けず、山本に視線を戻した。  
「垣に『こける』以上の才能があると思うか？」  
お前達も知ってるよな、と山本は続ける。  
「滝は確かに『ドジでお人好しな一般人』って描写をされてる、けれど、そうじゃないだろ？」  
2人が一瞬考え込み、それからそれぞれに、あ、と表情を変える。  
「滝、は凡人じゃない。『そんなふう』に見えるように描写されてるだけで、その実、誰よりも速く鋭く『真実』に近づけちゃう、とんでもない能力を持つてる男だ」  
へたしたら、周一郎だって滝の添え物でしかない状態になりかねない。  
「だから、周一郎シリーズは『滝』の一人称で語られてるわけだろ？」  
滝の動きの的確さ、信じられない嵌まり具合を、読者や観客に悟らせないために、三人称で描いたなら、こいつは何者だ、と注目が向いてしまうのは必至、それを避けるために。  
「けれど、映画ってのはそのあたりが難しい」  
まずい造りをしてしまえば、そこまでして周到に隠されている筋道を『三人称』の視点で暴いてしまいかねない。かと言って、『一人称』で描くなら、滝のわけがわからない、けれども迷路のただ中をまっすぐに突っ切っていく感覚を再現しなくては、筋道が立たない。  
「そんなことは『凡人』にはできない……………だから、この作品は映像化が難しい、そう言われてきたわけだろ」  
超能力と言われる不可思議な力の内面を描いてこそ初めて成り立つ物語なぞ、超能力者以外の誰が再現できるのか。  
「監督があれだけヒステリックなもの、『三人称』のまま描いて、どこまで観客を最後まで騙し通せるかにギリギリしてるからだ」  
「たった1つの動作、たった1つのことばのニュアンスで観客にばれてしまう、この物語を切り回しているのは、周一郎でも佐野由宇子でもない、振り回され駆けずり回っているようにしか見えない道化師にしか見えない、滝志郎という男なのだ、と。」  
「けれど、それこそ、このシリーズの本質だ」  
気づいた瞬間に、観客は『書き手』の掌で踊らされていたことを知る。その瞬間に、周一郎の掌で踊らされていた滝に同化する。そして次には滝そのものとして、この物語を味わい……世界を掌にする感覚に放り込まれる、世界を動かす、ちっぽけな1人の道化師、という感覚に。  
人はみな、世界を動かす、ちっぽけな1人の人間だという真理。  
「……………」  
2人が落ち込んだ目眩のような感覚に山本は満足したのか、口調を切り替えた。  
「確かに、今のところは修一や他の役者にカバーされて何とか保ってるが、俺にはあいつが『滝』になれるとは思えんね」  
「あ」  
話が日常感覚に戻ってきて、ほっとしたのでろうと、高野が忙しく瞬きしつつ頷いて、小さく声を上げる。  
「何だ？」  
「いや…」  
修一はもうどこかへ行ってしまったらしい。さっきまで修一が居た場所へ、高野は視線を投げた。  
「修一さんが垣さんを『滝』に見立てて甘えているのは、たぶん本当でしょう……でも、それなら、ちょっとかわいそうですね、修一さん」  
「うん？」  
「だって、そんなふうには垣さんに嵌まってるのは、たぶん映画以外のことでも垣さんに『滝』でいてほしいということでしょう？」



けれど、垣さんはあくまで垣さんで『滝』じゃない」  
「…そうか、受け止められないわけだ、垣は」  
納得したように山根が頷いた。  
「見事な一人芝居ってわけか」  
「ショックでしょうね、それ知ったら」  
同情的な高野のことばに、山本は鼻で嗤う。  
「なあに、ちょっとは思い知ったときゃいいのさ、あの甘ちゃんは」  
突き放した。  
「おーい、そこの2人、来い！」  
「はいっ！」「はいよっ！」  
伊勢に山根と山本が呼ばれていくと、残された高野は手持ち無沙汰になった。何をしようか、とぼんやりしていたが、  
「高野さん」「っっ！」  
突然背後から呼ばれて慌てて振り返る。修一の顔を見つけて凍りつく。  
(聞かれていたか?)  
ひやりとしたが、いつも通りの口調で修一が訴えた。  
「オレンジジュース欲しいんだけど。垣さんの分も」  
「すぐに用意します！」  
「うん」  
慌てて準備しながら、修一を盗み見したが、特に変わった様子はない。  
(ま、聞かれてもいいか)  
コップにジュースを注ぎながら考えた。  
(修一さんが、恵まれている『甘ちゃん』なのは確かだし)  
「お待たせしました」  
「ありがとう」  
「……いいえ」  
にっこり笑ってコップを受け取り遠ざかる修一の後ろ姿を、高野は複雑な思いで見送った。

「はい、垣さん」  
「うん」  
修一の手からオレンジジュースのコップを受け取りながら、垣はじっと相手を見つめる。今朝はずいぶん元気そうに見える。昨日の疲れ切った様子とは大違いだ。  
(美形、なんだな)  
垣は溜め息をついた。自分ももう少し見目形が良ければ、デビューもうんと楽だっただろう、そして後々の今に至る映画撮りも

。(やっぱり、オレには役者は向いてないのかも知れない)  
ごくりとオレンジジュースを呑み下した。  
思えば、友樹夫妻に憧れて入った世界だった。いつか陽一のような温かみのある演技をしたい、雅子と同じ画面で共演してみたい、そう思って、たまたま、全くの幸運な偶然で飛び込んでしまった世界だった。  
だが、その世界には暗がりも落とし穴もあり、落ち込むと抜け出せないほど深い闇もあった。外側から見たきらびやかで明るい色彩は、内側に入るとくすんで輝きを失い、しかも輝きが失せた幾つかの要因は、自分の才能のなさからきていた。才能だけではない、最近では、そもそも演技に向き合う役者根性、役者の魂みたいなものが先天的に欠如しているような気がしてならない。  
(こいつだって15、いや14、だよな、まだ)  
隣に座ってごくごくオレンジジュースに喉を鳴らす修一を見る。  
それだけで、絵になっている。  
コップの含み方、指先の表情、僅かに眼を伏せて眩げな顔、カメラが回っていても、照明が彼を追わなくとも、いつも見られているという感覚があるのだろう、幕間でさえ無防備に崩れる気配はない。  
(母親は麻薬中毒で居所不明、父親は愛人といちゃつくのに忙しくて息子が九死に一生を得ても帰ってくることもない、仕事の加減で同世代の友達もほとんど作れなくて、回りは基本的に利害関係のある大人ばかり……でも、映画撮りの時には我が儘言わないし、一所懸命だし、そんなしんどいことなんて、これっぽっちも見せないよな)  
垣が15の時はどうしていただろう。地元の中学に通って雑誌を眺めて美人アイドルに妄想を膨らませたり、メディアがあるところにはあると囁く抱え切れない大金を湯水のように使う夢とか、些細なことでも家族や友人と大げんかして拗ねる、そんなことで一杯一杯だった気がする。  
未来がどうなるかなんて、心配はしてたけれど深刻にはならなかった。いずれどうにか何とかになって、成功するに違いないと思っていた、単純に。  
(こいつは、それだけ……役者が好き、だってことだよな)  
しんどいことも辛いことも、映画に戻れば癒されるのだろう。不安も恐怖も、演技に入れば、消し去れるのだろう。  
(ほんとにいろいろゴタゴタあって……それでもこうやって1人で役者やってるんだよな、いくら佐野さんと高野さんがついてるとはいえ)

それが本質なのかも知れない。役者をやり続けられる素質というものかも知れない。  
『いつまでそこにいるつもりかは知らないが』  
数日前に田舎の親から来ていた手紙を思い出す。料金未払いで度々不通になる携帯より、確実にしっかり届く方法というわけだ。

。『映画の一本二本出たところで、今の時代じゃ幻みたいなものだ』  
慌ただしく過ぎ去る日々の中、数十本単位で公開される映画、それどころか、もっと大量に流れるネット画像に紛れて、これほど手間暇かけて作ったものも数秒で忘れ去られる。  
『記憶に残ることさえ難しい、もう一度観てもらえるなんて、それこそ奇跡にも近いことだよ』  
割に合わない。意味がない。いずれ捨て去られるのだ、記憶の彼方へ。そんなものに人生を費やして何が残る。  
『そろそろ、先を考えて欲しい』  
手紙は繰り返し訴えていた。  
もう十分だろう。夢の切れ端は叶った、それで十分幸せだと考えなくちゃいけない。ほとんどの人間が、その切れ端が掌を掠めることもなく一生を終えていくのだから。  
『帰っておいで』  
両親は田舎で小さな工場をやっていた。従業員は2人。大企業の下請けの下請けのまた下請けみたいなものだけど、父親の腕が良くて、その部品は父親の工場でしか仕上がらなかったから仕事は途切れなかった。  
『もっと地道でしっかりと地に足がついた仕事だ大事だよ』  
「ふう…」  
修一が満足したような吐息を重ねた。吐息一つにも色気があるよな、と考えてうんざりした。  
(帰るか)  
オレンジジュースの最後の一口を飲み干した。  
陽一という理想は既に踏み荒らされていた。映画への情熱も、1作毎に自分の限界を思い知らされて冷え込むばかりだ。修一でさえ、この3作目にはしごきにしごかれている。垣など涙もひっかけてもらえてない。  
『出会いはいつでも  
半分は運命の偶然

残りは神様のいたずらさ…』  
休憩でつけられたラジオが『ロード・オン・ロード』を流している。  
(偶然なのかもしれない)  
ぐしゃりと紙コップを握り潰した。  
(ほんのちょっとした幸運が、神様のいたずらで3作も保ったのかも知れない……けど、そろそろ限界なんだろうな)  
苦いものが口の中に湧き上がる。あっさり吐き捨てて、次の目標を探しに行ければ、どれほど楽だろう。何に挑んでも自分の限界を知らされるのは辛い、特に自分の内側の声が告げてくるときは一層。  
静かに息を吸い、目を閉じる。胸一杯になった空気を一気に吐き出し、ぱっと目を開けた。  
見慣れたロケ風景が、妙に空々しく遠い世界に見えた。  
(よし)  
心の中で頷いた。  
(これを最後にしよう)  
思い切りは悪くない、と昔から言われた。家を離れる時も泣き出す母親を振り切った。  
「垣さん？」  
「ん？」  
話しかけられて振り返る。  
「この次の作品、知ってる？」  
「…いや」  
胸中を見透かされた気がしてどきりとする。こちらを見返す修一の、明るく輝く瞳にそっと首を振る。  
「伊勢監督が次にやるのをさっき言ってたんだよ。シリーズ4作目、『古城物語』をやるんだって。まあ、まず今回の当たるかどうかってことだけど」  
「ああ、そうだな」  
「……？」  
くすくす笑った修一が訝しそうに小首を傾げた。思い直したのだろう、からかうように笑い、  
「他人事みたいな言い方だな」  
「オレ、さ」  
一瞬迷ったが良い機会だとも思った。  
「この作品で降りる」  
「え…」  
笑っていた修一の顔がはっきりと強張った。  
「お、りる？」  
「ああ」  
「滝、を？」  
「ああ」  
ことばを失ってしまって固まった修一に、ちょっと苦笑して見せる。  
「あのさ、ちょっと前から、こう、わかんなくなってきたんだ」  
思わず知らず、溜め息が零れた。  
「本当に映画が好きなのか…演じることが好きなのか……役者、ってのが好きなのか。……お前は好きだろ？」  
「う…ん」  
ぎこちなく修一が頷く。  
「このあたりがオレの限界みたいだ。先が見えて来たよ」  
「そんなことないよ！」  
「お前にはわからんかも知れんがな」  
突き放した物言いのニュアンスを修一は確実に察した。  
「僕が……友樹…修一だから…？」  
「……」  
「…………おとうさんの……こと…とか…？」  
見る見る落ち込んでくる表情、それさえも様になっている気がする。  
生まれついで役者。  
「…それも、少し、ある」  
「……………」  
沈黙は重く長く引きずった。  
「…………まあ、次の滝役は別の人間になるってことだ」  
そして、友樹修一の共演者なら、きっと星の数以上に志望者が見つかるだろう。  
「……………」  
「おい、そう沈むなって。お前は大丈夫だよ、降ろされやしないさ」  
ばん、と肩を叩いて笑ってやった。だが、修一は笑わない。大きな瞳を見開いて、じっと垣を見返している。  
気まづくなった、と咳払いしかけた垣を、折よく監督が呼んだ。  
「おい、垣！」  
「はいっ！」  
これ幸いと立ち上がって垣は走り出す。  
何となく、後ろは振り返れなかった。

「な…るほど」  
垣は食卓に出された皿の上の目玉焼きを見ながら重々しく頷いて見せた。  
「確かにちょっとしたものだ」  
「垣さん！」  
むっとしてフライパンを持ったまま、振り返って修一は垣を睨みつける。慣れない緑のエプロンはごそごそと腹回りで余る気がする。  
「だって、高野さんがいると思って…」  
もそもそとぼやいて、他人任せで招待した自分が少しみっともなく、くると背中を向けてしまった。  
「いや、オレのいつもの夕飯に比べりゃ立派なものだ、うん」  
垣が慌てて言い繕った。  
仕事が終わった後、修一はちょっとした夕食なら家で用意出来るよ、と垣を誘った。部屋に戻っても買い置きラーメンぐらいしかない、それも宮田が食べ切ってしまうていなければ、ということだが、とぼやいた垣は二つ返事で応じてくれた。  
けれど、高野は急用だとかで垣と修一をマンションに残して帰ってしまった。残された2人で顔を見合わせ、『何か作ろうか』と垣が言い『あ、じゃあ僕が作るよ、垣さん、勝手がわからないでしょ』と修一が受けて、現在に至る。  
「ちょっと何か手伝おうか、オレだって少しぐらいは……うえ」  
言いかけた垣が妙な声を出して振り返る。  
「？」  
「いや……その…あんまりタチの良くない冗談を思い出した」  
唸るような声で垣が続けた。  
「何？」

「いや、その……オレが料理が出来ると言ったら、宮田がいきなり『結婚しよう』と言い出して」  
「うん？」  
「『冗談はよせ』と喚いたら、『冗談だよ』って答えたんだが」  
うぐぐ、と垣は妙な唸り声を出した。  
「見たら、しっかり人の手を握ってやがるんだ」  
「マジ？」  
「マジ」  
弱り切った垣の顔に問いかける。  
「宮田さんって、そっちの人？」  
「いや」  
何でもいいんじゃないかね、自分の利益になれば。  
ぼそりと呟いた声が本当にしみじみして思わず吹き出した。  
「ひどいや」「ひでえやつだよ」  
重なった声を耳に嬉しく聞きながら、目玉焼きを皿に移す。垣はハムを悩んだあげくに厚めに切り分け、その横へ付け合わせた。

。「笑い事じゃねえって！ マジ、コンクリート詰めにして北極海へ捨ててやろうかと思ったぐらいだ、こっちは」  
修一は笑い声で応じる。垣が楽しそうなのが嬉しい。  
「昔っから、本気と冗談の区別がつかないんだあいつは、ほんと」  
ぶつぶつ呟き続ける垣をちらりと見る。  
幸福だ。嬉しい。楽しい。  
胸の中に広がった甘い感覚を味わえば味わうほど、冷えて醒めた思考が立ち上がってくるのを意識した。  
この時間を失いたくない。どんなにお互いになして話しても一緒に居る垣と宮田のように、垣との繋がりを保ちたい。  
どうして垣は急に映画を降りると言い出したのだろう。何が原因なのだろう。何を解決すれば、垣は映画に踏みとどまるの  
らう。  
どうしたら垣を引き止められるのだろう。  
食事の席を整えてお互いに向き合って座る。豪勢とは言い難い食卓だけれど、誰かと一緒に食べる食事がこれほどおいしい。  
手に入らなかった今までなら始めからないものと諦められる、けれど、今は。  
「垣さん？」  
「ん？」  
食事を続けながら、修一は忙しく頭を働かせて時間を稼ごうとする。  
「ご飯済んだら、脚本の読み合わせ手伝ってよ。今日のところ、監督もう1回撮るって言ってたよね？ けど、僕まだよくわから  
なくて」  
「ああ、あの直樹と滝のところな。オレはあれでいいと思ったんだが」  
「うん、でもいいから手伝ってよ」「ああ」  
なら、さっさと片付けちまうか、と急いで食事を食べ始めた垣に、修一はちょっと戸惑った。長引かせようと思った時間が折り  
畳まれて短くなった気がして不安になる。  
「どこでやる？」  
「……こっち」  
皿を流しに出して2人はソファに戻った。『と』が相変わらずソファの端に鎮座している。暖房が効いている室内はごろ寝し  
ても風邪を引いたりしない。  
ふと脳裏に過ぎたこの前の夜を修一は思い出す、冷えた体で固まって眠ったと思ったのに、朝には全身柔らかく温かった。暖  
房のほとんどのない部屋で、垣の側にいるだけで温かった。  
「ここ、垣さん」  
「ああ、シーン203か」  
脚本を覗き込む垣の横顔に再び考え込む。  
どうしたら垣の決心を変えられるだろう。修一の相手役、滝として、何をすれば、この先もずっと映画に引き止められるら  
う。

。「えーと、滝の方からか」  
シーン203、周一郎の直樹と滝が暴走族に追われ街中を逃げ回る場面だ。カットは滝が殴られのびかけるところから始まっ  
ている。  
「、ぐえっ！」「滝さん！」  
直樹は振り返る。手近の男を叩きのめして滝に走り寄り、呼びかける。  
「こっちだ、滝さん！」「お、おう…」  
よろよろと追いつがる滝、走る2人の前後にバイクの爆音が響く。細い小路与で隙をうかがう直樹は、ふっと滝に目を止め、皮肉  
な調子で尋ねる。  
「しかし、あんたもおかしな人だな」  
薄い笑みを投げかける。  
「その、周一郎、って他人だろ？ 赤の他人のために、何でこんなことをやってるんだ？」  
嘲りの裏には周一郎の不安がある。滝が側に居てくれるのは何のためか。金か地位か、それとも他の利潤のためか。  
「あんたと周一郎はどう繋がってるんだ？」  
込めた願いを悟られないように、口調は嘲笑だ。  
「…わからん」  
滝は軽く唇を噛んで答える。  
「わからんが……こう…」  
戸惑い、何かを語ろうとして、その何かを見失った顔で肩を竦め、  
「どっか……繋がっているんだ」  
言い切ることは静かで確信に満ちている。  
それを、垣はそのまま演じる、まるで、そういう繋がりを知っているように。  
(垣さん…)  
人は、知らないものは演じられない。役者の技量が経験だと言われる所以だ。自分の人生に出逢っていないものは、フィクシ  
ョンからでも学び取り、疑似体験でも体を感じ取るしかない。想像力が必要なのは、演じ方のためじゃない、それが何を意味して  
いるのかを理解するためだ。  
(垣さんは知っている)  
ことばにならない、けれど確かな、人と人との繋がりを。  
(僕は、知らない)  
だからこんなに、信頼し合う演技の中でも不安になる。  
ふいと一瞬、自分が修一の表情に戻ってしまったと気づいて、はっとした。  
「よし…」  
吹っ切るように直樹の台詞に戻る。  
「こっちだ」  
向きを変えて直樹は走り、小路を出ようとしたとたんに、体すれすれを掠めたバイクに片腕を引っかけられて身を退き、声を上  
げる。  
「あっ…」「大丈夫か！」  
滝の声に笑みを押し上げるが、手からは血が滴り始めている。  
「ほら言わんこっちゃない！」

滝がぐいと直樹の腕を掴む。ポケットから出したハンカチで傷をぎゅっと縛ってくれたが、じわじわと滲み続ける血に苛立った様子で、

「ほんっとに、顔が似てると意地っ張りなところも似るのかね！」

ぼやいて、近くの生ゴミバケツを両手に小路の端へ歩いていく。

考えてみればわかる、この状況で直樹をとっさに庇い、冷静に応急手当をし、周一郎のことを考えつつ直樹を気遣い、加えて反撃に出ようとするような男が、どうして間抜けでお人好しなものか。

けれど、観客はごまかされる、この時注目されるのは、2人の微妙な気配のやりとりと、それが意味する関係性だから。最後まで見切った観客もまた、ここで注目するのは直樹の仮面を被った周一郎がどのように振舞うか、いや、この2人しかいないぎりぎりの状況で、周一郎が、種明かしをしたいと揺らぐ心をどう抱えているかだから。

言わば、ここで修一は全ての視線を自分に魅きつけなくてはならない、滝の隠された能力に気づかせないために。

けれど、演じる『直樹』は滝側のファンには疎まれる、滝を嘲る役柄だから。周一郎のファンにも煙たがられる、周一郎と滝の繋がりに入ってくるから。観客の誰もが『直樹』の味方ではないけれど、その目を魅きつけなくてはならない。

だから難しい。

だからよくわからなくなる、演じ方が。

けれど、今。

(このとき)

ふっと修一は考えた。

(周一郎はどんなに嬉しかっただろう……滝があればこれ言いながらも、側に居てくれる、そうわかって)

どんな姿であっても、どんなに滝に歯向かって、滝は周一郎の命を無自覚なままでも護ってくれると悟ったはずだ。

(僕は…)

『…そうか、受け止められないわけだ、垣は』

耳に飛び込んできた山根のことば。続くスタッフの会話。

『見事な一人芝居ってわけか』『ショックでしょうね、それ知ったら』『なあに、ちょっとは思い知っときゃいいのさ、あの甘ちゃん』

(嘘だ)

スタッフが何と思おうと構わない。けれど、そんなことはきっと嘘だ。

(だって、ちゃんと泊めてくれた)

行き場がなくなって糸が千切れた風船のように、傷みにパンパンになって漂っていた修一を受け止めてくれた。

(でも、なら、どうして辞めるなんて…？ 僕が一人ぼっちになったの、知ってるのに?)

「友樹君？」

「あ」

呼びかけられて我に返る。脚本読みが止まってしまっているのに瞬きする。

「どうした？ 熱でもあるのか？」

垣が覗き込んでくる、心配そうに。嬉しい。失いたくない。

「う、ううん、ただ」

ことばを切る。垣の覗き込みが深くなる。

「ただ？」

「どうして…垣さん…辞めるなんて…」

声に感いを載せる。このラインで行けるはずだと無意識に計算している。

「そのことか」

垣の声に苦みが混じった。それまでの『友達』の距離から、ふいに『他人』の距離に戻ったのを感じる。離れた、と感じ取る。

「だから昼間言ったろ？ 自分に限界を感じたからって」

うっとうしそうな口調は滝にはない。垣のもの、垣だけの匂い。周一郎が得たものじゃない、修一が得たもの。

「でも、そんなことないよ！」

慌てた声を張り上げる。

「垣さんほど滝役に合った人、見つからないよ！」

無邪気にまっすぐ、垣の才能を信じる声を差し出す。だが、

「ま、名子役のお前が選んだんだしな」

(バレてる！)

修一はぎくりと体を震わせた。意識しているのかしていないのか、垣は修一が『演じている』と言い放っている。周一郎ではなく、『友樹修一』を今も演じている、と。

「眼鏡違いだったのを認めるのは嫌だろうが、オレはどうも役者には向いてないらしい」

(そうじゃない)

修一は気づいた。垣は本当に『役者』なのだ。

だから、相手がほんの少しでも『演じている』ならば、すぐに自分も役からずり落ちてしまう。いや、相手の姿に応じてしまうというか。だから、垣が『滝』になり切れないのは、修一が『周一郎』に入り切れなかったからだ。

それを伊勢は分っていた。確かに始めは垣を叱咤していたけれど、途中から切っ先が修一に向けたのは、垣の『ずれ』が修一の役作りの『ずれ』によると気づいたからだ。

「それに芸能界(ここ)も、もう一つオレの性に合わないし…」

それはそうだろう、ここまでこちらの『役』に敏感に反応されては、周囲はとんでもなく消耗するに違いない。通行人1人をやっても、主人公が場面にふさわしくない動きをしていれば、あれ、と言う気配を『演じて』しまう。『現実の通行人』としては『正しい反応』でも、『演技の通行人』は『通り過ぎる役柄』を要求されていることがある、その違和感は周囲に別の影響を与えてしまう。

つまり、それは。

(僕が『友樹修一』だったから)

垣は『相手役』としてふさわしく振舞えたということか。

(何もない、ただの『僕』なら)

今のように他人事として距離を置いていたということだ。

「陽一さん達のこと……残念だったし……知りたくなかった、かな」

「おとうさん…？」

「ああ、陽一さん達に憧れて、ここに入ったこともあるしな」

に、と笑う垣の顔を呆然と眺めた。

(そうか。僕は『友樹陽一』の息子の、『友樹修一』だから)

親の七光り、そんなことばには慣れっこになっている。いつでもどこでも実力も努力も足りない奴が最後の言い訳に必ず持ち出してくる馬鹿馬鹿しいことばだ。

そこから逃れられないのは知っている。けれど、背負って跳ね返し続けてきたと思っていた。この映画でも、父親の影を斬り払いながら走ってきたつもりだった。

けれどそれが、こんなところで持ち出されてくるとは。

(『修一』には興味がないって…?)

ただの『修一』でしかなかったなら、あの雨の中でも放っておかれたのだろうか。あのとき母親のことを口にしたら『友樹修一』の仮面を被ることができ、だからこそ垣は助けてくれて、あの温かさを提供してくれたのだろうか。

再び鮮烈に甦ってくるスタッフのことば、『垣は滝になり切れない』……垣は困っている他人に手を差し伸べずにいられない人間ではない。

『友樹修一』は垣の『相手役』だが、『修一』は面倒事を持ち込んでくる赤の他人でしか、ない。

「……うか」

(それでも)  
粉々に砕かれた願いの欠片を見下ろしながら、修一は考える。  
(それでも、側に、居てくれるなら)  
演じればいい、『友樹修一』を。  
そんなことは、慣れている。  
「それに…」  
垣がぼやくような口調で呟いた。  
「あんまりいい役も回ってこないし、な」  
弾かれたように修一は顔を上げた。  
垣に『いい役』が回ってこないのは、穿った見方をすれば、垣が『役』に反応し過ぎるからだ。名声ばかり高く演じる力のない役者は、その反応に自分の無能をあぶり出されるとわかっているからだ。  
けれど、それを『わかっている』修一ならば、本当の『役者』に引き合わせる事ができる。垣の才能を引き出し伸ばし引き上げる『役者』の世界に垣を導ける。  
修一ならば。  
修一ならば。  
「それじゃ僕が頼んであげるよ！ きつともっといい役がくるよ。ギャラだってもっと上がる。僕が頼めば、垣さん一人ぐらいどうにかなるよ！」  
そうすれば、周一郎が終っても修一はまた垣と組めるかも知れない、違う作品、違う役柄で。そうすれば垣だって『ここ』に長く留まってくれるかも知れない。  
(ずっと一緒にやれる)  
湧き上がる喜びに忘れ切っていた、垣という男の在り方を。  
「友樹君!!」  
いきなり厳しい声が響き渡って息を呑んだ。垣は難しい顔で修一を睨み、手にしていた脚本を叩き付けるようにテーブルに置いて立ち上がる。  
「そんなことを言うなんて、見損なったな」  
冷やかに言い捨てられて、修一はぼかんとした。  
「垣…」  
「そりゃ、芸能界(ここ)へ来ていろんなことにごっかりしたけど、オレはお前に仕事を恵んでもらうほど落ちぶれたつもりはない」  
怒鳴ろうとするのをかろうじて押さえつけたような声音で投げつけ、ジャケットを羽織ってそのまますたと玄関に向かう。  
出て行く寸前に、突然の動きに応じ切れない修一を振り返り、立ち止まった。  
「オレ、お前は本当に『スター』にふさわしいと思ってた。ごたごたいろいろあっても1人で頑張ってたて凄いな奴だって。……お前となら、たとえ芸能界(ここ)でもいい友達になれると思ったのに……残念だ」  
言い放つと、もう修一の顔を見ないままに出ていく。バン、と荒々しく閉められたドアを見送った修一は、しばらく立ち竦んだ後、のろのろと『ると』を振り向いた。  
「『ると』…？」  
ソファの上に居る『ると』も修一をじっと見返す。  
「垣さんを怒らせちゃった…」  
頭の片隅がじんじんと痺れて現実感がない。部屋が急に冷え込んできたように感じる。ゆっくりと部屋の中を見回すが、誰もどこにもいない。  
気がつく、修一は部屋の中央で脚本を手にぼんやりと座り込んでいた。  
「……『ると』」  
ぱらぱらと脚本を捲る。  
「……僕と…いい友達になれると思ったって……」  
ぱらぱら、ぱらぱら。  
垣はこの台詞をどう読んでいただろう。抑揚はどうだっただろう。口調はどうだっただろう。強弱はどうだっただろう。呼吸はどうだっただろう。  
思い出せない、何もかも、まるで一気に霧に呑み込まれてしまったようだ。  
「……なのに……ぼく……馬鹿なこと……言って…」  
ぼたん、と重く柔らかい音がして、脚本に落ちた水滴を修一は訝しく眺めた。ごしごしと服の袖で脚本を拭く。なのに、ぼた、と次の水滴が落ちてきて見る見る数を増す。拭くのが間に合わない。  
「ああ…そっか…」  
ぼんやり呟いた。  
「『ると』……僕、泣いてるみたいだけど……どうして…こんなことで…涙が出……っく」  
しゃくりあげかけてぎょっとした。  
「別に…何でもない……けんか…っく…だろ……？ 別に…泣…ほどの……こと……ひっ」  
今度はあからさまに息を引いてしまい、混乱して口を嚙む。  
こんな演技はあったらどうか。  
友達になる前の友達が冷たいことばを投げつけて出ていった、そんな場面で、残された男が、それも15に近い男が泣きじゃくるようなことが？  
「そんな……のっ……しら……なっ……く」  
溢れ出す涙に何が何だかわからなくなってきて、修一は膝を抱えて顔を伏せ体を固く抱き締めた。  
「な…んで……っ？ …なん……で…」  
なぜ垣は出て行ったのだろう。  
なぜ修一はあんなことを言ったのだろう。  
なぜまた1人になるのだろう。  
喉が痛くて体が苦しくて引き裂かれそうな気がして、なのに身動きできなくて。  
(誰か、助けて)  
修一は初めて嗚咽というものを知った。

「ええい、つまらんっ!!」  
喚いて力任せに蹴った相手はコンクリートの電柱、片足を抱えて跳ね回りながら垣はなおも苛立って怒鳴る。  
「くっっそおっ!!」  
(あいつ、あんな阿呆だったのか！)  
修一の役者根性に少しずつ感心し始めていた。年下だろうと生意気だろうと、口だけのことはある、言うだけのことはある。そう考えていた自分にも腹が立った。あちらこちらのゴミ箱を次々と蹴り倒して憂さ晴らしをしてから、安アパートに戻ってくる頃には、激怒もかなり醒めていた。  
(ちょっと……言い過ぎたかな)  
ドアを開けようとして動きを止める。ぼかんと自分を見上げていた、妙に幼い表情の修一が脳裏に甦る。  
(あそこまで言うこと、なかったよな)  
相手はほんの子どもなんだし。  
自分の言ったことばの意味もよくわかってなかったかも知れないし。  
(ことばの、意味)

『それじゃ僕が頼んであげるよ！ きつともっといい役がくるよ。ギャラだってもっと上がる。僕が頼めば、垣さん一人ぐらいどうにかなるよ！』

「っ」  
ぶるぶると思わず首を振った。  
(そんなことはない！ やっぱり怒っていいことだったんだ！)

でもさ。  
胸の奥でぼそりと背中を向けていた白い羽根の持ち主が、肩越しに振り向く。  
放って帰らなくてよかったよな？  
(いや、だって！)  
あの子、あれから1人だぞ。  
(それがどうした？ 今までだってあいつは1人だったじゃないか)  
へええ。  
振り向いた相手は肩を竦める。  
あれだけ優しくしといて今更突き放そうって言うの。  
(突き放す突き放さないってことじゃないだろ。ああいうことは言うべきじゃないだよ！)

「だな！」  
大きく頷いて垣はドアを開けた。例によって部屋の中は真っ暗だ。

(宮田！)  
垣はかっと目を見開いた。用心に用心を重ねてスイッチへ手を伸ばす。一呼吸おいてスイッチを押し、『攻撃』を予想して一歩飛び退く。が、今度は部屋に誰もいない。

「ふん」  
ゆっくり警戒しつつ狭い部屋を見渡す。  
「雅子さんでも助けに行ってるんだな」  
ほっと溜め息をついて時間を確認した。22時ちょっと過ぎだ。  
(あいつ、夕飯のとき、嬉しそうだったな)  
あんなにはしゃぐなんて思わなかった。無防備な笑顔が年より幼く見えて幸福そうで、それが垣にとっても嬉しかった……。

「ちがうちがう！」  
はっと我に返って首を振る。  
「気にすることない！ オレがいなくても佐野さんだっているんだし！」  
半分は自分への言い聞かせ、どしどしとわざと足音をたてて、せんべい布団を出そうと襖を引き開けた、とたん、

「ぐおーっ！」「っ！」  
いきなり響き渡ったいびきに飛び退いて滑ってひっくり返った。

「なんなんだ!!」  
叫びながら、押し入れの中で爆睡している男を見つける。

「宮田っ?!」  
「うん？」  
もぞもぞと動いた相手は眩しそうに瞬きし、ゆっくりと目を開けた。  
「よ」「よ、じゃない！ よ、じゃ！ なんてこんなとこに寝てる?!」

「なんであって」  
垣の抗議に相手は不思議そうに首を傾げる。  
「眠くなったから？」  
「だからって、なぜ『押し入れ』で寝るんだ！」  
「話せば長くなるが」  
「短くしろ！」  
「条件反射」  
「あん？」

垣は目をぱちくりさせた。  
「わからんが…」  
「だろ？ つまりだな」  
えへん、と宮田は咳き込む。  
「俺の母親というのが布団嫌いで」  
「まさか……家で布団を敷かなくて、けれどお前が布団が好きで、それでこっそり押し入れで寝る癖がついたとか…」  
「いやあ、よくわかってるじゃない」  
ひらひらと宮田は手を振ってみせた。

「あーのーなー…」  
「それより、かおる？」  
「…止せって言ってるだろうが！」  
「お前、友樹君泣かしてきただろ」  
「へ？」

泣かしてきた、が啼かしてきた、に聞こえたのは、宮田の人徳いやいや妄想癖に毒されているか。  
それでも僅かなりとも『泣かせた』覚えがある垣は一瞬たじろいだ。それを素早く見て取った宮田が、

「やっぱりな！」  
両目をぎらりと光らせる。  
「それでどうやって啼かせたんだ、無理矢理迫ったのか押し倒したのか、嫌がる手足を縛りつけ、もがく体を押さえつけ、やっぱりそうかそうなんだな！」

「勝手につくるな盛り上がるな！」  
どこまでもエスカレートしていきそうな相手をののしる。  
「お前の妄想に引きずり込むな！」  
「いや啼いてるに違いない、俺の直感とサーモンピンクの薔薇の花束がそう言ってる、それで嫌がるのを無理に押し倒してさせたんだらう、えっ、ネタは上がってるんだ白状しろ！」  
「ネタ？」「やっぱりネタのか！ ネテ容赦なくさせたんだらう！」「何をだ！」「トランプ!!」

「……」  
垣は黙った。宮田も黙った。さすがに外したと思っただらう。

「宮田……まぎらわしいことを言うな」  
ぐったりして話を元に戻そうとしたが、飢えた野獣にちょうどいい大きさの餌を投げ与えてしまったらしい。

「何っ、まぎらわしいことをしたのか！」  
喜々として押し入れ上段に座り直し、時代劇のお白州裁きに望む奉行のごとく、うんうんと大きく頷きつつ、

「やっぱりそうだな、きりきり白状してしまえ、お上にも慈悲はある！」  
「……」  
再びの沈黙。今回は宮田はわくわくした顔をしたまま垣を凝視し続けている。どうする？ どうする？ どう返してくる？ さあ待つ

てるぞ。  
(こいつはもう…)  
はあああ。垣は深く溜め息をついた。  
どうしよう、こんなのが自国の警察だなんて。この国の未来はひょっとしてとんでもなく昏迷の淵を覗き込んでいるんじゃないかならうか。

「お前さ」  
「うむっ」  
「ひょっとして、いつも『むこう』でもそうやって尋問してるのか？」  
「それがどうした？」  
「いやさ…」  
たとえば周囲の状況証拠やら何やらから、99%シロだったとしても、宮田にかかれば100%まではいかなくとも再審ぐらいにはなってしまうのではないだろうか。  
そういう人間と切れることのない腐れ縁的な友達だということは、災難なのか、それともまれに見る幸運なのか。  
「安心しろ」  
垣の逡巡を見て取ったのだろう、宮田は大きく胸を張った。  
「俺は身内には甘い」  
余計いかんだろ、それ。  
ツッコミ必須なのをひとまず横へ置いて、垣は話を戻した。  
「それで、今日は何の用だ」  
「あ、そうだ」  
よししょ、と宮田はようやく押し入れから降りてきた。  
「友樹君の様子が知りたいんだ」  
そこかい！  
「…元気だよ」  
「実は母親の方は保護したんだが」  
垣の返答におかまいなく、宮田は案じ顔で続ける。  
「彼女が余計なことを組織の方に訴えててね」  
どうやら真面目な路線で話が続く様子なのに、垣は黙る。  
「息子、つまり修一君に組織の内情を詳細に書いたデータを持たせていると」  
「は？」  
あいつはそんなこと何も知らないぞ？  
垣の表情から答えを読み取った宮田はこくこくと頷いた。  
「その通り。自分が殺されないための方便だ。だが『あっち』はそう思わない」  
「ちょっと待て」  
いきなりきな臭くなった内容に垣は顔をしかめた。  
「あいつが危ないじゃないか！」  
「そ」  
にいと嬉しそうに宮田が笑う。どこか肉食獣を想像したのはあながち間違いでもあるまい。  
「だから明日から俺がガードするのっ」  
うふっ。  
含み笑いが聞こえたのは垣の妄想かもしれないが一気に立った鳥肌は本物だった。

## 7.シーン307

「ん～」  
高野は唸りながら、修一と垣の演技を首を傾げて眺めた。  
「あ…ん…？」  
隣に並んだ山本が同じように訝しげな声を上げるのに振り返る。  
「何だよ、おい、高野」  
「ええ、そうなんです」  
山本が言わんとすることを察して頷く。  
「変でしょ」  
「変って」  
おうむ返しに繰り返した山本は、見逃したのを悔しがるような表情で修一の演技に目を戻す。  
「…そういう問題かよ、」  
「よーしカット！」  
反論しようとする声に被さるように、監督が満足げな声を上げた。  
「うまい、うまいぞ、友樹君！ どうしたんだ、急に良くなったじゃないか！」  
今にも跳ね回り踊り出しそうな気配で、両手を叩きながら続けた。  
「そう、そうだ、そこは抑えた激情が欲しいんだ！ 自分への問いかけも全て呑み込んだ静けさが欲しいんだ、ぱっちりじゃないか！」  
大絶賛に振り返った修一はこくりと頷いた。さすがに息を切らせていたが、そのまま脚本を取り上げると垣の側へ言って紙面を指差し、何かを話しかけている。  
「おい」  
山本の目が丸くなった。言いたいことは十分にわかる、そこをあえて尋ねてみる。  
「…何をやってると思います、修一さん」  
「まさか…今のシーンの」  
「そ、反省と見直し、次のシーンの打ち合わせなんです」  
「マジかよ」  
「マジです」  
高野は大きく頷いた。  
「ここ2、3日前から、ずっとああなんですよ、修一さん。何でかわかんないけど演るのに必死なんですよ」  
「5年近く一緒にやってるけど、あんなの見るの初めてだよ」  
「こっちは初めてです、飲み物持ってって断られたの」  
「断ったあ？」  
素っ頓狂な声を上げる山本に頷く。未だに自分でも信じられないぐらいだ。  
「汗かいてるからと思って、オレンジジュース持って行ったら『後で』って。で、そのまま脚本（ホン）と演技（モノ）の打ち合わせに没頭しちゃって」  
「どうなってるんだ、友樹修一」  
「モノ見てたら、口閉まなくなりましてよ。修一さん、やっぱり天才だ」  
高野はごくんと唾を呑んだ。  
「さっきの場面なんか、凄いの一言に尽きますから」  
「さっきの場面って……あの、直樹が周一郎の『まね』をするところか？」  
「そうです」  
ちらりと高野は修一を見やる。相手はまだ打ち合わせの真っ最中で、脇目も振らずと言った顔だ。  
「ほんの少し周一郎の本音が見えて、それでも直樹がやってるんだなってわかるようなわからないような微妙なところ。もう無茶苦茶だった。あれ以上演れる人はいないんじゃないですか」  
自分が手放して賛美しているのはわかっている。それが照れくさい気もするから口調が幼いとも思っている。だがそれでも鳥肌が立つようなあの感覚を思い起こすと、なおも口調が舞い上がる。  
「そんなにか」  
「ことばなんて足りませんよ。ほら、直樹が俺に平手打ちを喰らうでしょ？ 謝る俺に自分の正体を言いたいような、もっと俺を試したいような複雑な表情になったかと思うと、次の瞬間『ごく当たり前に』平手打ち喰らったことに怒るでしょ」  
それを『そのまま』演ったんですよ。  
「そのまま…？」  
訝る声も咎める気にならない。この目でみなくては信じられないだろう。二重三重に覆われた演技の中から、一番底の顔がちらりと見える。けれど、それは役者の顔ではなくて、それでも『演じている人物の顔』でなくてはならない。  
「偶然じゃないのか」  
「繰り返し演れましたよ」  
監督も信じられなかったからだろう、もう1回、もう1回と演技を繰り返させたのに。  
「最後まで、周一郎が被った直樹の顔がずれかける、ところまでしか剥けませんでした」  
つまりそれは、修一が完全に『周一郎』をものにしていう証明だ。  
「ああもう、ことばじゃ無理だ。ラッシュ見て下さい。冴え過ぎてますから」  
ベタ褒めしながら高野は自分がびりびりしてくるのに気づいている。  
監督も警戒していた。このテンションはどこまで保つのか。崩れるのは1時間後か、それとも数分先なのか。  
撮れる間に撮っておきたいと苛立つ監督の心情を、修一は、これまた14、5で見せられるとは思えない落ち着きで宥めたものだ。

『大丈夫です監督。ずっと演れます、このレベルで。だから焦らないで僕に時間を下さい。このレベルを保ちたいなら、垣さんとじっくり詰めてかなくちゃならない』  
話題の中心の修一は、まだ垣と話し込んでいる。監督ももう急かすような気配はない。1つの才能が今熟していこうとしているのを息を詰めて見守っている。  
修一と垣のやり取りも以前のもの一変していた。今までのように垣の歡心を買いたいがためのおしゃべりではない。難しい表情で繰り返し脚本を読み合わせ、首を振ったり、指差して何かを尋ねたりしている。時々ふっと前のようにじゃれつきたような顔になるが、そのとたん視界を曇らせて目を逸らせ、きゅっと唇を引き締めて元通りに黙々と仕事に戻る。  
「…何があったのかな」  
「さあ……」  
山本に尋ねられて高野は戸惑った。何が。修一の変化は単に成長というだけではないのか。  
「でも、いいモノは出来そうですよ。友樹修一、渾身の一作になるんじゃないですか」  
「違うない……何だ、あいつ？」  
苦笑した山本は、ふらふらと歩く現場に不似合いな男に顔をしかめた。  
「ああ」  
視線で示されて、高野も苦笑いする。  
「修一さんのガードです。宮田、とか言っていましたけど」  
「あんなのがガードになるのかね」  
「なるでしょう、何せ国家公務員だし……あ、午前のアトラクションだ」



シーン307ですね、と高野は山本を振り向いた。  
「まあ見て下さい、修一さん。たいしたものですから」  
「よし、見させてもらうかな」  
「ここも結構微妙なところだよなと頷きつつ、山本が構えた。  
綾野邸から滝と周一郎が脱出するところだ。手配りされた警官隊は映画より減らして数人にまとめられ、逃げ出そうとする裏口に向かって走り出す周一郎と滝、背後から綾野の追手が迫る。  
『周一郎！』  
滝が周一郎を押して走り出す。映画だと次第に速度を上げるテンポの速い曲が鳴り響いているはずだ。綾野の配下が銃を構える。察した滝が横へ飛び体を浮かせながら叫ぶ。  
『危ない、周一郎！』  
銃声が響いて、滝の体が前方に転がる。  
『志郎！』  
お由宇の声が響く中、周一郎がゆっくり振り返る。訝しげな表情が驚愕に、やがてショックを伴った恐怖へと移り変わっていく顔を見る青さめる。映画なら画像処理だろうと苦笑するところだが、目の前で変わっていく顔色は『芝居』であるだけに空恐ろしい。体を捻って倒れた滝を振り返り、ぼんやりと滝の肩に広がっていく紅を見つめていた周一郎の目が、ふいに焦点を合わせる。  
『滝…さん…？』  
夢現のように呟いて側へ近寄り、べたりと座り込んだ周一郎は、そうっと滝の肩に指を伸ばした。触れられてびくっと滝が震えるのにはと手を引いたが、自分の指が真紅に染まっているのを見つけて体を強張らせる。目を見開く。驚愕と恐怖を満たした表情が、何かを見つけようとするように揺らぎ、もがき、やがて、かけがえのない大切なものを失おうとしていると知って強張っていく。  
『い…やだ…』  
微かな呟きを漏らして、周一郎は首を振った。ぼろぼろ零れる涙を拭いもせず、濡れた指先だけを中空に浮かばせ、自らの体である指から自分を引き千切るように竦ませながら、一層激しく首を振り、周一郎は悲痛な声で叫ぶ。  
『いや、だあああああっ……っ!!』  
「……なんて顔をしやがる」  
「え？」  
現実起きている出来事を眺めるように修一の演技に見惚れていた高野は、いきなり聞こえたことばに目を瞬いた。振り向いて、山本の複雑な表情に気づく。  
「何ですか？」  
「あいつ、修一の顔だよ」  
苦々しく吐き捨てる。  
「あれ……本当に、滝が、いや、唯一心を許してる人間が死にそうだとわかったみたいじゃねえか。自分の身代わりになったって罪悪感まで浮かべてやがる。手から零れてく命に怯える顔だよあれは。……ガキの演技力じゃねえな」  
「でしょ、凄いでしょ！」  
自分が見て取ったものを山本も認めた。自分が評価した修一を、山本も確かにそうだと評価してくれた。有頂天になって声を弾ませる高野に相手が舌打ちする。  
「お前、俺が言ってる意味、わかってねえな」  
「へ？」  
高野は動きを止めた。山本の表情は冗談だと告げていない。むしろ、ひどく深刻な顔、一步間違えるととんでもないことになるぞと言いたげだ。  
「修一の奴、マジでやってやがるって言ってんだ。何でか知らねえが、あいつ、垣と仲違いしてるか、大喧嘩したんじゃねえのか」  
「へたすると、この映画で垣、辞めやがるんじゃねえか？」  
「え…えええっ」  
高野は驚いた。  
「修一、垣を失うって怯えてやがるぜ。しかも、それが避けようがないって覚悟決めてやがる。まずいことに、それがまた『演技』としてしか見られてねえ……お前みたいに」  
監督はわかってんだろうな、と山本はぶつぶつ呟いた。  
「そっか、だから急いでんのか、伊勢さんは…」  
それもまたひでえなと唸る。  
「いや、でも、そんなこと、修一さんから聞いてないですし。第一、何で垣さんが辞めるぐらいで。どうして修一さんが怯えなくちゃならないんです…？」  
尋ねる高野に、山本は深々と溜め息をついた。  
「悪い、けど、今ほんとに俺は修一に同情したぞ？ ……お前は感じねえのか？ この映画は垣、が肝だ。垣の出来一つで全部お釈迦になるか、全部うまく行くかってシロモノだぜ？」  
「あ…の…」  
「監督はわかっている、で、修一も今はそれに気づいてる、けれどそれが無くなるってこと、たぶん修一しかわかってねえ」  
「……えと…」  
「高野、いいか、あいつの食事とかに気をつけとけよ」  
山本は不快さを隠そうともせず唸った。  
「きっとまともに食ってねえぞ。『演技』しか目に入ってねえ。ああいう緊張ってというのは、そう長く保たん」  
「は…い」  
高野は急いで修一の食事内容を思い浮かべた。ロケ弁メインになっているのは知っている。けれど残ったゴミや残飯はまとめて回収されていたから、どれぐらい食べているのか把握できていなかった。  
「そう、か」  
しまった、と高野は臍を噛んだ。修一が絶好調だと思い込んでいたから、きっと体調もいいはずだと思っていた。けれど、元から修一はプライベートを明かさないう人間だ。高野に見せているのも『友樹修一』であるはずだった。  
「映画の最中にこけられたらどうにもならん」  
「…わかりました」  
高野は修一を睨みつけながら頷いた。  
シーン307は終わったらしい。人々が期待に満ちて集まる中、『友樹修一』のサイン会が始まっている。

「やあ、御苦労さん、御苦労さん」  
「…また来てたのか」  
満面笑みの極上機嫌で迎えた宮田を、垣は仏頂面で迎え撃った。  
タオルで汗を拭いながら、眉をしかめ、修一の方を見やる。  
(どうも変だな)  
今は友樹修一のサイン会のまっただ中だ。いつもと変わらずにこやかな笑顔を振りまき、時に笑い声を上げながら、これもまた上機嫌でサインをし続ける修一。だが。  
(何か…おかしい)  
手応えが違う。対応する、何かの位置がずれている、そんな気がしてならない。  
休憩の間にも脚本を検討しに来る修一が不愉快なわけではない。前ほどまとわりつかなくなったが、前と同じように人懐っこいし、あの日垣を怒らせたことを謝った後は以前同様、特にこれと言った変化はない。修一に対して容赦ない態度をとってしまった垣の方がむしろ、何かあるのじゃないかと思いつつ何かが変わるのではないかと怯え、けれど何も変わることがなくて、返って気抜

けした感じさえある。  
(けど、何か、違う)  
たとえばさっきのシーン307だ。  
垣は眉を寄せたまま、むっつりと腕を組む。  
(まるで……『本物』みたいだった)  
朝倉周一郎という人間が居て、その人間が今すぐ側で動き呼吸し話している、そんな感覚。  
(本気で…泣いてた……?)  
「かおる?」「どあっ」  
急に肩口から覗き込まれて椅子から転げ落ちた。  
「何だよ!」  
「いや、重大な問題が」  
宮田は険しい顔になっている。  
「重大な問題?」  
「ああ。友樹君なんだが…」  
「うん…?」  
ばさばさっと目の前に2つの花束が差し出された。片方が白い薔薇を中心にかすみ草で取り巻かれた淡い色みの清楚な花束、もう片方が黄色い薔薇と紺色、赤などのメリハリ花々でコントラストを効かせた派手な花束。  
「友樹君、どっちが好みだろうか!」  
「……あのな」  
能天気になにこにこ笑いながら花束を抱える宮田をねめつける。  
「そういう金はどっから出てる?」  
「もちろん、必要経費」  
「……なんの」  
「友樹修一のガードをするための」  
ああそうだそうだそういうやつだったなのにこいつは国家公務員なんだよなほんとにもうどうしてやろう。  
そういう文句を呑み込んで視線を逸らせようとすると、  
「あ、見捨てるなよ」「見捨てたくもなるわいっ」  
素早く察した宮田に突っ込まれて怒鳴り返す。  
「ガードはどうしたガードは!」  
「いやそれもやっぱりさ、花束が決まらなきゃ話しかけにくいだろう、いろいろと」  
「関係ねえだろ!」  
「依頼人との距離を縮めなくちゃ!」  
「そんな方向に縮めるなっ!」  
「わかったよ!」  
宮田は奮然として花束を両方引き寄せて胸を張り、冷ややかに垣を見下ろした。  
「そんなこと言うなら両方にしてやる!」  
「……」  
垣は立ち上がった。ああいやほんとと役者ってのは大変だよなあ、いろんな客がいるもんなあと違う方向に意識をぶっ放しつつ、タオルで顔を擦っていると、  
「あれ?」  
宮田が素っ頓狂な間抜けた声を上げた。  
「友樹君、いないねえ?」  
「は?」  
慌てて顔からタオルを引きはがし、周囲を見回す。確かに今の今までサインに応じていた修一の姿がない。同じように修一を探しているのだろう、右往左往している伊勢や高野の姿がある。  
「高野はいいとしても…監督まで……? まさか!」  
「まさかって何?」  
依然呑気な声を返してくる宮田を放置して、向こうから急ぎ足にやってくる佐野の緊張した顔を見つめた。  
「垣さん」  
「何かあったんですか?」  
「修一さんをご存知ありません?」  
「…いないんですか」  
胸のあたりで痛いほど何かが跳ねた。  
佐野は綺麗な眉を潜めて頷き、ちらりと宮田を見やってから答えを返す。  
「サイン会が終わった後、ちょっと水を飲んでくる、と……高野が外していたので自分でクーラーに向かったらしいんですが」  
「それから?」  
「…」  
佐野は首を振り、険しい表情になった。  
同じことを考えている、とわかった。  
(修一)  
ついさっきまで自分を見上げていた、周一郎そっくりの、切羽詰まった必死な目の色が視界を覆った。  
「宮田のどあほうっ!!」  
「え…おれ?」  
詰る垣の珍しい大音声に振り向いた宮田が、そそくさと視線を外す。  
それほど垣は激怒していた。

時は少し遡る。  
最後の1枚にサインした修一は相手に微笑みかけ、にこやかに色紙を手渡した。  
「ありがとうございます!」  
胸に抱えていそいそと走り去っていく後ろ姿に小さく溜め息をつき立ち上がる。  
「これで終わりだよ」  
「はい」  
「どちらへ?」  
「水…」  
掠れかける声に応じて佐野に笑い返し、高野を探したが居ない。もう一度佐野を振り返ったが、誰かに呼ばれたのだろう、急ぎ足で離れていく背中を引き止めるのもためられた。  
(喉が渴いたな)  
さすがに朝から1滴水も入っていないと辛かった。けれど、今の修一にとっては休憩に使ってしまう数分が惜しかった。  
屋敷の方へのろのろと歩く。  
(これが終れば垣さんは行ってしまう)  
垣が怒って部屋を出て行ってしまった後、修一にわかったのは、映画撮りの中でしか垣と一緒に居ることはできず、心を受け止めてもらえないということだった。  
少しでも長く、少しでも多く、垣と居たい。

だがそのために修一に何が出来るかと言えば、垣と作る1場面1場面を演りきることしかなかった。  
(垣さんもスタッフも妙な顔してる)  
くすりと笑った。  
自分でも、ここ数日の集中ぶりは呆れるほどだ。気持ちが高揚している分、あま疎なものが喉を通っていなくても体を保たせてくれている。後はこの調子が最後までもってくれればいい。  
(最後…)  
そうだ、最後。  
(本当の最期、でもいい)  
ここまで想い入れた演技は初めてかも知れない。  
「ふ、う…」  
溜め息をつく。屋敷の中に入るのが面倒くさくなって、外にあったクーラーに近づく。準備してあった紙コップに水を受けて飲み干し、もう一杯水を受けようとしたとたん、背中に足音が響いた。  
「…？」  
振り返ろうとした修一は、ふいに伸びて来た腕ととっさに手にした紙コップを投げた。いつの間にか駆け寄ってきていた男は巧みにそれを避ける。一瞬出来た隙に地を蹴り走り出す。だが、すぐに男が追いつがってきたのがわかった。  
『数日間、あなたの護衛をさせて頂きませう、宮田です、宮田』  
脳裏に能天気で明るい自己紹介が甦る。同時にくらりとした目眩が襲ってきて、足元から力が抜けた。  
(く、そ…)  
食べていなかったのがこんな時に響いてくるなんて。舌打ちしたくなる気持ちで考える。  
(組織の者だって宮田さんは言った)  
喘ぐ息が乱れて修一は汗を振り切った。揺れる視界、ロケ中の奥の広場まで辿り着ければ逃げ切れる。が、修一の行く手を木立から飛び出してきた男が遮った。立ちすくむ修一に前後から男が飛びかかってくる。  
「、垣…さんっっ!!!」  
声を上げて体を捻る、その口元に鋭い匂いがする布が押し当てられて総毛立つ。  
(助け…！)  
包まれた顎、もがく手足も虚しく、胸の叫びは一気に闇に呑み込まれていく。  
(垣…さ……)  
脳髄を真っ白な霧が覆う。身体中から力が抜ける。  
もう一度張り上げようとした声は消えた。修一の意識は薄れ掠れて砕けていった。

「くそ！」  
垣は勢いよく机を叩いた。ばんっ、と鳴った机が軽く跳ね上がる。  
「一体何待ってるんだよ、宮田！」  
前に座っている宮田に噛みつかんばかりに怒鳴っても、相手は例によって堪えた気配すらなく、のんびりとソファにもたれて天井を眺めている。  
通常ならば捜査本部がたてられ、たくさんの刑事が手がかりを求めて推理し検討し、頻回に出入りが繰り返されるだろう熱気はこの部屋にはなかった。  
撮影場所の一画、急造されたようなこじんまりとした部屋の中に居るのは、垣と宮田、それに佐野だけ。新たな人員が加わる様子もなければ、周囲にパトカーが押し寄せせることもない。むしろ、この一件で動いているのは宮田一人でしかないような侘しさと閑散さ。  
しかも苛立ち怒っているのは垣だけで、宮田はさっきからずっと時計を気にするわりには立ち上がることさえなく、むしろ一番楽な姿勢を求めて脱力一方、今やもう、どれほど追い立てようとしても飲み物を買いに自販機に行くことさえしないだらだら加減だ。佐野は佐野で、これまた信じられないようなポーカフェイスで宮田の隣に控えている。  
(畜生！)  
垣は歯を食いしばって、再び両手を机の上に振り下ろした。びい……ん、と4本の脚が余韻に震える。だが、やっぱり宮田も佐野も視線1つ動かさない。  
(どうしたって言うんだよ)  
友樹修一が行方不明、しかも事件に巻き込まれた可能性が高いのだ。十分に警察が動いていいはずのネタ、なのに、宮田はともかく他からも応援が来ないというのが解せない。  
(こうしている間に、あいつがどうなっているかわからないのに！)  
もう一度振り上げかけた腕を思い直して胸の前で組み、垣はどすりとソファに腰を落とした。  
脳裏に水飲み場の踏みにじられた紙コップが浮かぶ。  
(あんなに近い所に居た……あんなに近い所から連れ攫われた)  
垣は気づかなかった。高野も佐野も張りついていたはずの宮田さえ。  
(きつと…助けを呼んだ)  
ぎりりと奥歯が鳴った。  
攫われる寸前、きつと修一は誰かを、おそらくは垣を呼んだはずだ。  
ぱっぴらぱっぴらぱっぴら。  
「な、何だっ？」  
あまりにも場違いな明るくふざけた音楽が鳴り響き、宮田が思わぬ素早さで携帯に応じた。  
「はい、宮田です」  
「着メロ…」  
「あ……ああ、俺だ。うん……うん、捉えた？ そうか、そのまま追跡しろ。いや、まだ手は出すな」  
さらりと命じて通話を切る宮田に、垣は訝しく眼を向けた。  
「捉えた？」  
「あ、うん。実は毎日発信器を友樹君に着けさせてもらってな」  
珍しく生真面目な表情のまま、宮田が頷く。  
「じゃあ、毎日、友樹君にあれやこれやと触りまくっていたのは」  
垣の頭に、来るたびにあれやこれやと理由をつけて修一に近づきスキンシップにいそんでいた宮田の姿が甦る。おいおいセクハラ疑いを通り越して被害届寸前だぞ、と思うような距離感、必要な機器を友樹の体につけるためのものだったのだ。だが、  
「待てよ、けどそれって立派な法規違反…」  
友樹修一の人権からいくと間違ってるよな、と突っ込みかけた垣を、宮田はさらりといなす。  
「今の友樹君の位置は、ウチの連中がしっかり補足してくれている」  
「あ、なーる…、つか、おい、今あからさまにごまかして」  
「で、不思議に思わない？ 何でそこまでしてるのかとか、何でそれなら今すぐ助けに行かないのかとか」  
「そうだ、何で助けに」  
はっとして声を荒げた垣に、宮田は薄笑いを返した。  
「それはきつと彼女の方が理由を知ってる」  
立てた親指で指し示した先には佐野の姿、にやにや笑いでしてやったりの宮田の横目も、驚き以外に浮かんでいるのは純粋な怒りだろう垣の視線も、恐れ気もなく受け止めて、友樹家の懐刀はゆっくりと刃を引き抜いてみせる。  
「仕方ありませんわね」  
穏やかで淡々とした声音には切迫したものなど全く感じられない。  
「そういう手を取られると、本当に困るんですけど」

手間暇もかかりますのでね、と上品に微笑む。  
「つまりこういうことですね、私は修一さんのマネージャーですけれども、綾野産業の頭脳（ブレン）の1人でもありますの」  
「ぶ」  
垣は思わず吹き出した。  
「もっとも…」  
佐野は啞然としている垣に頷いた。  
「表向きの正業の方ですけど。綾野産業が修一さんのメイン・スポンサーであることはご存知ですね」  
「え？ いや、あの俺は…」  
口ごもる垣の前で佐野はひんやりと笑って、続けた。  
「では、友樹陽一のバックに綾野産業がついていることは……」  
「え…いや…」  
垣はなお口ごもる。  
（今さらだけど、オレってあいつのことは何も知らねえんだ）  
友樹陽一や雅子のことは、それこそ手当たり次第に情報を集めていたと思うのに、と考えてはたと気づく。  
（それだけ修一の情報が抑えられていた？）  
改めて目の前の佐野を眺める。情報操作をしていることさえ勘づかせないほどの腕を持ったこの女性が、何をしていたのかにふいに興味湧く。  
「元々、綾野産業は友樹陽一のバックにつく代わりに、彼が生み出す潤沢な資財を活用してきました」  
つまり佐野はその『活用する』側に居たわけだ。  
「不動の人気というものはあり得ません。どれほどのスターであろうと、やがて飽きられ捨て去られる」  
淡々と陽一を切り捨てる声音に気負いはない。  
「ですから、企業としてより有用な投資先を考える必要がありました」  
「…修一…？」  
「ええ」  
にっこりと笑う佐野の瞳が光る。  
「天賦の才能、というものを私は初めて実感しました。天性というものが土台を十分に整えられた時、どれほどの成長を見せるのか。まさに事業が社会を揺るがすほどの影響力を持つようになる過程そのもの。私はそれに魅せられました」  
佐野は修一という宝石を磨き上げるのに夢中になった。だが、好事、魔多し。潤沢すぎる資金は愚かな者にとっては暗闇の沼だ。  
「私が綾野産業から眼を離していた間に企業は腐りました」  
すっぱりと佐野は断じた。  
「綾野はクスリを扱い始め、陽一さんは綾野の手回しで浅倉若子と抜き差しならぬ状態になり、雅子さんは中毒患者になっていた。私は修一さんの才能を潰す気がなかったの、これ以上クスリに踏み込むようならば手を引くと伝えました」  
佐野もただの遊びで綾野産業のブレンとして動いていたわけではなかろう。手塩にかけて育てた部下や事業もあつたはずだ。だが、修一まで伸ばされてくる汚れた手の存在に、それらの一切に能力を提供しないと決める、それほどに修一に思い入れていたということか。  
「でも告発はしなかった」  
宮田がこれまたさっくりとやり返す。  
「多くの人々を苦しめる温床と成り果てていても愛社精神があつたわけだ」  
「けど……今は違う、そういうことでしょう？」  
垣は問いかける。  
「もう黙っては見てられないから」  
「まさか」  
くすくす、と軽い笑いを佐野は返した。  
「以前垣さんにもお話ししたでしょう？ 私、修一さんを買ってるんです、マネージャーとしても、私個人としても。だから、彼の才能を妨げるものがあれば、微力ながら排除するのに全力を尽くします、たとえそれが何であろうと、と？」  
ふいにわかった。  
「佐野さん、あなた」  
違う、この女性はそんな甘い優しい感覚で物事に向き合う人じゃない。ましてや、自分の期待と信頼を裏切ったものに対しては、髪の毛一筋の未練も残さない人だ。  
「そういうことなんだよ、垣くん」  
宮田がチェシヤ猫のように薄笑いを顔全面に広げた。薄く引き延ばされた唇、弧を描いて細められた瞳、緩やかに左右に引かれた眉。どこからどう見ても笑顔なのに、どんなに頑張っても安心できない薄気味悪い微笑。  
「愛社精神？ 社会正義？ いやいや、この人の中にそんなものはないさ。あるのは友樹修一という類稀なる才能を傷つけようとする存在への怒り」  
ああ、そうだろうさ。  
垣はぞくりと身を震わせる。  
修一のこれほどの危機に目の前の女性がうろたえないのは、見定めようとしているからだ、修一が受けるかも知れない衝撃とそれがもたらす成長、綾野産業への鉄槌のぎりぎりのバランスを。  
だからこそ応じた、宮田との『取引』に。  
「つまり、この人は綾野産業を見捨てたわけだ」  
「あら……綾野産業だけじゃありませんわ。友樹陽一も雅子もです」  
分りの悪い子どもに言い聞かせるように佐野は微笑んだ。  
「それに私よりもっと本分を逸脱しておられるのは、宮田さんじゃないかと思えますけど」  
警察を辞められるおつもりですか？  
柔らかな問いただしに垣はぎよつとする。  
「ちょっと待て……宮田、お前ひよつとして」  
「いやいや俺も心配してますって、修一君のことを。ちゃあんと無事にクスリを売りさばいてるアジトまで案内してくれるんだろうか……ってね」  
ふふっ、と笑みを零した宮田に垣はぶち切れた。  
「っみ、や、たああっ！」  
お前そんなことのために、あいつを使ったのかあっ！  
「ひよつとしてお前、友樹君の事故騒ぎも！」  
「あれは違う」  
怒鳴りつけた垣に、宮田は不愉快そうに唇を歪めた。  
「俺ならもっとうまく、ちゃんとやる」  
「何をちゃんと、何をうまく！」  
ぶっ飛んだこと言いやがって！  
「ああ、そうか、言い忘れてたけど、あれの張本人、界部朋子の親衛隊の作業らしいよ？ 嫉妬って奴？」  
「てめえ人をコケにしやがって…全部知ってたんだな！」  
見えてきたのは、事件に追い詰められる修一を心配して巻き込まれていく自分の姿、それもどうやら目の前の『友人』の仕組んだことだという構造。  
「まあまあ」「まあまあじゃねえ！」  
睨みつけながら怒鳴り続ける。  
「一体何考えてやがったんだ、そんな魂胆で俺達に近づいてたのか！」

手駒として操って、自分の欲しい情報を一番良い形で手に入れられるように、周囲からじりじりと搦めてきて。  
「そんなことなら！」  
「そんなことなら？」  
「オレはさっさとあいつからお前を引きはがして！」  
「そうだよ、修一から俺を引きはがして、お前がちゃんと」  
「オレがちゃんと！」  
「大事に守ってやればよかったんだ！」  
「大事に守ってやればよかった！」  
「体の隅々まで！」  
「体のすみ……何を言わせやがるっつ！」  
「うむ、俺式誘導自白、本日も快調」  
「っ、違うだろおお！」  
こんな馬鹿馬鹿しい話をしてる間に、あいつに何かあったらどうする気なんだ。いや、そもそも警察がこんな捜査みたいなことを、しかも一般人を巻き込んで、ついでに対象には危険の1つも説明せずにやっていいはずがなかるう！  
垣がなおも気炎を上げようとした矢先。  
ばっぴらばっぴらばっぴら…  
またもや鳴るだけで気力と根性が失せる着メロが鳴り響いた。  
「あ、止まった？ ふんふん……山の中だな。構わん、周囲を固める、俺もすぐに行くから」  
通話を切った宮田が顔を上げる前に、垣は走り出した。いつの間にか佐野が席を立ち、さっさと自分の車に乗り込みエンジンをかけているのにかろうじて間に合う。数秒遅れて追いついてきた宮田が、当然のように助手席に滑り込んでシートベルトをかけながら、  
「どこかわかってます？」  
「綾野系列で山中、薬を売りさばけるルートに繋がっていて、この移動時間。しかも数日間人1人監禁しても問題にならない場所と言え、1カ所です」  
「監禁っ？」  
ぎょっとする垣に佐野は冷ややかな視線を肩越しに投げて来た。  
「動き方と選ばれた場所を考えると、下っ端の荒っぽい連中が動いたようですね。修一さんに傷がついていないことを祈るしかないでしょう。役に立たないとなったら何をするのかわからない、そういうお馬鹿さん達の集まりですから」  
飛び出した車は佐野の口調通りに荒々しく、速度を上げて跳ね飛んでいく。  
「その時にはそれなりの身の振り方をして戴きますわ、宮田さん」  
垣に向けたのは格違いの冷たい視線に、宮田は動いた様子もなくシャラリと応じる。  
「主人公は死なないことになってんだよ、な、かおる？」  
「確認すな！」  
にこやかに振り返られて垣は怒鳴る。車の勢いに後部座席に押し付けられていなければ、世界平和のために宮田の首を絞めてたところだ。

(垣さん!!)  
どことも知れぬ闇の中を落ちて行きながら修一は叫んだ。  
四肢がバラバラに千切れて、それぞれ別の場所へ放り出されていくような不安と恐怖、激痛に意識がかき回されてぐちゃぐちゃになる。  
(垣さああんっ!!)  
叫ぶ声は闇に吸われる。差し伸べる手はどこにもない。もがく脚も震える体も粉々になって、意識は砕かれる寸前の小石のように強張り、たった1つの名前を繰り返すだけだ。  
(垣さん！ 垣さん！ 垣さああん！)  
それと重なる、エコーのようなもう1つの名前。  
『滝さん！ 滝さん！ 滝さああん！』  
もちろん、周一郎がこんな風にひたすら助けを求めて滝を呼び続ける場面などない。自分1人で凌ぐことしか考えていない、誰かが助けてくれると考えたこともない、それが『周一郎』という少年だ。  
けれどしかし、修一は『周一郎』を繰り返し演じてきた。脚本の中はもちろん、そこに描かれていない生活、動き、予想される出来事や事象、それらを想像し空想し、脚本の外にまで『周一郎』を広げることで初めて、脚本の中の『周一郎』に血肉が通うことを知っていたから。友樹修一というキャラクターが要求される以外は、務めて『周一郎』であろうとした、と言っているかも知れない。  
だからわかる、『周一郎』が胸の内ですれほど滝を繰り返し呼んでいたか。屋敷を出ていってしまう滝を見送ったとき。京都の事件で清に犯罪者として切り捨てられたとき。直樹としてしか滝と再会することができなかったとき。  
胸に繰り返し呼び出すだけで力が湧く、そんな思いで『滝志郎』の名前を抱えていたはずだ、死者復活の呪文のように。  
(垣さん、垣さん、垣……)  
同じように呼びかけ希いながら、それでも修一は気づいていて、やがて少しずつ叫ぶ声を失っていく。  
(僕は、『周一郎』じゃない)  
わかっていたことだ。  
修一がどんなに『周一郎』を演じようと、それはどこまで言っても仮初のものであって、修一そのものではない。同様、垣はどこまで言っても『垣』であって、『滝』ではあり得ない、ましてや修一を救う『滝』とは成り得ない。  
(わかってる)  
全てはお芝居だ。  
この『猫たちの時間』に描かれた至上の繋がりは、現実ではあり得ない。人の絆の一番純粋で優しい形、かけがえがないと確信できる1つの夢、だからこそ、この作品は『娯楽』として成り立っている。厳しく苦しい現実の世界からはみ出した、一瞬の理想郷の世界として。  
落ちていく修一の回りにはぐるぐる回り続ける青白い鬼火が躍っている。中心の修一を嘲笑うように脅かすように跳ね回り燃え上がり、くるくる舞いながら修一を螺旋の渦へ引き込んでいく。  
(『周一郎』は夢だ……何をしても、どこまで行っても、支えてくれ守ってくれ受け入れてくれる『滝』という存在を描くための夢……夢は現実にはならない……どんなに巧みに引き寄せたとしても……)  
心の奥底に冷えきった寒い想いが澱んでいて、小さく嗤う、演じた夢に呑み込まれてしまった愚かな自分を。  
(ずっと、ちゃんと、『演じてた』つもりだったのに……)  
いつの間にか夢に全てを乗っ取られていた。  
(おとうさんや……おかあさんと同じ……)  
友樹陽一はいつまでも女に求められ部下に憧れられる『できる男』の夢に呑まれた。友樹雅子はどんな時でも華やかで火のように激しい『美しい女』の夢に呑まれた。  
修一の求められたのは『できる男』と『美しい女』の家庭にふさわしい『才能あふれる非凡な息子』だったのに、いつの間にか演じられなくなってしまった、『友樹修一』を。  
(だって……皆が求める友樹修一ってさ……『周一郎』そのものだよ……)  
演じていくうちに見失ってわからなくなる、今自分はどこの誰でどんな存在なのか。『周一郎』が当たり役だと言われれば言われるほど、脚本からはみ出した『周一郎』を演じ続けられ続けるほど、違和感が増える。  
求められている姿は、まるで『友樹修一』に望まれる姿そっくりだ。  
けれど、『友樹修一』なら、あんなに意地を張ったりしない、誰かが側に居てくれて気にかけてくれるのは嬉しいことだ。嬉し

いから笑い返し、相手が応じてくれるからもっと距離を縮めていこうと思う、けれど、そうしたときに突然訝しく拒まれることが増えた。

『あれ、友樹君ってそういうキャラだったっけ？ あ、そうか、「周一郎」の演技中だものね、「周一郎」が「滝」に懐いてるときって、そんな感じだよ？』

今、ここに居る『友樹修一』って、何だろう？

それとも、もうとっくに『友樹修一』なんていうのはなくなって、ここにあるのは『朝倉周一郎』という仮面をつけたり外したりしている1体の影がいるだけなのか？

そのとき、ふいに。

(わかった)

『周一郎』がどんな気持ちなのか。

(この世界の、どこにも自分はいない)

誰かが望む『朝倉周一郎』という形が無数に転がっているだけで。

それらを取り外してしまっただけにはきっと何にも残らない。

だから『周一郎』は松尾橋から消えた。『直樹』を被った。

そうしても世界は変わらないという答えを予想して。

(でも、その中でたった1人)

『滝』だけが見失わなかった。

誰もが気づかなかった『周一郎』の本体、本人さえも見えなくなっていた真実を、『滝』だけが取り出してみせた、魔法のように、奇跡のように。

(ほら、お前はここに居る、って)

そのとき、『周一郎』はもう一度、いや、初めて、この世界に産まれたのだ。

(同じ、ように)

『修一』も産まれたかった。

両親から、ファンから、スタッフから、友人から、周囲のありとあらゆる者から期待され望まれ作り上げられた『友樹修一』ではなくて、好きなものを見つけて、必要なものを求めて、大事なものを守れる、世界でただ1人の『修一』に。

(でも)

それもまた、夢、だった。

顔を覆う。指の間から、小さな銀色の泡となって、涙が闇の空に次々と舞い上がって散っていく。

(垣さんは、滝さんじゃない)

(僕は周一郎じゃない)

なりたかった。

なりたかった。

朝倉周一郎に。

滝志郎が支える少年に。

自分を棄てても、なりたかった。

(でも)

なれなかった。

垣に嫌われた。

見捨てられた。

だから、残っているのは芝居しかない。

終る瞬間に砕け散る夢で、最後まで躍り続けるしかない。

(どうして僕は『周一郎』でなかったんだろう…?)

それはきっと、『朝倉周一郎』の偽物として滝に見破られ、やがて身代わりとして殺されていく直樹の気持ちだったに違いない。

(よく…わかるよ…)

今きくと修一は『猫たちの時間』の配役全ての気持ちがわかっている…。

「……」

瞬きをして、ふいに戻ってきた視界に戸惑った。

真っ白い平面だけが向き合った、味気ない部屋だった。

隣で話し声が聞こえてくる。

のろのろと体を起こす。頭がぼうっとしている。かがされた薬のせいだろうか。

「電話は？」

「通じねえ。へっ、とんだお荷物だな。友樹修一だっていうから、がっばり稼げると思ったのに」

嘲る声が修一のことを話している。

「あの女もいい加減なこと言いやがる」

「あいつ、データのための字も知らねえし」

目が疲れたので視線を落とす。寝かされていたのは床の上、他人のもののような手足を動かして、人形を足から起こしていくみたいに体を組み立てると頭がふらつき不安定さに吐き気がした。酷く揺れる船の甲板、反転を繰り返すジェットコースター。立ったいられなくてよろめいて壁にもたれ、呼吸を整える。少し深く息を吸う、途端に吐き気が強くなり競り上がる喉元の苦い塊を辛うじて呑み下す。

(データって……)

そういえばどこかで誰かがそんなことを言ってたような。

(組織の内情を暴いたデータ…?)

雅子が囚われ、身代金として差し出せそうな嘘ならそれぐらいだろう。それを修一が持っていると言い逃れていけば、ああ確かに修一を捕まえて調べるまでは組織も落ち着かないだろう。部屋を探し身辺を洗っても出なければ、修一本人を叩くだろう。常道過ぎるほど常道な道筋。

「う…」

ではこの気持ち悪さは白自剤かそれに類したものと考えてよさそうだ。込み上げる吐き気に口を押さえ、視界を一気に埋めた蛍光ピンクと水色の光に圧倒されてぐずぐずと座り込む。

「おい、何か音がしたな」「起きたのかな、あいつ」

いつか同じような場面があったな、と修一は思い出す。『京都舞扇』だったか、滝が『直樹』から離れることを強要される場面だったような。

がちやりとノブが回る音がして境のドアが開いた。出口はあそこかなさそうだと思わずに刻み込む。

「は、座り込んでやがる」「お坊ちゃん育ちにはきつかったんだろうよ」

笑い合いながらやってくる2人の男、1人が前にしゃがみ込み、にたにた嫌らしい笑みを広げて修一を覗き込む。

「おい」

ばん、と頬を叩かれ一瞬息を呑んだ。目を見開いたのが見えたのだろう、続けてばん、ばん、と左右の頬を叩かれるままに受け止めて、それで揺さぶられた脳髓がまた強烈な吐き気を送り出してくるのにぐらぐらして目を閉じる。

「だめだぜこりゃ、当分使いものにならねえよ、いきなり吐かれても興ざめだしな」

だから強すぎねえかって言ったんだよ、お楽しみまで台無しにすることはねえだろ。ぶつくさ言いながら立ち上がる男のポケットで携帯が鳴った。

「はい、ああ、綾野さん」

代わりに修一をいたぶろうとしていたのだろう、近づきかけていたもう1人も立ち上がってそちらを振り向く。  
「ああはい、じゃ、もう用済みですか」  
「さらりと続けられたことばに修一は微かに身を竦めた。  
「え…そんな無駄骨折らなくても、外に放り出しときゃすぐ死にますぜ」  
その方が後腐れねえしアシもつかねえしと続けかけた声が不満そうに感じる。  
「かなりふらふらしてます。クスリきつかったみたいだし。まだ半分寝てる感じです。……いや、わかんねえですよ」  
くすくすと低い笑い声を響かせ、もう1人に目配せする。  
「俺らに任しといてくれりゃ何とでも……え？ はいわかりました、跡形なく消しときます」  
「何だって？」  
「さっさと殺せって。確実に、安全に」  
「社是かよ、笑えねえ」  
ケラケラ笑う2人はめんどくさそうに修一の側に近づいてくる。  
「外で絞め殺して衣服剥いで埋めとくか、この雪だしな」「いいな、死んでからじゃ重いしな……おら立てよ」  
怒鳴るわけではない、けれど十分な凄みをきかせて唸られ、修一はがしりと両腕を掴まれた。力一杯引き上げられた勢いにぐだぐだになった三半規管が見事に反応して吐き気が込み上げ喉を鳴らす。  
「う、ぐ…」「あ、吐く」「やべえ、早く運び出しちまおう」  
男2人はあたふたと修一を引きずった。殺すのも弄ぶのも平気だが吐瀉物の始末はごめんだという感覚、だが思いっきり揺さぶられて悪心と目眩に圧倒された修一は抵抗する気にさえならない。あつという間に部屋からも家からも連れ出され、足元が引っ掛かって崩れた時にはもう雪の中だった。  
「おい、ここじゃまずいよ、あの林の中へ連れ込んじまおう」「だな」  
ぐいぐいとなおも修一を引っ立てようとするが、半分意識を失いかけている修一の重さは予想以上だったらしい。1人が焦れて苛々と声を上げる。  
「早くしろ！」「やってるよ！」「ちえ、先に道付けとくからな！」「お、おい！」  
1人がたじろいだ隙にもう1人が走り去る気配、残された男は舌打ちをして唸る。  
「2人で重いってんだから、1人で運べるわきゃねえだろがよ、ったく何様だと思ってやがんだ、いつもいつも面倒なことばっかこっで押しつけやがって…ったく、重えよなこいつはあつ！」  
それでも修一を放り棄てて行こうとしないのは、確実に安全に始末しろ、と命じた主の怖さを隅々まで知り尽くしているのだろう、ぼやきながら修一をどっころしよと背中におぶおうとする、そのとき。  
「……………」  
修一は目覚めていた。霧がかかった意識の中で『誰1人助けに来てくれない』状況に置かれた『周一郎』がどんなふうにも窮地を脱したのか、なぞり返すように思い出していた。ほんの僅かな隙を一瞬の油断を千載一遇のチャンスに変えて、相手を屠り、敵に破滅をもたらして帰還したのだ。修一はそこまでできなくとも自分の能力でこの場面に何ができるかはわかっている。  
「、っ！」「わあっ！」  
無防備に向けられた背中を目一杯突き飛ばして身を翻した。今来た道なら多少踏み固められて走れる、けれど元の場所に戻るわけには行かない、出来るかぎり追手と距離を置いたなら、雪の中に体を投げ出して全く違う方向へ逃げる。  
「こ…このお！ おい！ 来てくれ、やつが逃げたあつ！」「なにいっ！」  
背後で響く怒号、掴まればその場で殴り殺されるのは必至、銃器類は持っていなかったようなのは幸いだ。  
(ひょっとして、人が近くに棲んでるのか？)  
喘ぎながら雪を泳ぐ。意外に人が通る場所なのかも知れない。だからこそ銃声が響き渡るのはまずいし、血が飛び散るような状況もまずい、絞め殺して埋めることにしようということだ。そうすれば、雪が溶けて地面が出て、その後からでない見つからない、そういうことなのだ。  
「捕まえるっ、何してるっ！」「てか、雪の中なのにあいつ速くねえか、くそ！」  
(覚えてる)  
修一は前へ前へと進む。そうだ、体は覚えている。昔、雪の中でロケーションをしたことがある。誘拐された幼い男の子の役だ。恐怖に怯えながら、閉じ込められた別荘の2階のトイレの窓から逃げ出すのだ。普通なら逃げ出せなかったが前日大雪が降って下が積雪のクッションになった、だから男の子は雪に身を躍らせて逃げ延びる。撮影にあたっては、ロケ先の在所の老人に雪の中をどうやって進むのかを教えてもらった。完全にはできなかったけれど『素人』よりは経験がある。  
(逃げる)  
死にたくない。  
もう一度逢いたい。  
男の子は喧嘩して家を飛び出していた。心配する父親を詰っていた。雪の中を逃げながら思い出していたのは父親の顔だけ、帰って謝ろうという想いだけ。  
「てめえええええええ！」「待てやあくそ餓鬼いいいいい……」  
「？」  
ふいに背後の音が妙に途切れた。  
空気が変わる。ふわりと自分を包む感覚に修一は戸惑う。  
(これって確か)  
あの時、カチンコが鳴った瞬間の気配。  
『終わったぞ、修一！ もう走らなくていい！ いい画が撮れた、安心しろ！』  
叫んだあの時の監督の音が聞こえた気がして振り返る。  
「生まれ！ 抵抗するなああ！」  
いきなり背後の男達の回りにばらばらと飛び出してくる点があった。あつという間に数を増し、白い雪原を蹴散らすように次々と黒点が増えてくる。  
「動くなあああ！」  
響き渡る叫び、上がる雪煙。  
(何…？)  
「友樹君！」  
その黒点の中から1人が、人間の形を取りながらこちらへ向かって走ってくる。  
(僕の名前…？)  
これは映画のシーンだろうか。  
それとも、ぼやけた意識が生み出した記憶の海の中だろうか。  
けれどそれなら、修一は役柄で呼びかけられるはずだ。  
それともこれもまた、『友樹修一』という役柄の、映画の一コマなのだろうか。  
「大丈夫か、友樹君っ!!」  
大声で叫びながら、両手を振り回しながら、雪の中でじたばたしながら、それでもかなりの勢いで突進してくる姿に思わず呼んだ。  
「垣…さん…っ」  
そちらへ向かって走り出すのは必然、約束された場面、けれど後ろに蹴った足が突然深く吸い込まれて悲鳴を上げる。  
「わあっ」「友樹君！」「修一さんっ！」「友樹っ!!」  
交錯する声の渦、差し伸べた両手が体の下で一気に崩れた雪の中で、ざりざりとした紐のようなものに引っ掛かる。とっさに握り込みしがみつくと、焼ける掌の激痛にも離さなかったのは本能だろう。  
「、っ、っ、っ……!!」  
声にならない声を目眩に覆われた意識で天空へ吐き出し続ける。助けて助けて助けて……誰かああ！  
雪崩落ちる雪が落ちていたとき、修一は静かにそっと息を吐いた。  
足元に何も無い。

目を閉じる。  
見なくてもわかる。ここは断崖だったのだ。雪が被さって走れるように見えていただけだ。もう少し走り続けていたら修一は今の雪とともに遙か下に落ちていたのだ。

「っ」  
ぶるっと震えると掌の中の固いロープのようなものがずりりと滑った。うっすらと目を開けて、それが何かを確認して凍りつく。

木の根だ。  
凄く太くて立派だ。  
けれど、ここへ来る直前まで、そんな大きな木はなかった。  
だからこれは、この断崖に埋まっていた、古い、昔の木の根なのだ……いつ抜け落ちてもし不思議はないような。  
ゆうらりと体が揺れて再び目を閉じた。だが今度は唇を噛んで、静かに目を見開いて見下ろした。

何もない。  
いや、あるにはあるが、遙かに下だ。  
掌に乗るぐらいのバスが1台のんびりと山道を走っている。修一の揺れる足のうんと下の方で、そのバスをおばあさんが待っている。  
光景が、一望できた。

「……」  
ごくん、と唾を呑んだ。目眩はどこかに消え去っていたが、凍えるほど冷たい霧が額から喉へ這い下りていく。  
自分の体は、あののんびりとしたバスの屋根にぶち当たって跳ね返って横の谷に落ちるのだろうか。それとも突き刺さって見るに耐えないものをぶちまけるのだろうか、あの優しそうな気配のおばあさんの前に。

(嫌だ)  
視界が涙で霞んだ。鼻水が出た。『周一郎』は絶対おかしい。こんな程度の崖でさえ落ちることは恐怖でしかない。なのに自分で笑って落ちるなんて絶対どこか壊れている。

「友樹君っ!!」「っ!」  
上から声が降ってきて慌てて見上げた。涙と鼻水でぐしょぐしょの顔を崩れてきた雪が叩きつけ、一瞬息が止まるかと思った。顔を歪めて背け、目を閉じ、雪の流れに耐え抜いて、また再びのろのろと振り仰いで真っ白な垣の顔を見つけた。

「大丈夫か!!」  
「垣…さあん……」  
ほっとした瞬間に手から力が抜けてずりりと数cm滑り落ち、修一も垣もくぐもった声で悲鳴を上げた。必死に握り込んで止まる、けれどさっきより根の感触が頼りない気がする。

きつと、もう、ここはまずい。  
「こっちだ、こっちに手をのばせ!」  
垣が叫びながら、固そうな足場を見つけたのだろう、腹這いになって手を伸ばしてきた。白い雪まじりの斜面、寒さで赤くなった手が妙にはっきりと鮮やかに視界に飛び込む。

「…っ」  
もう一度乾き切った喉に唾を送り込み、痛みに顔を歪めながら、修一はゆっくりと左手を木の根から離した。大丈夫。何とかまだ保てる。けれどそんなに時間はない。かじかんでじりじり木の根から滑り落ちて行く右手に比して、左手は嫌になるほどゆっくりとしか伸びない。

「もう少しだ、もう少し!」  
垣の声が響く。  
(僕は…ためらっている)  
胸の中の声が応じる。  
(この手を本当に掴んでいいのか)  
本当に、もう一度、垣の側に戻っていいのか。  
(資格が、あるのか)  
『資格は、あるのか』  
耳の底と胸の奥から同時に響く声を受け取る。

(『周一郎』)  
自分の姿に重なり合う、自分の命を断つしか滝を救えないと断じる『周一郎』が。

「こっちだ! こっちだ、友樹君!」  
(もう少し、手を伸ばせばいいだけなんだ)  
いいのか?  
(いいに決まってるさ)

理由は。  
(あれが見えないのか)  
顔を強張らせ叫びながら手を伸ばしている垣の姿。  
(助けたいと思ってるんだよ)

僕を?  
(そうだよ、一緒に生きていきたいって)  
一緒に?  
(一緒に)  
だから、信じて。

「、くっ」  
修一は渾身の力で体重を右手1本で支えた。左手をしっかりと伸ばす。垣の伸ばす指先に触れた。一瞬。そして、もう一瞬。

「あ」「友樹!」  
風が吹く。右手から突然木の根がすっぽ抜けた。今にも重なり合うように見えた2人の手が掠め合う。空中に放り出された修一が、落下に入る次の瞬間、

「どりゃああっ!!」「っっっ!!」  
空気を蹴破るような雄叫びが響いて修一の手首ががごとりと掴まれた。降り戻されて断崖に叩きつけられ、跳ね上げられてもう一度、何度かそれを繰り返す間も、手首を握った掌の力は緩むことなく、そしてついに。

「垣…さん……」  
「おうよ…大丈夫だからな……諦めんなよ……」  
はあはあと荒い呼吸の合間に、ざまあみろと言いたげに声が笑う。

ああ、ここところは滝と違うな。  
その瞬間に考えていたのは、そんなどうでもいいこと。

「さあ、そっちの手も貸せ」「…うん」  
片腕1本掴まえられて空中に浮かんでいる軀は、普段の数十倍の重力がかかっているように重かった。顔いて右手をそろそろと上げていく。斜めに引っ張られている体に逆らって、横へでなく上へ手を伸ばす、その難しさ。

「ぐ、う…っ」  
同じようにもう片方の手を差し伸べながら、垣も唸って顔を引き攀らせた。じりじりと手首を掴んだ指が緩む。逆手で掴んでくれていれば、修一も垣の手首を握れたのにと思いつつ、ゆら、ゆら、と揺れた視界にむかつきが込み上げ目を閉じた。こんな所で吐いたらおしまいだ。衝撃で垣の手がすっぽ抜けるのは目に見えている。

「早く…友樹…っ」  
呼び捨てにされた声に一瞬強く目を閉じ、落ちるしか道はないと嘯きかける『周一郎』を意識の向こうに押し込める。  
(帰る…絶対帰る)



僕は君と違うよ、『周一郎』。  
僕は自分が死ぬことが垣さんを助けられるなんて思わない。  
だって。  
「…っ」  
右手を伸ばしていきながら、目を開け、その向こうに差し出されている真っ赤な手を、ぶるぶる震えながら食いしばって覗き込んでいる垣の顔を見上げる。  
「…こんな顔を見て、それでも死んでいいなんて思えないよ」  
君は見えなかった。  
確かにルトを通して人の裏表をいやというほど見続けてきたんだろう、けど。  
「……肝腎なところが、全く見えてなかったよ……っ！」  
吐き捨てながら、最後の一踏ん張りで垣の手首をがっちり握った。心得たように垣が修一の手首を握り込む。  
「よ…おし…」  
ほう、と息を吐いた垣がすぐさま怒鳴る。  
「宮田！ 引っ張れ！ そっとゆっくりだぞ！」  
おーらい、とひどく軽い声が応じて、あ、ごめええん、と続く。いきなりがくんと垣の体が前後しひやりとした。滑りかけていた左手が一瞬抜けかけ、咄嗟に垣が顔を引き攀らせて手を振り回し、かろうじて修一の手首を掴む。  
「手え滑っちゃった」「……覚えてろよ」  
どこまでも軽い宮田の声に垣の目が細くなった。  
「悪い悪い…思ったより重いよね、お前」「……ほっとけ」  
ずるっ、ずるっと数cm単位で引き上げられていく体に竦んだ修一の顔を見たのだから、垣は瞳を和らげた。  
「もう大丈夫だからな」  
静かに続ける。  
「もう心配しなくていいからな」  
「…うん」  
ことばだけでは足りなくて、修一は何度も頷く。  
ほらね、『周一郎』。君だって、手を伸ばしてたら同じことばを聞いたはずだ。  
(だってさ)  
相手は滝志郎だ。お由宇から天使症候群なぞと呼ばれ、周囲の人間までお節介で親身でいい人に変えていってしまうようなキャラクターだ。『周一郎』を助けたいはずがなかっただろう。  
(君は、何にも見えてなかった)  
『周一郎』を失った滝がどれほど傷つくか。それが自分のせいだと考えた滝がどれほど負い目を背負うか。  
(いや、わかってたのかな)  
だからこそ『直樹』として側に居た。  
(なんだ…『周一郎』…君って)  
「もう少し、もう少し！」「おいせこらせおいせこらせ」「頑張れ宮田」「頑張ってますっておいせこらせ」  
宮田と掛け合いつつ垣がついに修一を崖の上に引きずり上げる。最後の1回で胸やら腹やらを思い切り擦られ、視界が眩んで吐き気が戻り、思わず口を押さえて俯いたとたん、  
「おい、大丈夫か怪我はないか何もされてないか気分はどうだあままず寒いよな」  
垣がおろおろと近寄りジャケットを着せかけてくれた。  
「…そんな一度に聞かれても答えられないよ」  
「……大丈夫そうだな」  
「…うん」  
ほっとした顔になる垣に笑い返す。  
(君って……甘えていただけなのか)  
自分のやり方のままで滝に受け入れて欲しくて。誰かの代用品ではない、『朝倉周一郎』を探して見つけて認めて欲しくて。大切に優しい、かけがえのない友人に。でも。  
「……そんなやり方じゃ伝わらない」  
「え？」  
こうするんだよ、と修一はよろよろと立ち上がった。  
「お、おい、友樹君…？」  
「……こわ、かった、よおっ！」  
思い切り叫んで垣にむしゃぶりつき、押し倒してしがみついた。  
「こわかったあああああ！！！！」「ひえええええ！」  
修一の豹変に垣が泡を食ってじたばたしている。宮田が、なんだそれはあつと顔を引き攀らせ叫んでいる。修一さんっ、と声を響かせ佐野や高野が必死に近づこうとしてくる。雪は冷たく、抱きついた垣の体が唯一の温もりで。  
くすくすくす、と修一は笑った。  
笑いながら、垣に顔を押しつけ、歪んだ顔に零れた涙を隠した。  
垣は滝ではない。  
修一は周一郎じゃない。  
だから。

夢は全て消えるのだ。

## 8. シーン204

『こんなところにするのかい？』  
直樹は滝の後ろを付いていきながら、何回目かのいちゃもんをつける。むっとした顔で滝がやり返す。  
『ここにする！』  
『倒れそうだよ』  
『住めば都だ！』  
『すきま風が入るんじゃない？』  
『セーターの下に新聞紙を巻く！』  
『火事ですぐ燃えそう』  
『あったかくてちょうどいいじゃないか！』  
ふん、と肩を聳やかせて、何が何でもそのアパートに入っていくとしようとする滝の後ろで、直樹の表情は複雑に変化する。じれったそうな悔しそうな、行って欲しくないようなこのまま行かせてやりたいような……微妙な変化の後、直樹は周一郎の口調で滝を引き止める。  
『行かないで下さい、滝さん』  
びくんと滝が肩をこわばらせ、形相物凄く振り返る。  
『周一郎のまねはやめると…』  
言いかけて、ぼかんとした顔になったのは、相手の気配の違いだけではない、目の前に現れた亡霊に度肝を抜かれたからだ。その滝に顔を背け、今は真実、周一郎そのものに戻った直樹が呟く。  
『だって、言わなくちゃ、滝さんは行ってしまおう？』  
照れくさそうな、どこかにはかんだ調子の声に、滝はくるりと向きを変え、唐突にまっすぐアパートへ進んで、周一郎を驚かせる。  
『え、滝さん…』  
慌てて後を追いつつ、滝の片腕を掴んで引き寄せる。と、それに引っ張られたように振り返った滝が、嬉しさを隠せないような顔から一転してむっとした顔になり、ぱんっ、と勢よく周一郎の頬を叩く。  
『っ』『この、馬鹿野郎っ！』  
続く怒鳴り声に、さしもの周一郎も息を呑む。  
『なぜもっと早く生きてるって知らせないんだ！俺がどんな気持ちだったかわかってんのか！そもそも勝手に死ぬのが悪いっ！これからはちゃんと前もって予告してから死ねっ！』  
『は、い…』  
聞かされるたびに理不尽な台詞、滝志郎という男が、今から死にますと宣言する周一郎を放っておくわけもなからうに。けれど、この場面の周一郎はそんなツッコミを思いつかない。正面切って叱られて、そのことばに紛れもなく周一郎への思いやりとか労りとか、つまりは大事にしているということを読み取って、見る見る泣き出しそうな表情になって、素直に静かに頷き返す。その表情は観客にこう伝える。  
滝が居てくれて、嬉しい。この先もずっと、居て欲しい。  
『でも、滝さん』  
だから、気を取り直したように、周一郎はすぐに相手を説得にかかる。  
『僕の所を出たら困るんでしょう？』  
滝が一瞬目を見開き、お前な、とこれは垣のアドリブだ。  
本当ならば唇を綻ばせ、『ああ、わかったよ！お前の所に戻ってやるよ！』と捨て台詞まがいのことばを投げて、ボストンバッグを引っ掛け、道を引き返していくはずだ。  
だが、垣は溜め息まじりにボストンバッグを拾い上げ、  
『困るのはお前じゃないのか？』  
投げられたアドリブに修一は胸の内にとやかく笑って応じる。  
『困りますよ。滝さんが居ると高野の苦情を聞かなくちゃならないし、仕事が忙しいのに新しい絨毯やカーペットや壁の補修の依頼もしくちゃならない』  
え、と滝ならぬ垣が凹んだ。そんなふうには受けられては次が続かない、そう瞳で困られて修一はくすくす笑う。  
頑張ってよ、もう少しでクランクアップなんだしさ。その後垣さんは行っちゃうんだしさ。だから、精一杯考えて。周一郎がなぜそんなことを言い出したのか、本当は何を言いたいのか、読み取って仕掛けてきてくれよ。  
『あー、何、その、何だな、えーと』  
垣は困り果てている。もうすぐ終らなくてはならないのに、その流れに入れない。けれど、何とかして飛び込まなくてはこの映画が終れない。  
ああ楽しいな、と修一は思う。  
芝居は楽しい。自分の全人格を使って、これほど密なやりとりが限界ぎりぎりまで仕掛けられて、しかも喧嘩にならない。こんなに相性のいい役者に、後何人出逢えるだろう。こんなにわくわくして躍り出しそうな瞬間に、後何回加われるだろう。きっと数えるほどだろう、だからこそ、この一瞬を丁寧に。  
(もっと早く気づけばよかった)  
修一は役者が好きなのだ、たまらなく。たとえどれほど才能がないと揶揄されようと、親の七光りの影にくすむしかない輝きだろうと。  
『そ…』  
『そ？』  
『それは大変困ったな』  
『そうなんです、大変困るんです、でも』  
『いや、助け舟になっちゃうけれど。』  
『僕の能力はまだまだ余ってるので、それぐらいの困りごとがないと退屈しょうがないんですよ、この世界は』  
(やば)  
口にしようとした瞬間ひやりとした。これは周一郎の心底の本音、おそらく周一郎自身も気づいていない真実のはず。滝を抱え込みたい。それは滝が自分を思ってくれるからだけではなくて、きつと、滝が居ると退屈しないから。周一郎にとっては、滝が現れるまで、この世界は薄墨煙るモノトーンの色調だったに違いないから。  
(引き出されちゃった、けど、まだ早かったんじゃないか)  
垣の雰囲気によって周一郎の中身が引きずり出されて吐き出された、それは今この映画にふさわしいのか。それを調整するのは監督の役割のはずだけど、今は伊勢は動かない。この暴走がどう転ぶかじっと目を細めて眺めている。  
(ずるいよね、まったく)  
けれど、体を張るのが楽しいのが役者なのだから仕方がない。  
『う』  
垣は沈黙した。やがて、ずんずんといきなり近づいてきて、いきなり修一の頭を抱えてびっくりした。  
『もういいや、とにかく部屋よこせ、何か食べさせろ！』  
『…っく』  
思わず零れた含み笑いを堪えるのに苦労した。ここで周一郎は爆笑しない。修一は大笑いしたくてたまらないが、そこまで外れるのはさすがに許されまいだろう。  
(けど、いつか)  
修一は微笑む。

『猫たちの時間』シリーズに、周一郎が爆笑する場面などない。微笑むかくすくす笑う程度だ。あり得ない、物語の造りの上から、周一郎のキャラクターから。

(けど、いつか)

お前を爆笑させる場面を演ってやるよ、周一郎。

胸の中で嘔く。

(お前がほんとに心の底から世界を愛した時に。今のお前のままで世界に居られるようになった時に)

原作者も反論できないほど、正々堂々、文脈を崩さない中で、周一郎に大笑いをさせてやろう。そうやって、傷ついてずたずたのこのキャラクターを見事に成仏させてしまおう。

(だから今は)

『滝さん』

『ん?』

首を抱えた腕に手をかけ顔を上げる。

(垣さん)

胸の中で響くのは別れのことば。

『行きましょうか』

(さよなら)

全く違う想いを胸にことばを吐くとき、ことばはその意味も形も越えて、厚みを増し、深みを増し、人の心の奥底に届く。

(ことばって究極のツンデレツールだよ)

『ああ!』

ようやく終る、その感情が透ける垣の顔を見上げて、涙がにじみそうになった瞳を細め、修一はにっこりと笑い返した。

「カーツ!!」

カチンコが鳴り響いた。

息を詰めて見守っていた周囲が一気に歓声とどよめきを上げる。

「うわ何なの、あれすげえ!」「ホンと全く違うじゃん!」「なのに何でホンまんまって気になんだ?」「あの最後の顔、ぞくつくこねえ?」「いや来たオレやばいって思ったそっち方向行けんのって」

まさか、やり直しとかなないよね?

そんな勿体無いことしないよね?

周囲の物言いたげな視線をぐるりと見渡して、監督がゆっくり立ち上がる。これみよがしに持っていたメガホンを、

「てめえら、終わりだ!」

でえいい、と空中に投げ上げて、わああと再び周囲が湧いた。伊勢のパフォーマンスなのだ、これ以上は俺が命じてもできねえよという白旗降参の評価。

沸き立つ中で、垣はぼうつとしながら周囲を見回していた。

(何だ、これ)

歓声の渦。興奮のつぼ。開放感に溢れたとんでもないエネルギー。

(すげえ)

修一に追い詰められて、頭が真っ白になっていた。どうにか『滝』をやらなくてはならなかったから、こっちが振ったささやかなアドリブを返されるともう一杯一杯で、それでも真っ白な頭の中に滲み出してくる影のような気配に向かって突っ走っていた。

見えてきたのは、ぼさっと立つ一人の男。

何だこれ? 尋ねた瞬間、答えがわかる。

滝だ。

滝志郎だ。

思っていたよりうんと上背がある。思っていたより落ち着いていて、思っていたよりも静かで……いや、変わり始めた。

瞬きする間に、相手はこちらへ向かって走り出しながら変化していく。動きが軽い。表情が、その、何とと言うが明らかだ。明るくて、陽射しを浴びて、今にも笑い出しそうな、特大の蛍光灯が駆け寄ってくるような眩さ。

(ぶつか!)

垣に突っ込んでぶつかった、と次の瞬間擦り抜けて、耳元に、任せた、と声が響き渡った。とっさに閉じた目を見開いて、前方に見つけたのは、所在なげに立ちすくむ朝倉周一郎、いや、友樹修一。

(泣きそうじゃなか)

精一杯笑ってるのがわかる。満面の笑顔、けれど拳が痛いほど握りしめられていて、ああ、そうだよな、お前はいつもそうやって『友樹修一』を頑張ってきたよな。

だから、今ここでは解き放ってやろう、その『役柄』から。

『親の七光りで売れっ子の見目形のいい二世役者』から。

(よっしゃ)

滝は演じられなくとも、役者としての能力がなくても、垣は今修一のことがよくわかってるから、やってやればいいこともわかっている。近寄って、声をかける、昔からの友人みたいに一気に距離を詰めて、防波堤など吹っ飛ばす。

『もういいや、とにかく部屋よこせ、何か食わせろ!』

小さな頭を抱え込んだ瞬間、何もかもがびたりと嵌まったとわかった。

これは滝じゃない。

いや、脚本に描かれた滝志郎じゃない。

けれど、修一が演じる周一郎も、脚本に描かれた周一郎じゃなかったから、これが一番正しいんだ。外して回り巡って、一番相応しい位置に辿り着いた。

(これが、俺達の『月下魔術師』)

「っっっ!」

どよめく歓声に我に返る。沸き立つ興奮に巻き込まれ、走り寄って近寄ってくる周囲に肩やら腰やら背中やら、むちゃくちゃに叩かれ殴られ笑いかけられる。

その人波の彼方に、二人、人影が見えた。

一人の男は知っている。さっき出逢った男、嬉しそうに笑いながらこちらに手を振っている。もう一人はその男に背中を向けて、半身捻るようにした横顔を見せている。まだ少年でスーツ姿、濃いサングラスの下から流してくる瞳は際立って鮮やかだ。

辿り着いて、手放した。

手放して、見つけ出した。

原作に描かれた滝志郎と朝倉周一郎ではなくて、垣と修一の『猫たちの時間』。

二人は垣が認めたのに気づいたのだろう、周一郎が促し滝が頷き、ゆっくりと踵を返して去っていく。

きっともう二度と会うことはないだろう。

人が、新しい段階に一つ登った時に見える、過去の姿の幻。

懐かしく優しく、二度と戻れないどこかいびつで不十分な自分の姿。

(あばよ)

垣は微笑んだ。

(そうか、こうやって)

人は成長し、新しい世界へ歩み出す。

「……終ったな」

「うん」

すぐ隣で声が応じて、気がつくと修一も同じ方向を見ていた。

「見えたか?」

「…何か、見たことのあるような二人が居たよね」  
「あいつらはあいつらの世界で」  
「僕らは僕らの世界で」  
それぞれに歩き出していく。  
呟くと、修一が頷き、口を噤んだ。  
「……さて、行くか」  
「え？」  
修一がぎょとんと垣を見上げる。  
「慰労会、出ないの？」  
「いや、旨そうなものがわんさか出るんだろ？ 出たいんだけどな、オレの田舎はちっとばかりし辺境で。次の列車逃がすと明日まで帰れない」  
「……そっか」  
「よう、滝志郎！」  
意気揚々と声をかけてきた伊勢監督は、満足そうに続けた。  
「帰るのか、一旦」  
「一旦？ 冗談なしですよ。オレにはもう十分だ」  
「いやまだまだだろ？ まだ逝けるよな？」  
「……今逝ける、って意味が違ってなかった？」  
「大丈夫だ、今回の出来なら『古城物語』も逝ける。クランク・インは1年内だぞ」  
「いや、マジ困りますから！ 家の仕事がありますから！」  
「大丈夫だ、役者を三日やったら終ってる！」  
「あ、もう列車の時間だ、行きますから！」  
「ああ逝ってくれ！ で無事生還しろっ！」 「しねえから！」  
準備してあったのだろう、現場のどこからか取り出してきたボストンバッグを引っ張り出し、伊勢監督に怒鳴り返して行きかけて、修一の元へ駆け戻る。  
「元気で」  
「ありがとう。僕のマンション、ずっとあそこだから。変わったらまた連絡するから」  
「出来たらでいい。まだお母さんのこととか、いろいろあるだろ？」  
「うん…でも、大丈夫だよ」  
修一人なつくこく笑う。陽一は健在で役者を続けているが汚れ役が増えてきているし、雅子は入院中、綾野産業についてはこれから裁判になる。  
「『ると』によろしく」「わかった」  
手をさし出すと握り返す。初めて相手の掌を小さく感じた。  
「じゃ」  
背中を向けて歩き出す、と、背後から駆け寄ってくる足音が響いて、もう一度振り返ると、修一がびくりとして立ち止まり、大声で叫んだ。  
「ありがとう、ございます！」  
ぺこり。  
始めからは考えられない深いお辞儀に戸惑う。  
「オレは何もしていない」  
「それでも、ありがとう！」  
「オレこそ」  
迷惑かけた、いろいろ助かった、最後ちょっとだけ役者を続けたくなくなってしまった、未練がましいそんなこんなは結局口にせずに済んだ。  
「友樹君！」 「宮田っ?!」  
飛び出してきたのは真紅の薔薇を抱えた宮田、満面の笑みで修一に走り寄る。  
「クランク・アップおめでとう！ お祝いの花束だよ！ さあ一緒に二人の未来を語り合おうか！」  
「あ、ありが…え？ えええ？」  
戸惑う修一は、それでも宮田をうまくあしらうだろう。  
(悪いがこの際に退散させてもらうか)  
考えてみれば宮田の活動領域から離れるのは喜ばしい。  
(そうだな、悪いことばかりじゃない)  
自分を慰め、足を速めて厄介な友人から離れようとした垣は、次の瞬間響いた声に引き攀った。  
「あ、かおる～？ 俺、今度お前の田舎に転勤になるから！ 未永く一緒に居ような！」

「修一さん？」  
「ん？」  
「寂しいですか？」  
マンションのいつものソファで、修一は問いかけて来た高野に目をやる。前はこんな会話などなかった。こんな立ち入った会話など。  
めんどくさいと思っていた。けれど、今はこれはこれでいいと感じる自分が居る。  
(僕も変わった)  
「…少しはね。でも」  
膝の上の『ると』を撫でる。  
付けっぱなしにしていたTVが『ロード・オン・ロード』のテーマを鳴らし、『月下魔術師』の予告編を流し出した。トレーラーの45秒枠のものだ。  
「凄いヒットになりましたね」「うん」  
映画館は連日満員、DVD発売も既に公表されており、TVドラマ化も考えられている。スピンオフも計画されつつある。  
『出会いはいつでも  
半分は運命の偶然  
残りは神様のいたずらさ…』  
「神様のいたずら、か」  
「え？」  
「いや」  
ひょいと肩を竦め、修一は悪戯っぽく笑った。  
「僕、何だかもう一度垣さんに会える気がする。何か突拍子もないことでね。『ると』、そうは思わないか？」  
『ると』はぱっちりとした金目で修一を見上げている。

ひょっとしたら、『ると』は、左前になった工場から放り出された垣が2日後に戻ってくるのを知っていたのかも知れないが、例によって澄ました顔で何も答えはしなかった。

おわり

## 周一郎舞台裏

<http://p.booklog.jp/book/111540>

著者 : segakiyui

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/segakiyui/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/111540>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト